

校對源氏物語新釋 卷十六

913.36-Y94-(16)ウ



1200800303379

713.36

Y94

(16)ウ



始



913.36

Y94

(16)



對
原
氏
物
語
新
釋

吉
田
義
則
著



増補
河内本
尾張徳川家所藏
を以て



凡 例

- 一 本書は湖月抄本を底本とし、尾張徳川家所藏の河内本を以て嚴密に對校して本文を立てた。
- 一 繕讀の便宜上、原本の假名書の部分に適宜漢字を充て、宛字を正して、假名遣を統一し、詞と地とを區別し、濁點・句讀點を施し、かつ適當に分節してある。
- 一 底本及び河内本に於て誤刻誤寫の明白なものでも、私意を以て之を改める事なく、又假名遣によつて、意味の兩様に解せられるもの及び兩本の特色とする點は特に其儘存し、原本の倂をどこまでも忠實に傳へる事に力めた。
- 一 對校の記號としては黒點と括弧とを用ひた。本文右傍の六ポイント活字中、括弧を以て圍んだ部分は河内本で、黒點はそれに相當する詞を缺いてゐる事を意味するのである。

例へば、

凡 例

かしこには、宇治の山莊では。物語の姫君が男に盗み出されたといふ筋の物語が當時多かつた事が知られる。

ありし使 母君から文を持参した使者。

いかに聞えむ 何と返事したのかと。
思ひ得るかた ままい思案がつかなく。
かの心知れる 内情を知つて居つたあの右近と侍従とは。

夢にだに 直接逢ふ事は出来な
くても夢には見る事も出来るの
に、その夢にすらゆつくりとも
あなたの方を見る事が出来ず。
いと怖ろしく、本妻方の呪咀な
どが有りはせぬかと怖ろしく。
物へわたらせぬかの御方へ引取
られる日も間近ですが、それ迄
の間私方へお迎へ申しませう。
今日は雨降り、今日は雨降りだ
らうからお迎へする事も出来な
い。よべの御返り 昨夜浮舟が認め
た母君への返書。

蜻蛉

かしこには、人々、あはせぬを求めさわけどかひなし。物語の
姫君の、人に盗まれたらむあしたのやうなれば、くはしくもい
ひ續けず。京より、「ありし使の歸らずなりにしかば、あぼつか
なし」とて、又人おこせたり。鳥、まだ鳥の鳴くになむ出だし立
てさせ給へる」と使のいふに、いかに聞えむと、乳母より初め
て、あわて惑ふこと限りなし。思ひ得るかたなくて、ただ騒ぎ
あへるを、かの心知れるどちなむ。いみじく物を思ひ給へりし
さまを思ひいつるに、身を投げ給へる。とは思ひ寄りける。
泣くくこの文をあけたれば、いとあほつかなさな
まどろまれ侍らぬけにや、今宵は夢にだに打解けても見
えず、物におそはれつつ、心地も例ならずうたて侍るを、なほ
いと怖ろしく。物へわたらせ給はむことは近くなれど、そ
の程、ここに迎へ奉りてむ。今日は雨降り侍りぬべければ、
心もとなく。などあり。よべの御返りをもあけて見て、右近

さればよ、「のちに又あひ見む」
などと死を覺悟して居つた事が
今分つたのである。

塵ばかり少しも隔意なく親し
くし馴れて居つたのに。

氣色をだに、そのそぶりをすら
見せなさらなかつたのが恨めし
い。

いみじく思したる、右近の心に
浮舟の事を思ふのである。

かくなべてならず、かやうな並
はづれた大變な事を思ひ付かれ
るものとは考へられなかつた浮
舟の御性質だのに。

なか／＼、餘りの悲しさに却て
あれこれと考へて見ることも出
来ないで。

いと例ならぬ、いつもとは大變
に、一六〇頁の「からをだに愛
さす」の中に「あなたなる心なり」を
修飾する。

ほかへいき隠れむ、どこかへ隠
れる積りであんな返事をよこし
たのかも知れぬと。

心も深く知らぬ、この御使は事
情をよくも知らぬ男故、委しつ
く尋ねても見事に京へ歸り参つ
た。いたく煩ふとも、浮舟が重病た
とも聞かないし、此頃中氣分が
すくれないとだけはあつたが、
昨日の返事は何のけぶりもなく
書いてあつたのに。

いかなる事か、何事かお耳には
ひつた事があつたと見えて、
宿直する者、番人が怠慢でいけ
ない。

ことづくる事なくて、何か口實
へ参りまして、それが齋のお耳
に入りましたならば、こちらの
秘密を悟られる虞れがございま
せう。

いみじく泣く。さればよ、心細きことは聞え給ひけり、我に、
などか聊か宜ふ事浮舟の心中をのなかりけむ、をさなかりし程より、つゆ

心浮舟から隠し立てされた事なくおかれ奉る事なく、塵ばかり隔てなくてならひたるに、今は

限りの道にしも、我をおくらかし、氣色をだに見せ給はざりけ
るが、つらき事、と思ふに、足ずりといふ事をして泣くさま、若

き子どものやうなり。（侍従かうもの）いみじく思したる御氣色は見奉りわ

たれど、かけても、かくなべてならずとどろ／＼しき事、おほ

し寄らむものとは見えざりつる人の御心さまを、なほ、いかに

しつる事にかと、おぼつかなくいみじ。乳母は、なか／＼物も

覺えて、ただ、「いかさまにせむ、いかさまにせむ」とぞいはれ

ける。（宮内）いと例ならぬ氣色ありし御返り、いかに思ふならむ、
我を、さすがに、あひ思ひたるさまながら、あだなる心なりと
のみ深く疑ひたれば、ほかへいき隠れむとにやあらむと思しさ

わぎて、御使あり。（宇治の邸内の人々）ある限り泣きまどふ程に來て、御文もえ奉

らず。『いかなるぞ』と下衆女に問へば、（浮舟が今晩死されたので）今宵俄に

亡せ給ひにければ、物も覺え給はず。（力と頼む人）頼もしき人もおはしまさ

ぬ折なれば、さぶらひ給ふ人々は、ただ物に當りてなむ惑ひ給

ふ』といふ。心も深く知らぬをのこにて、くはしうも問はで參

りぬ。（使者が宮内に）斯くなむと申させたるに、夢・と覺えていと怪し。いた

く煩ふとも聞かず、日頃惱ましとのみありしかど、昨日の返り

ごとはさりげもなく、常よりもをかしげなりしものを、と思

しやる方なければ、耳時方、いきて氣色見、たしかなる事問ひ

聞け』と宣へば、時耳かの大將殿、いかなる事か聞き給ふ事侍り

けむ、『宿直する者おろかなり』など、いましめ仰せらるるとて、

下人のまかりいづるをも、見咎め問ひ侍るなれば、ことづくる

事なくて時方まかりたらむを、物の聞え侍らば、思しあはする

事などや侍らむ。さて俄に人の亡せ給ひつらむ所は、（無言）ろなうさ

いとおぼつかなくて、事情不明の儘ではすまされぬ。

いかなる事ぞ、どうしたといふのでさう懸いでゐるのかと尋ねて見よ。下々の者といふものは、とかく間違つた事もいふものだ。

かやすき人は、時方のやうな身分の軽い人は出あるきが簡単であるから、
ありなき道に、道中が難儀故身なりをやつして下衆の服装で来て見た處が。

右近に消息、時方は右近に來意を遁じたけれども、取込み中で今宵ばかりこそ、こちらにお越し下さるのも今晩限りでせう。それたにお話も出來ないのが残念です。かくおぼつかなく、こんなに不都合な領では歸られませぬ。も一人の方(侍従)になりとお目に懸りたい。いみじといふにも、いくら悲しいといつて見たところであまりしもあつて、一途方にくれてゐる由を申上げて下さい。

一夜いと心苦しと、先夜匂宮に無駄足を踏ませて、氣の毒がつてゐられた事なども、申上げませう。

あが君、浮舟を呼ぶのである。

明暮見奉りても、毎日お顔を見て居つてもまだ見足りないと思ひ、早く立派な縁についで生きがひのある御生活をなさるのを見たいと、朝夕それをあてにして居たれば、こそ今迄命が續いて來たのです。
えらうじ奉らじ、領の字、自分のものにする事は出來まい。自分の主、帝釋が人の死せるを返して、た故事があらうけれども、明かでない。心得ぬ事ども、前には今晩葬式を替むといつて居りながら、乳母は死骸がないと歎いてゐるから、時方はそれを不審がるのである。

わがしく、人しげく侍らむを」と聞ゆ。身ざりとて、いとあぼつかなくてやあらむ。なほとかくさるべきさまに構へて、例の心知れる侍従などにあひて、「いかなる事を斯くいふぞ」とあないせよ。下衆は僻事もいふなり」と宣へば、いとほしき御氣色も忝くて、夕つかたゆく。

かやすき人は、疾くいきつきぬ。雨すこし降りやみたれど、わりなき道に、やつれて下衆のさまにて來たれば、人多く立ちざわぎて、人々今宵やがてをさめ奉るなり」といふを、聞く心地もあさましく覺ゆ。右近に消息したれども、えあはず。右近、只今物覺えず、起きあがらむ心地もせでなむ。さるは、今宵ばかりこそ、斯くも立寄り給はめ。え聞えぬ事」といはせたり。時、さりとて、かくあぼつかなくて、は、いかが歸り、侍らむ。今一所だに」とせちに言ひたれば、侍従ぞあひたりける。時、いとあさましく、思しもあへぬさまにて亡せ給ひにたれば、いみじといふにも、飽かず夢のやうにて、誰もく感ひ侍るよし、申させ給へ。すこし心地も、どめ侍りてなむ。日頃も物あほしたりつるさま、一夜いと心苦しと思ひ聞えさせ給へりし有様なども、聞えさせ侍るべき。このけがらひなど、人の忌み侍る程過ぐして、今一たび立寄り給へ」といひて、泣く事、いみじ。内にも泣く聲々のみして、乳母なるべし、あが君や、いづ方にかあはしましぬる。歸り給へ。むなしきからをだに見奉らぬが、かひなく悲しくもあるかな。明暮見奉りても飽かず覺え給ひ、いつしかかひある御さまを見奉らむと、あした夕べに頼み聞えつるにこそ命も延び侍りつれ。うち捨て給ひて、かく行方も知らせ給はぬこと。鬼神も、あが君をば、えらうじ奉らじ。人のいみじく惜しむ人をば、帝釋も返し給ふなり。あが君を取り奉らむ」といひつづくるが、心得ぬ事どもまじるを、あやしと

ふにも、飽かず夢のやうにて、誰もく感ひ侍るよし、申させ給へ。すこし心地も、どめ侍りてなむ。日頃も物あほしたりつるさま、一夜いと心苦しと思ひ聞えさせ給へりし有様なども、聞えさせ侍るべき。このけがらひなど、人の忌み侍る程過ぐして、今一たび立寄り給へ」といひて、泣く事、いみじ。内にも泣く聲々のみして、乳母なるべし、あが君や、いづ方にかあはしましぬる。歸り給へ。むなしきからをだに見奉らぬが、かひなく悲しくもあるかな。明暮見奉りても飽かず覺え給ひ、いつしかかひある御さまを見奉らむと、あした夕べに頼み聞えつるにこそ命も延び侍りつれ。うち捨て給ひて、かく行方も知らせ給はぬこと。鬼神も、あが君をば、えらうじ奉らじ。人のいみじく惜しむ人をば、帝釋も返し給ふなり。あが君を取り奉らむ」といひつづくるが、心得ぬ事どもまじるを、あやしと

たしかに聞召さむと句宮が事
情をたしかめたい爲に名代とし
て遣はされた大連な使者なので

たがふ事まじらば 私の復命と
矛盾した事でもあつては
又さりととも、いくら何でも死
なれる事はあるまいと、それを
あてにして貴女方に對面して事
情をたしかめて來よと仰せられ
たお心持をありがたうと思は
れませぬか。異朝、支那の事
ふかきためし、迷ひ方が深い
をかかふ。句宮が浮舟に對す
る程の深い懸は他にあるまい
かくて例ならぬ、こんなとつ
な事といふものは自然知れて來
るものだ。「惑ひ侍らむ」を修飾す
る。聊かにも「思ひ寄るべき事
あらむには」を修飾する。誰か
が浮舟を隠されたに違ひない
と思ひ當るやうなふしが一寸な
りありますならば、何でこんな
皆が途方にたれて居りませう。
存思ひ當るふしがない、従つて生
存の意。

この御事まは 浮舟は句宮を脚
一つに勿體ない戀しいと心から
思つてゐられたので精神も狂つ
たのでせう。

心と身を われとわが命を絶た
れたやうです。一途な方
のあはれないやうな事をしやべつ
てゐられるのでせう。
さすがに 事實を話しながらも
さすがに 立ちながら御悔み
申すのもあまり事が簡略に過ぎ
るやうです。

今更人の知り 句宮との關係が
今更人に知られるのも、故浮舟
の爲には却て結構な運命である
事分る譯のものではあるが、忍
忍が給ひし事なれば、又漏らさ
せ給はば、なかく、めでたき御
宿世見ゆべき事なれど、忍
舟は秘密にして居られたので、
濟きして下さるのが故人に對す
る御好意でせう。

じねんに 自然とそぶりにそれ
と時方に氣どられる處がある
とかくそそのかし、
めて時方を早く歸らせた。

思ひて、時方なほ宜へ。もし人の隠しも聞え給へるか。たしかに
聞召さむ、と御身の代りにいだし立てさせ給へる御使なり。今
は、とてもかくてもかひなき事なれど、のちにも聞召しあはす
る事の侍らむに、たがふ事まじらば、参りたらむ御使の罪にな
るべし。又さりととも頼ませ給ひて、君だちに對面せよと仰せ
られたる御心ばへも、忝しとは思されずや。女の道にまどひ給
ふ事は、人のみかどにも、ふかきためしどもありけれど、又か
かる事、この世にはあらじとなむ見奉る」といふに、げにいと
あはれなる御使にこそあれ、隠すとすとも、かくて例ならぬ事
のさま、あつづから聞えなむ、と思ひて、侍等なか、聊かたて
も、人々や隠い奉り給ふらむと思ひ寄るべき事あらむには、斯く
しもある限り惑ひ侍らむ。日頃いといみじく物を思し入るめり
しかば、かの殿の、煩はしげにほのめかし聞え給ふことなども
ありき。御母に物し給ふ人も、斯くののしる乳母なども、初め

の方に引取られてゆくやうに、御使に、つてをがました
まり知りぞめたりし方に渡り給はむとなむ急ぎ立ちて。この御
事をば、人知れぬさまにのみ、忝くあはれと思ひ聞えさせ給へ
りしに、御心亂れけるなるべし。あさむしうて、心と身を
亡くなし給へるやうなれば、斯く心の惑ひに、ひがしく言
ひつづけらるるなめり」と、さすがにまほならずほのめかす。
心得がたく思ひて、時方さらば、のどかに参らむ。立ちながら侍
るも、いと事をきたるやうなり。今御みづからもあはしましな
む」といへば、あななたじけな、今更・人の知り聞えさせむも
なき御ためは、なかく、めでたき御宿世見ゆべき事なれど、忍
び給ひし事なれば、又漏らさせ給はば、なかく、めでたき御
宿世見ゆべき事なれど、忍
舟に對して、常ならぬ死に方を浮舟が
志に侍るべき、ここには、かく世づかざ亡せ給へる由を人に聞
かせじとよろづにまぎらはすを、じねんに事どもの氣色もこそ
見ゆれ、と思へば、とかくそそのがしやあつ。雨のいみじかりつる紛れに、母君のわたり給へり。更にいはむ

目の前に、見てゐる前で死なせ
たならば、その悲しさは切なる
ものがあつても、それは世間並
の事で他に例のある事です。
かかる事ども、かうした句宮
との間違ひがあつて深く心痛し
てゐられたとも知らないから。

さてはかの怖ろしと、浮舟が
ねん／＼怖れて居つた女二宮の方
に仕へてゐる腹黒い乳母でも。

たばかりたる。浮舟を誘拐した
人でもあらう。
今参りの新参で氣心の知れぬ
女房でも居ないか。

ここに、此處では疎な仕事も
出来ず。今とく参らむ、すぐ歸つて参り
ます。皆その急ぐべき、京へ引越しの
支度物を携へて歸宅してしまひ
ました。

方もなく、其目の前に亡くなしたらむ悲しさは、いみじくとも、
世の常にてたぐひある事なり。これはいかにしつる事ぞ」と感
ふ。かかる事どもの紛れありて、いみじう物思ひ給ふらむとも
知らねば、身を投げ給へらむとも思ひも寄らず、鬼やくひつら
む、狐めくものや取りもていぬらむ。昔物語の怪しき物の
事の譬ひにか、さやうなる事もいふなりし、と思ひいづ。さて
はかの怖ろしと思ひ聞ゆるあたりに、心などあしき御乳母やう
の者や、かう迎へ給ふべしと聞きて、めざましがりて、たばか
りたる人もやあらむ、と下衆などを疑ひ、「今参りの心知らぬや
ある」と問へば、女房いと世離れたりとて、ありならはぬ人は、
ここに、はかなき事もえせず、「今とく参らむ」といひつつなむ、
皆その急ぐべきことどもなど取り具しつ、歸り出で侍りにし
とて、もとよりある人だに、かたへはなくて、いと人すくなな
る折になむありける。侍従などこそ、日頃の御氣色思ひ出で、

幸影に、一五九頁にあつた浮
舟の歌。

河の方を、浮舟は入水したも
と考へてゐるから。
さて亡せ給ひけむ、さうして即
ち入水して死なれた浮舟だの
それを行方わからぬもの
やうに過ぎ立つて、母君や兼
宮などが、浮舟は亡くなつた
か姿を隠されたか、一體ど
うしたのかと、右近や侍従が
私達をお疑ひになるから、私
達とつて迷惑な事だ。私達
忍びたる以下、右近侍従二人相
談の詞、あの秘密の一件とて
浮舟から進んで死なされた事
も別に、親かして死なされた
すも、相かして死なされた事
な方々から、手は句宮といふ
死の悲しさの上、どうなつた
添へて、あれこれ不安な事
點のゆくやうにしてあげませ
う。あつたか、死骸を前にして
葬式を営むといふのが世間の常
なもので、世間並に、死骸も
世づかぬ氣色に、死骸もない
日も立つては、

「身を失ひてばや」など泣き入り給ひ、し折々の有様、書きおき
給へる文をも見るに、「なき影に」と書きすさび給へるものの、
硯の下にありけるを見つけて、河の方を見やりつつ、響きの
しる水の音を聞くにも、うとましく悲しと思ひつつ、侍従亡
せ給ひけむ人を、とかくいひさわぎて、いづくにもいづくにも
いかなる方になり給ひにけむと思し疑はむも、いとほしき
事」といひあはせて、「忍びたる事とて、御心より起りて
ありし事ならず。親にて、なきのちに聞き給へりとも、いと
やさしき程ならぬを、ありのままに聞えて、かくいみじくおほ
つかなき事どもをさへ、かた／＼思ひ惑ひ給ふさまは、すこし
あきらめさせ奉らむ。亡くなり給へる人とても、骸をおきても
てあつかふこそ世の常なれ。世づかぬ氣色にて日頃も経ば、更
に隠れあらじ。なほ聞えて、今は世の聞えをだにつくろはむ」と
と語らひて、忍びてありしさまを聞ゆるに、いふ人も消え入り、

わがたゆく、自分の緩慢な世間
並外れて懸路にうとい心が悔し
く。備ませ給ふ。御母女三宮の御病
氣平癒の祈禱に山籠りして居りな
がら、浮舟の氣で煩悶して居る
のも異なる事故。大した事でもありま
せんが、近親中に不吉な事を聞
きましたので、心の落着かない
間だけでも遠慮して御側には参
りませぬ。

うつつの世には、浮舟の在世中
は、なぜ自分はあるに熱も持
たず、飄氣に過した事だらう。

かかる事の筋に、自分は女の事
でひどく苦勞する運命であつた
のだ。俗人。

人の心を、人に道心を起させよ
うとして佛のなさる方便は。

思ししづまる、心は落着いてく
るといふと、浮舟生前のさまが
懇しく悲しく追想される。

かしこく、うまく人前を取繕つ
た積りではゐられるけれども、
自然歎きのさまが目だつので。

この御氣色を、句宮の御様子
を聞きなすので。
なほよその、やはり表面の文通
ではなかつた。遠い關係だけ
で見給ひては、句宮が御覽になつ
ては、せむしやうな浮舟だ。
おなかへ思召し、親しい身内同
志であるだけに、普通の場合よ
り、自分にとつて、馬鹿を見る
結果になる事必定だ。

あきたるに、心やすくて、毎宮も浮舟を口説くやうな悪い事をなまつたのだから人もいひをかし給ふなりけむかし、
と思ふにも、わがたゆく世づかぬ心(を)のみくやしく、御胸いた
く覺え給ふ。備ませ給ふあたりに、かかる事思し亂るるもうた
てあれば、兼が石山から景にまはしぬ。(女三宮)宮の御方にもわたり給はず、馬事
事しき程にも侍らねど、浮舟の事ゆゆしきことを近う聞き侍れば、心の
亂れ侍る程もいましくして、(な)など聞え給ひて、盡きせず
は、(い)かなくいみじき世を敷き給ふ。ありしさまかたちいと愛敬づ
き、をかしかりしけはひなどの、いみじく戀しく悲しければ、
うつつの世には、など斯くじも思ひ入れずのどかにて過ぐしけ
む、只今は、更に思ひじづめむ方なきままに、くやしき事のか
ず知らず、かかる事の筋はつけて、いみじう物思ふべき宿世な
りけり、出家を心算して居つた自分がさま殊に心ざしたりし身の、思ひの外に斯く例の人に
てながらふるを、佛などの憎しと見給ふにや、人の心を起させ
むとて、佛のし給ふ方便は、慈悲をも隠して、斯様に人を苦しめ給ふのだかやうにこそは

あなれ、と思ひつづけ給ひつつ、行ひをのみし給ふ。
かの宮はた、まして二三日は物も覺え給はず。正氣もうつつし心もなき
さまにて、いかなる御物怪ならむ、など騒ぐに、人々がやう／＼涙盡
し給ひて、思ししづまるにしもぞ、ありしさまは戀しういみじ
く思ひ出でられ給ひける。人には、佛人にはただ、(おほ)御病のあもきさま
をのみ見せて、斯くすするなるいやめの氣色知らせじと、かし
こくもて隠すと思しけれど、理由もない泣面の振振りをあのづからいとしかめければ、
人々「いかなる事に斯く思しまどひ、御命も危きまで沈み給ふらむ」
といふ人もありければ、かの殿にも、いとよくこの御氣色を聞
き給ふに、案の定さうださればよ、なほよその文通はしのみにはあらぬなり
けり、見給ひては、必ずさ思しぬべかりし人ぞかし、ながらへ
ましかば、ただなるよりは、わが爲にをこなることも出で來な
まし、と思すになむ、(の)こがるる胸も、寧ろ死んでくれたのがましであつたすこしさむる心地し給ひ
ける。

専々しききは 大した身分でもない浮舟位の者の忌の爲に引籠つてゐて。式部卿の宮。源氏の御弟で八宮の御兄。燕の御叔父。服喪。

心のうちには 燕は心中では浮舟の爲に著てゐる喪服の襟にも考へられて似合はしく思はれる。人々まかして見舞の人々も句宮から退出してしんみりとした夕暮である。病臥ししづみてのみ 本當の御病氣ではないのだからである。

見え給はむも 句宮は燕におあひになるのも何となく氣がさすし。内心疾しい所があるから。

つつしむべき 氣をつけねばならぬ病氣だと氣が注意してくれげに。お上や本宮の御心配下さるのし御氣遣いしないと世の無常さを思ふの意。

句宮の御見舞に 宮の御とぶらひに、日々に参り給はぬ人なく、世のさわぎとされる頃、事々しききはならぬ思ひにこもりゐて、参らざらむもひがみたるべし、と思して、参り給ふ。その頃、式部卿の宮と聞ゆるも亡せ給ひにければ、御叔父の服にて薄鈍なるも、心のうちにはあはれに思ひよそへられて、つき／＼しく見ゆ。すこし面瘦せて、いとどなまめかしき事まさり給へり。人々まかして、しめやかなる夕暮なり。宮、臥ししづみてのみはなき。御心地なれば、うとき人にこそ逢ひ給はぬ、御簾の内にも例入り給ふ人には、對面し給はずもあらず。見え給はむもあいなくつつましく、見給ふにつけても、いとど涙のまづせきがたさを思せど、思ひしづめて、身あどろ／＼しき心地にも侍らぬを、皆人は、「つつしむべき病のさまなり」とのみ物すれば、うちにも宮にも思しさわぐがいと苦しく、げに世の中の常なきをも、心細く思ひ侍る」と宣ひて、あしのごひ紛らはし給ふと思す涙

の、やがて滞らずふり落つれば、いとはしたなけれど、必ずしもいかに心得む、ただためめしく心弱きとや見ゆらむ、と思すも恥かし。さりや、ただこの事をのみ思すなりけり、いつよりなりけむ、我をいかにをかしと、物笑ひし給ふ心地に、月頃思しわたりつらむ、と思ふに、この君は悲しさは忘れ給へるを、こよなくもあろかなるかな、物のせちに覺ゆる時は、いと斯からぬ事につけてだに、空飛ぶ鳥の鳴きわたるにも催されてこそ悲しけれ、わが斯くすすろに心弱きにつけても、もし心を得たらむに、さいふばかり、物のあはれも知らぬ人にもあらず、世の中の常なき事を、しみて思へる人しもつれなきと、羨しくも奥の心にも思さるるものから、眞木柱はあはれなり。これに向ひたらむさまも思しやるに、形見ぞかしたもうちまもり給ふ。やう／＼世の物語聞え給ふに、いとこめてしもはあらしと思して、昔より、心にこめて暫しも聞えさせぬこと残し侍る限り

必ずしもいかに これも浮舟の故の涙だと感付くとはきまつたものでもあるまい、只女々しく氣が弱いのだとも思ふ事だらう。ただこの意を 句宮は只管浮舟の事ばかり思つてゐられるのであつたのだ。我をいかにをかしと「月頃思しわたりつらむ」に讀く。物笑ひし給ふ 句宮はよく人の事を笑はれる方だから。この君は 燕はさう考へると悲しさをさめた氣持で知られるのし、句宮はさうとは知らず。こよなくも 燕といふ人は冷淡な人だ、歎きの切なる折には、こんな死別といふやうな事ではなかつたら。もし心を得たらむに この涙を浮舟故とし燕が感付いたならは、さまで人情を解せぬ人でもない。世の中の常なき 世の無常を身にしみて感じてゐる人の方が却つて冷靜なものだ。

眞木柱は 浮舟の形見の燕を見ても感無量である。伊行釋引歌一わきもこが来ては寄り添ふ横柱をもむつまじやゆかりと思へば、これに向ひたらむ 燕に對坐して居つたであらう所の浮舟のさまを想像して御覧になると。

いといぶせくのみ胸に物がこ
だはつてゐる様な気がして仕方
る機会が得られなかつたの意
宿直などに「えさぶらはす」に
お訪ねも出来ず、するくりに過
して来ました。

同じゆかりなる人 大君の妹の
浮舟が思ひがけない所にゐると
聞きつけました。
時々見て見つけくや 時々は逢
ふ事も出来ようかと思ひました
所、生憎女二宮と結婚した當時
で、人からつまらぬ非難を受け
さうな折でしたので。

又かれも 浮舟も私一人を力に
しようといふ考へも別にないの
ではないかとと思ひました。
「見給へつれど」は湖月抄本に
「見給へつれど」とある。
中んごとなく 本妻として尊重
する積りならばともかく、世重
してやるとして別に不都合もな
いなどと思つたりして、氣樂な
可憐な女と思つて居つた浮舟が
はかなく死んでしまつたといふ
事は、世は無常であるといふ意
味で考へて見るだけでも悲しい
事です。
いとかは こんなに悲しきう
な様子を見せたくはない
馬鹿らしいと察へては見るもの

あやしく 落着いた薫にしては
變だ、自分に対する怨みの意味
があるのかも知れぬの意。

いかにとも どうしたのかとお
見舞も申上げたく思つては居り
ながら、特に隠しておいでの方
と聞きましてので遠慮して居り
ました。

さる方にて 貴方の隠し妻に
でも差上げたひと思つて居つた
人なので、ひよつとしたり貴
方の隠し妻であつたかも知れま
せぬ、お邸に出入する縁故もあ
つたのですから。

御心地例ならぬ 御氣分のわる
い間は、つまらぬ俗事にかゝり
あつて御氣にとめられるのもつ
まらぬ事です。十分御大事に。
いみじくも 以下歸宅後の薫の
心の中。

當時の御門后 現在帝位にまし
ます主上と明石中宮とが。

は、いといぶせくのみ思ふ給へられしを、
今では私もなまじつか高貴となつて居りま
すし
になりにて侍り、まして御いとまなき御有様に、心のどかに
おはします折も侍らねば、宿直などに、その事となくてはいえさ
ぶらはす、そこはかとなくて過ぐし侍りてなむ。昔御覽せし山
里に、はかなくて亡せ侍りにし人の、同じゆかりなる人、
常陸介方
ぬ所に侍りと聞きつけ侍りて、時々見て見つけくやと思ひ給へ
しに、あいなく人の謗りもはべりぬべかりし折なりしかば、こ
の怪しき所におきて侍りしを、をさくまかりて見る事もなく、
又かれも、なにがし一人をあひ頼む心も殊になくて、やありけむ
とは見給へつれど、やんごとなく物々しき筋に思ひ給へばこそ
はあらめ、見るにはた殊なる咎も侍らずなどして、心やすくら
うたしと思ひ侍りつる人の、いとほか、なくなり侍りにけ
る、なべての世の有様を思ひ給へつづけ侍るにも、悲しくなむ。
聞召すやうも侍るらむかし」とて、今ぞ泣き給ふ。これも、い

とからは見え奉らじ、をこなり、と思ひつれど、こはれそめて
はいととめがたし。氣色の聊か亂りがほなるを、あやしくいと
ほしと思せど、つれなくて、身いとあはれなる事にこそ。昨日
ほのかに聞き侍りき。いかにとも聞ゆべく思ふ給へながら、わ
ざと人に聞かせ給はぬ事と聞き侍りしかばなむ」と、つれなく
宣へど、いと堪へがたければ、言づくなにておはします。馬さ
る方にては御覽せさせばやと思ひ給へりし人になむ。あつづか
らさもや侍りけむ、宮にも参りかよふべき故侍りしかば」など、
すこしづつ氣色はみて、馬、御心地例ならぬ程は、すずろな
る世の事聞召し入れ御耳驚くもあいなきわざになむ。よくつつ
しませ給へ。など聞えおきて、出で給ひぬ。いみじくも
思したりつるかな、いとほかなかりけれど、さすがに高き人の
宿世なりけり、當時の御門后の、さばかりかしづき奉り給ふ御
子、顔かたちよりはじめて、只今の世にはたくひおはせざめり、

とからは見え奉らじ、をこなり、と思ひつれど、こはれそめて
はいととめがたし。氣色の聊か亂りがほなるを、あやしくいと
ほしと思せど、つれなくて、身いとあはれなる事にこそ。昨日
ほのかに聞き侍りき。いかにとも聞ゆべく思ふ給へながら、わ
ざと人に聞かせ給はぬ事と聞き侍りしかばなむ」と、つれなく
宣へど、いと堪へがたければ、言づくなにておはします。馬さ
る方にては御覽せさせばやと思ひ給へりし人になむ。あつづか
らさもや侍りけむ、宮にも参りかよふべき故侍りしかば」など、
すこしづつ氣色はみて、馬、御心地例ならぬ程は、すずろな
る世の事聞召し入れ御耳驚くもあいなきわざになむ。よくつつ
しませ給へ。など聞えおきて、出で給ひぬ。いみじくも
思したりつるかな、いとほかなかりけれど、さすがに高き人の
宿世なりけり、當時の御門后の、さばかりかしづき奉り給ふ御
子、顔かたちよりはじめて、只今の世にはたくひおはせざめり、

隠し給ひしが、浮舟の種姓を隠してゐたのが恨めしい。蓋して中君が御宮を恨む阿と見てあるが誤である。中君は浮舟の姉であるから、御宮も他人よりも陰まじくなつかしく思召す。

いと夢のやうに、御宮は浮舟の事がかく、に夢のやうで、なほいかで、どうしてあんなに急死したのだらう、それのみが氣になるので。

心憂き事、宇治に居ておつた思ひが、持ちもさうもないので、言ひかきもななくて、京に歸つて念佛の僧どもを、宇治の人達は念佛の僧等を頼りにひっそり暮してゐる所へ、時方等が右近を迎へて来たので。前に御宮が来られた時、仰々しく急死に夜廻りして驚かした内舍人等も、今度は別に替めだてもしない。

思ひ出づるも、右近等の心中といふ説と時方等の心中と見る説とある。

かく宣はせて、御宮が斯様々々仰しやつて、お迎へに参上しました。人も怪しと、私が御宮へ参上致しましては。

参りても、参上した所で事情がはつきりする程に、しつかりお話し申上げることの出来さうな氣も致しませぬ。「はかしく、はかしく」は「物聞えさすべし」に係る。あからさまに一寸よそへ行くとは、強いつてお伺しても少しは似合はしい頃になりましてから、今は忌に閉ぢ籠つてゐる際だから、外出は似合はしくないの意。

伊にいと夢のやう、前に「いと夢のやうにのみ」とあつた詞を受ける。

大夫、時方は左衛門大夫であるから斯くいふ。

ふ・もいと苦しければ、浮舟との關係をありしさまなど、すこしは取りなほしつゝ語り聞え給ふ。身隠し給ひしが「つらかりし」など、泣きみ笑ひみ聞え給ふにも、ことごと他人よりは睦まじくあはれなり。事々し真事が大變で折日正しくて御宮が一寸御氣さても大變をされる六君の所(六條宮)に居つては、御見舞の客も例ならぬ御事のさまも、あどろき感ひ給ふ所にては、六君の父少輔御とふらひの人しげく、六君の兄父あんど、せうとの君だちひまなきも、いとうるさきに、中君の母ここはいと心やすくて、なつかしくぞ思されける。

いと夢のやうにのみ、なほいかで、いと俄なりける事にかはとのみ、いふせければ、時方や大内記等を例の人々召して、右近を迎へにつかはす。母君も、更に、宇治川のこの水の音けはひを聞くに、我もまるび入りぬべく悲しく、心憂き事のどまるべくもあらねば、いとわびしうて歸り給ひにけり。念佛の僧どもを頼もじきものにて、いとがすかなるに、御宮の使者が入り来たれば、事々しく俄に立ちめぐりし宿直人どもも見咎めず。あやなくに限りの度し、も入れ奉らずなりはし。

よ、と思ひ出づるもいとほし。御宮といふ方は不都合な事にやまもなさる方ださるまじき事を思ほし、御宮が宇治に過つて来られたこゝに來ては、あはしましし夜な夜

事の、見苦しう見奉れど、時方等の心にここに來ては、御舟のあてになの有様、かの夜川向ひの裏に抱かれ奉り給ひて舟に乗り給ひしけはひの、あてにうつくしかりし事などを思ひいづるに、強氣な人心強き人なくあはれなり。右近あひて、時方にいみじう泣くもことわりなり。時方かく宣はせて、御使になむ参り來つる」といへば、右近今更に、人も怪しと

いひ思はむもつつましく、参りても、はかしく聞召しあき御舟のら・むばかり物聞えさすべき心地もし侍らず。この御忌果てて、心のかきあからさまに物になど入に、いひなさむも、すこし似つかはしかりぬべき程になしてこそ、皇明まで長らへられさうもないが心より候かの命侍らば、聊か思ひしづまらむ折になむ、御宮の仰言なくとも参りて、「けにいと夢のやうなりし事どもも、語り聞え・・・まほしき」といひて、今日は

動くべくもあらず。大夫も泣きて、時方更に、この御中のこと、こまかに知り聞えさせ侍らず。私は何も分らぬ者ですが物の心も知り侍らずながら、た

御文を 浮舟が自殺を決意して
文を焼いた事は一五二頁にあ
つた。かのくわんじゆに 母君への返
事の二首の歌を巻数に書きつけた
事は浮舟巻の終りにあつた。

あなたも 中君もお前の主人の
姉だからまるきりの他人でもな
い。さてさぶらむに 仰せに従つて
當家にお仕へ申すにつけても
河内本に従ふ。思ひ給ふれば
思ひ給へれば「思ひ給ふれば」
とあるべきで、河内本はその意
味である。今この御果など おつつけ浮舟
の忌中がすんでから参ります。

さまへに 髪のはははの具で
衣裳は衣裳で、それへ浮舟の
ために調へられた品は多かつた
が皆取出すのは仰々しいので、
只侍従に與へていい程度の贈物
をなさつた。

すずるに 「思ひわぶれど」を修
飾する。とりたてて困るだけの
理由はないが、何となく、
忍びで見つづ 人にこつそりと
二人だけで櫛箱や衣篋を見て
つれづれなるさまに「見ても」
を修飾する。こまかに今めかしう、何もかも
如何にも流行型に拵へてあるの
を見て。斯かる御服に こんな喪中に

おぼつかなきに 宇治の事が氣
がかり故、じつとして居られな
くて、やはりやつて来られた。

この父親王 八宮。浮舟のやう
な思ひもよらぬ末々の人の上ま
で、思ひもよらぬ末々の人の上ま
で、物見ひばかりしてゐる事である
よ。

心ぎたなき 後には心得違ひを
して、右近に懸想するといふや
うな、さしたない事をした爲に佛
が私に、ひ知らせるのだから、
ありけ、ひ知らせるのだから、
物しづめるなり」に續く。

ばかり物を思ひ立ちてさる水にあはれけむと思しやるに、
れを見つけて引きとめたら、
かひなし。御文を焼き失ひ給ひしなどに、
らざりけむ」など、夜一夜語り給ふに、聞え明かす。かのく
わんじゆに書きつけ給へりし母君の返りごとなどを聞ゆ。何は
かひのものとも御覽せざりし人も、睦まじくあはれに思さるれ
ば、身わがもとにあれかし。あなたももて離るべくやは」と宣
へば、身さてさぶらむにつけても、物のみ悲しからむを思ひ
給へれば、今この御果など過ぐして」と聞ゆ。身文も参れ」な
ど、この人をさへ飽かずおぼす。曉・歸るに、かの御料にとて
まうけ・させ給へりける櫛の箱一よろひ、衣篋一よろひ、贈物
にせさせ給ふ。さまへにせさせ給ふ。事ばかりけれど、
あどろくしかりぬべければ、只この人に課せたる程なりけり。
侍従は何れも来たのに、
何心もなく参りて、かかる事どものあるを、人はいかが見む、

すずるに、むつかしきわざかな、と思ひわぶれど、
えかへさむ。右近と二人忍びて見つづ、つれづれなるさまに、
こまかに今めかしうし集めたる事どもを見ても、いみじう涼く。
装束も、いとうるはしうし集めたる物どもなれば、「斯かる御服
に、これをいかでか隠さむ」など、もてぞ煩ひける。
大將殿も、なほ、いとおぼつかなきに、思しあまりておぼした
り。道の程より、昔の事どもかき集めつつ、いかなる契りにて、
この父親王の御もとに來そめけむ、かかる思ひかけ御果まで思
ひあつかひ、このゆかりにつけては、物をのみ思ふよ、いと尊
くおはせしあたり、佛をみるべにて、後の世をのみ契りしに、
心ぎたなき末のたがひめに、思ひ知らするなめり、とぞ覺ゆる。
右近を召しいでて、
ほ盡きせずあさましうはかなければ、忌の残りもすくなくなり
ぬ、過ぐしてと思ひつれど、しづめあへず物しづるなり。

尼君なども辨尼なども様子は知つてゐる事故。
事たがひて間違つて薫のお耳に入つてしまふだらう。
怪しき事の筋に句宮と浮舟との秘密關係については、嘘もいひなれたのだが。

思はしう 後の問題になつては思つたので。
ありしさまの ありのままの事を。浮舟入水の事情を。

更にあらじと そんな事は絶対にありさうにも考へられない。なべての人の誰が思つたりいつたりする嫉妬のやうな事なへ減多に口にもしない大やうな浮舟が、何でそんな怖ろしい事を思ひ立つたのか、この女房等を取柄つてどんな言ひ方をしたるのだらう。句宮と浮舟との關係はつきり物語つてゐる。この有様も 宇治邸の縁子もあのやうにそれら顔をしてゐるが、それが何故であるかは素振りに自然わかる筈のものだ。
上下の人 山莊に仕へて居る女房達の事。

泣きさやぐをと 自分の顔を見てかきさやぐをわくのは、わがががあるのだと思召したから、我とおろかなりと私の冷淡を恨んで還世なさるやうな事はよもやあるまいと思ふ。

し給はむ 河内本に従ふ。

さればよ 案の定問題になつたと思つて。
おのづから 何かの序にもうお聞きのこと存じます。

かくおはしますを かうして貴方が通つておいでになるのをお待ち申上げる事によつて。

心のどかなる... 給ふべきやうにこの一句は「思しわたるめぐりしを」に續く。稀々でもゆつくりとお目に懸る事が出来るやうにと、早くさうなりたいなどとは言葉に出して仰しやらないけれども、さう思ひ續けてゐられたやうですが。

筑波山 浮舟の母君の事。常陸介の妻故いふ。

なる心地にてか、俄にはかなくなり給ひにし」と問ひ給ふに、
尼君なども氣色見てければ、遂に聞きあはせ給はむを、なかなか、隠しても、事たがひて聞えむに、そこなは、れぬべし、怪しき事の筋にこそ空言も思ひめぐらしつつならひしか、かくまめやかなる御氣色にさし向ひ聞えては、かねて、といはむかくいはむと思ひまうけし言葉をも忘れ、煩はしう覺えければ、ありしさまの事どもを聞えつ。あさましう思しかけぬ筋なるに、
物もとばかり宜はず。更にあらじと覺ゆるかな、なべての人の思ひいふ事をも、こよなく言づくに、おほどかなりし人は、いかでさるおどろくしき事は思ひ立つべきぞ、いかなるさまにこの人々もてなしていふにかあらむ、と御心も亂れまさり給へど、宮もおぼし歎きたる氣色いとしるし、ここの有様も、しかつれなしづくりたらむけはひは、おのづから見えぬべきを、かくおはしましたるにつけても、悲しくいみじき事を、上下の

人つどひて泣きさやぐを、と聞き給へば、
御供に具して失せたる人やある。なほありけむさまをたしかにいへ。我をあるかなりと思ひて、そむき給ふことはよもあらじとなむ思ふ。いかやうなる、忽にいひ知らぬ事ありてか、さるわざはし給はむ。
我なむえ信ずまじき」と宣へば、いといとほしく、さればよと煩はしくて、おのづから聞召しけむ。もとより思すさまならで生ひ出で給へりし人の、世離れたる御すまひのちは、いととなく物をのみ思すめりしかど、たまさかにも、かく、あはしますを待ち聞えさせ給ふに、もとよりの御身の歎きをさへ慰め給ひつつ、心のどかなるさまにて時々も見奉らせ給ふべきやうに、いつしかとのみ言に出でては宜は、ねど、思しわたるめりしを、その御本意かなふべきさまに承る事どももはべりしに、かくてさぶらふ人どもも、嬉しき事に思ひ給へ急ぎ、かの筑波山も、からうじて心ゆきたる氣色にて、渡らせ給はむ事を

かろむべき事をぞすべき。蕉の意中。意中から地の文にいひついで「供養すべきよし」と書いたものである。

あらましかば、浮舟が存命ならば、何で今晩京に歸らうぞと蕉は思召す。

頼むに、浮舟の死骸をすらし出さずしにまつた事。

うつけ 貝敷。ゆる方なく、どう考へても氣は紛れない。

京に子生むべき。京の常陸介邸で次女がお産をするので、穢れを忌み騒いでゐるので。

ゆゆしければ、死の隣で不吉な身故産婦の所へも行かれない。

あさましき事は、浮舟の逝去については真先にお見舞ひ申さうと思つて居りましたが。

その程を、浮舟逝去の當座を、はかなくて、わけもなく月日が立つてしまつたのを驚いてをります。

過ぎにし名残とは、私を亡き浮舟の形見と思つて、何かの用事がありましたら必ず尋ねて来て下さい。

心のどかに、私は今迄始終暢氣に構へて居る中に、幾多の歳月が流れました。その間或は好意を持つてゐるやうには思はれなかつた事でせう。

又さやうにを、貴女の方でも内々さう思つてをつて下さい。「思ひ聞え給へ」は河内本の如くにあるのが當然である。

給ふ。念佛の僧のかず添へなどせさせ給ふ。罪いと深か。なるわざと思せば、かろむべき事をぞすべき、七日々々に經佛供養すべきよしなどこまかに宣ひて、いと暗うなりぬるに歸り給ふも、あらましかば、今宵歸らむ。やは、とのみなむ。尼君に消息せさせ給へれど、異いともく、ゆゆしき身をのみ思ひ給へしづみて、いとど物も覺え給へられず、ほれ侍りてなむ、うつぶし臥して侍る」と聞えて、出でこねば、強ひても立寄り給はず。道すがら、疾く迎へ取り給はずなりにける事、くやしう、水の音の聞ゆる限りは、心のみさわぎ給ひて、骸をだに尋ねずなりにけること、あさましくてもやみぬるかな、いかなるさまにて、いづれの底のうつけにまじり、けむ、などやる方なく思す。

かの母君は、京に子生むべきむすめの事により、つつしみ騒げば、例の家にもえいかず、すすろなる旅居のみして、思ひ慰む

折もなきに、又これもいかならむと思へど、平らかに生みてけり。ゆゆしければ、克寄らず。残りの人々の上も覺えず、ほれ

感ひて過ぐすに、大將殿より御使忍びてあり。物覺えぬ心地にも、いと嬉しくあはれなり。あさましき事は、まづ聞えむと思ひ給へしを、心もどまらず、目も暗き心地して。まいてい

かなる間にか感はれ給ふらむと、その程を過ぐしつるに、はかなくて日頃も經にける事をなむ。世の常なさも、いとど思ひの

どめむ方なくのみ侍るを、思ひの外にもながらへば、過ぎにし名残とは、必ずさるべき事にも尋ね給へ」など、こまかに書き

給ひて、御使には、かの大藏の大夫をぞ賜へりける。真心のど

かによるづを思ひつつ年頃にさへなりにける程、必ずしも志あ

るやうには見給はざりけむ。されど今よりのち、何事につけても、必ず忘れ聞えじ。又さやうにを人知れず思ひ聞え給へ。を

折しも、娘が子を生む時だといふのに、よくもこんなにしてゐられたものだ。

はかなきさまにて、さぞかし浮舟はつらぬ暮しをしてあらしつたりして居つたのだが、京になど、浮舟もお蔭で引取られた後に、浮舟もお蔭で引取つてゐるうちにこんな事になつたので。

よき人かしこく、貴人を尊敬して、田舎奥く、物を感心するたちの人であるから。

おはせし世には、浮舟存命當時は、却つて常陸介の子供などをお世話なさるべき筈もなかつたのである。

わがあやまちにて、自分の捨てたおだ、母を慰めてやらうと思召す爲に、人の非難も深く考慮すまいと思召した。辨或本には「人の謗り知らず、懇に尋ねむと思しける」とある。

いかなりけむ云々、浮舟はどうなるんだらう、或は生きてゐるかも知れないと思召すから、この一句は「いと忍びて」に續く。

かの律師、前の阿闍梨、六十僧、法會にあづかる六十人の僧、事ども添へたり、燕の用意の上更に添加した。燕の用意として、黄金を入れた、句宮の志である。右近が志に、右近の志として、その事情を知らぬ者は、どうしてこんな立派に、などと口を怪しく、今迄一向聞いた事のない人の法會をこんなに、一體誰だらう、不思議な事だ、一體誰だらう。少將の子を生ませて、常陸介は娘にお祝をしようとお蔭で、立派な品々を持つてゐないものは殆どない。それらの品々はもとより、唐土や新羅の品々まで用ひて飾つてゐるつもりであるが、身分柄さすばらしいものであつた。實に

べき事、とあはす。

かしてには、常陸守、立ちながら来て、一十五等つて「折しも斯くて居給へること」など腹立つ。年頃いづくになむおはするなど、ありのままにも知らせざりければ、はかなきさまにておはすらむと思ひひけるを、京になど迎へ給ひて、浮舟をのち、面目ありてなど知らせむと思ひける程に、浮舟が死んだので斯かれば、今は隠さむもあいなくて、一部始終をありしさま泣く泣く語る。大將殿の御文ども取り出でて見すれば、よき人かしこくして、鄙び物めでする人にて、この御文を驚き隠して、打返し、牛いとめでたき御さいはひを捨てて、亡せ給ひにける人かな。あのれも殿入にて、参り仕うまつれども、近く召使ひ給ふこともなく、いとけ高くおはする殿なり。わが子供達の事を若き者ども

のこと仰せられたるは、頼もしきことになむ」など喜ぶを見るに、ついでも、ましておはせましかば、と思ふに、母者は臥しまろびて泣かる。守も今なむうち泣きける。さるは、おはせし世には、

なかく、斯かるたぐひの人しも尋ね給ふべきにしもあらずかし。以上の文

わがあやまちにて失ひつるもいとほし、慰めむ、と思すによりなむ、人の謗り、懇に尋ねじと思しける。

四十九日のわざなどせさせ給ふにも、いかなりけむ事にかはと思せば、何れにしても法事は罪障を消滅するのだからとてもかくても罪得まじきことなれば、いと忍びて、浮舟のことは別格しないので

かの律師の寺にて、なんせさせ給ひける。六十僧の布施など、大きにあきてられたり。母君も來居て、事ども添へたり。宮より

は、右近がもとに、白銀の壺に黄金を入れて賜へり。人見咎むばかり大きなるわざはえし給はず、右近が志にしたりければ、

心知らぬ人は、「いかで斯くなむ」などいひける。殿の人ども、殿の人達睦まじき限り、字傳ひにあまた賜へり。「怪しく、音もせざりつる人の果

を、かくあつかはせ給ふ。誰ならむ」と、今驚く人のみ多かるに、常陸守來て、無分別にも心もなく主人がりをるなむ、怪し、と人々見

ける。少將の子を生ませて、いかめしき事せさせむと惑ひ、家の

つれなしと世間は冷かなもの
 だ、十分経緯で知つてゐる私
 も、人目に立つほど歎きはしま
 せぬのに、能くこそ心づけて、
 河内本に従へば無常な世の中
 の意となる。このよるこび、
 この慰問の御禮に、いと物は
 かなきすまひなりかし、小宰相
 の局を批評した挿入句。局など、
 小宰相の局のさま。痛く、こんな
 むさくるしい局で、きまりわる
 くは思ふけれど、見し人、存舟。
 さるものにて、隠し妻としてお
 いてもよい女だのに、人知れぬ筋、
 驚は懐み深い人だから、内々小
 宰相を愛してゐるといふやうな
 事は夢にも外に現はされない。

五巻の日、法華經八巻を四日に
 分けて朝座夕座に一卷づつ讀
 するのである。五巻の日は第三
 日、新の行道が行はれる。但し
 れは五日十座の八講と見える。
 北の廂、六條院にての事。皆入り
 立ちて、人々が入りこんで、室内
 を整頓する間、物聞きごうじて、
 法華八講を聞き疲れて、直衣着かへて、
 八講には束帯であるが、それを直衣に
 着かへるのである。かくいふ、前
 に小宰相の事を述べたからいふの
 である。几帳などばかり、几帳な
 どばかり、几帳などばかり、几帳
 などで、四つて休息所としてある。
 馬道、殿中に設けてある土間の
 通路、事ある時に馬を引入れて通
 行する。常には厚板を敷いて通
 行する。ここにやあらむ、小宰相
 は此處に居るのだらうか、衣ずれの
 音が聞えるやうだ。「あらはなり」
 を修飾する。大人、年輩の女房。

めやかなる程を、いとよく推し量りていひたるも惜からず。
 つれなしとこころ世を見る憂身だに人の知る迄歎きやはする
 このよるこび、「あはれなりし折からも、いとどなむ」など言ひ
 に立寄り給へり。いと恥かしげに物々しげにて、なべてかやう
 になどもならはし給はぬ、人がらもやんごとなきに、いと物は
 かなきすまひなりかし、局などいひて、せばく程なき遣戸口に
 寄りの給へる、傍痛く覺ゆれど、さすがにあまり卑下してもあ
 らで、いとよき程に物なども聞ゆ。見し人よりも、これは心に
 くきけ添ひてもあるかな、などと斯く出で立ちけむ、さるもの
 にて我もあいたらましものを、と思す。人知れぬ筋は、かけて
 も見せ給はず。
 蓮の花のさかりに御八講せらる。六條の院の御ため、紫上など、
 皆あはし分けつつ、御經佛など供養せさせ給ひて、いかめしく
 尊くなむありける。五巻の日本どは、いみじき見物なりければ、

女房もあつて、女房につきで、参りて、物見る人多かりけり。
 五日といふ朝座に果てて、御堂の飾り取りさけ、御しつらひ改
 むるに、北の廂も、障子ども放ちたりしかば、皆入り立ちてつ
 ころふ程、西の渡殿に姫宮あはしましけり。物聞きごうじて、
 女房もあつて、局にありつつ、お前はいと人づくななる夕暮に、
 大將殿直衣着かへ、て、今日まかづる僧のなかに、必ず、
 宣ふべき事あるにより、釣殿の方におはしたるに、皆まかでぬ
 れば、池の方に涼み給ひて。人づくななるに、かくいふ宰相の
 君など、假初に几帳などばかりへだてて、うち休む上局。した
 り。ここにやあらむ、人の衣の音する、と思して、馬道の方の
 障子の細く明きたるより、やをら見給へば、例さやうの人の居
 たるけはひには似ず、晴れしくしつらひたれば、なか、
 几帳どもの立てちがへたるあはひより見通されて、あらはなり。
 氷を物の蓋にあきて割るとて、もてさわぐ人々、大人三人ばか

詰詞とは女一宮があられば
かうは打解けてゐる筈がないの
に、皆が打解けてゐるもので女一
宮はおいでにならぬものと驚は
思つて。

こちたき うるさい程多い髪
の毛。

詰に土などの長根歌傳にも
「頭三左右前後、粉色如土」とあ
るが、女房達はこれに比べて
はまるで上とか思はれない。
費なる生絹の以下小宰相の服
装、生絹は練らぬ絹の女房より
用意あらむは、他の女房より
はたしなみがあるはい。
なか／＼、氷はつめたくていい
けれど、暑さの介で叩つて
見ても暑さです。いつそ
の事、おれにそのまま見ていら
つしやい。
心強く、小宰相にさういはれて
も女房達は強情に割つて。

いな持たらし 私は持つのはい
やだ。平がうるさい。

我も物の心も 驚自身もまだ頑
是なくて女一宮を見た時。

いかなる神佛の、どんな神や佛
がこんなよい機会を與へて下さ
つたのだらう、又例によつて、
氣を揉ませて物思ひをさせよう
とするのだらうか。大君中君の
合奏を除見してから物思ふ身と
なつたから「例の」といふので
ある。
この障子、驚の覗き居る襖。前
に「馬道の方の障子の細く明
たるより」とあつた。

おのがさま 自分の姿の見られ
るのも煩着なしに縁側を走つて
来たので。
隠とも見えじ、自分(驚)だとい
ふ事を知られたくない、喧見な
どするのは好色めいた仕業だ。
いみじきわざかな、下蔭女房が
驚を見つけての心。これは大變
な事だ。

り、童と居たり。唐衣も汗衫も著ず、皆打解けたれば、お前と
は見給はぬに、白き羅の御ぞ著給へる人の、手に氷を持ちなが
ら、斯く争ふをすこしゑみ給へる御顔、いはむ方なくうつくし
げなり。いと暑さの堪へがたき日なれば、こちたき御ぐしの、
苦しう思さるる。にやあらむ、すこしこなたに靡かして引かれ
たる程、譬へむものなし。こころよき人を見集むれど、似るべ
くもあらざりけりと覺ゆ。お前なる人は、誠に土などの心地ぞ
するを、思ひしづめて見れば、黄なる生絹の單衣、薄色なる裳
著たる人の、扇うち使ひたるなど、用意あらむはや、とよと見
えて、小宰相「なか／＼物あつかひにいと苦しげなり。たださながら
見給へかし」とて笑ひたるまみ、愛敬づき、たり。聲聞くにぞ、
この志の人とは知りぬる。心強く割りて、手ごとにもたり。頭
にうちあき、胸にさしあてなど、さま悪しうする人もあるべし。
この人は紙に包みて、お前にも斯くて參らせられたれば、
と、いとうつくしき御手をさしやり給ひて、
ふ。女一宮いな、持たらし。平ひつかし」と宣ふ御聲、いとほのか
に聞くも、限りもなく嬉し。またいと小さくおはしましし程に、
我も物の心も知らで見奉りし時、めでたのちごの御さまやと見
奉りし、そののち絶えてこの御けはひをだに聞かさつるもの
を、いかなる神佛の、かかる折見せ給へるならむ、例の安から
ず、物思はせむとするにやあらむと、かつは静心なくて、まも
り立ちたる程に、こなたの對の北面に涼みける下蔭女房の、こ
の障子は、とみの事にて、明けながらありにけるを思ひ出でて、
人もこそ見つけて騒がるれ、と思ひければ、惑ひ入る。この直
衣姿を見つくるに、誰ならむと心騒ぎて、おのがさま見えむと
とも知らず、簀子よりただ來にくれば、ふと立去りて、誰とも
見えじ、すき／＼しきやうなり、と思ひて、隠れ給ひぬ。この
おもとは、いみじきわざかな、御几帳をさへあらはに引きなし

と、いとうつくしき御手をさしやり給ひて、
ふ。女一宮いな、持たらし。平ひつかし」と宣ふ御聲、いとほのか
に聞くも、限りもなく嬉し。またいと小さくおはしましし程に、
我も物の心も知らで見奉りし時、めでたのちごの御さまやと見
奉りし、そののち絶えてこの御けはひをだに聞かさつるもの
を、いかなる神佛の、かかる折見せ給へるならむ、例の安から
ず、物思はせむとするにやあらむと、かつは静心なくて、まも
り立ちたる程に、こなたの對の北面に涼みける下蔭女房の、こ
の障子は、とみの事にて、明けながらありにけるを思ひ出でて、
人もこそ見つけて騒がるれ、と思ひければ、惑ひ入る。この直
衣姿を見つくるに、誰ならむと心騒ぎて、おのがさま見えむと
とも知らず、簀子よりただ來にくれば、ふと立去りて、誰とも
見えじ、すき／＼しきやうなり、と思ひて、隠れ給ひぬ。この
おもとは、いみじきわざかな、御几帳をさへあらはに引きなし

ただ人に降嫁して平人なる私
の妻にあらぬ女に下さらぬと
いふのでは私がつらい。いと
恨み開きさせ女一宮が文を
くださらないので女二宮が恨んで
らるると。

下衆に以下「おどろかし開
ぬ」までは女二宮に代つて兼
明石中宮に申上げようとする
のである。私が平人になりさ
つたといふので恨んでおどろ
のだらうと思ふから、私から
文をあげさせぬ。

丁子 丁子の事で香染といふ
のも同じ。丁子を濃く煎じ出し
た汁で染めた色。以下句宮の装

舞え給へり 句宮と女一宮とは
同腹故。まづ戀しき恋の心にまづ女
一宮が戀しく思はれるのを、そ
れは實に不持な利筋だと自制す
るは、まだ見ぬ利筋だと自割す
るは、かつた時よりも苦しい。

古への御こと 源氏や紫上の噂
など。残りたる繪 女一宮に持参した
この里に 四方においでになる
内親王(女二宮)が禁中を離れて
平人(私)の妻になつてしよけて
ゐられるのがお氣の毒です。
かく品定まり 平人の妻と身分
がきまられたので、女一宮が
見捨てられたものと思つてふ
さぎこんでばかりゐられますか
らかうした物(繪)を時々お贈り
下さい。

あやしくなどか をかしい。
何で女一宮がお見捨てなさるや
うな事をなさいますせう。
うちには 禁中においでの時
分は近所に住んでゐられたので
時々文通もあつたやうですが、
別れに折られた折に文通も
杜絶し初めたのでせう。
今そのかし 私からいづれ女
一宮に文通を勧めませうが、そ
うから何の遠慮がいらませ
う。もとより、もとより、貴女が
入れてみて下さらぬ女二宮をも
貴女と私とは親しくすべき間柄
にあるといふ理由で愛ひして下
さるならば私も嬉しく思ひます。

「一品の宮に御文は奉り給ふや」と聞え給へば、女「うちにある
時、うへのさ宣ひしかば、聞えしかど、久しうさもあらず」
父帝が女一宮に文をあげよと
女一宮に文を

と宣ふ。まただ人にならせ給ひにたりとて、かれよりも聞えさ
貴女が平人になられたとて
女一宮

せ給はぬにこそは、心憂かンなれ。今大宮のお前にて、「恨み聞
明石中宮

えさせ給ふ」と啓せむ」と宣ふ。女「いかが恨み聞えむ。うたて」
何で私か
女一宮が女二宮を

と宣へば、「下衆になりたりとて、おほしおとすなめりに見
女二宮から女一宮に
女一宮が

れば、あどろかし聞えぬ」とこそは聞えぬ」と宣ふ。
明石中宮に

その日は暮して、又のあしたに大宮に参り給ふ。例の宮もあは
女一宮

しけり。丁子に深く染めたる羅の單衣を、こまやかなる直衣に
色の濃い花柄色の直衣の下に直衣

著給へる、いと好ましげなり。女の御身なりのめでたかりしに
女一宮

も劣らず、白く清らにて、なほありしよりは面瘦せ給へる、い
以前より

と見るかひあり。覺え給へりと見るにも、まづ戀しきを、い
句宮が中
繪を

とあるまじき事としづむるぞ、ただなりしよりは苦しき。繪を
繪を女一宮の方へ差しよさせ
宮の方へ

いと多く持たせて参り給へりける。女房してあなたに参らせ給
ひて、我もわたらせ給ひぬ。大將も近く参り寄り給ひて、御八
句宮自身も女一宮の方へ
中宮の御側に

講の尊く侍りしこと、古への御こと、すこし聞えつつ、残りた
女一宮

る繪見給ふついでに、この里に物し給ふ御子の、雲の上離れ
女一宮

て、思ひくし給へるこそ、いとほしう見給ふれ。姫宮の御方よ
女一宮

り御消息も侍らぬを、かく品定まり給へるに、思ひ捨てさせ給
女二宮が
と云つて私が頂戴して持ち歸つたのでは

へるやうに思ひて、心ゆかぬ氣色のみ、侍るを、かやうのもの
女二宮に
なにかがしがあつてもてまからむ、は

時々物せさせ給はなむ。た見るかひも侍らじかし」と聞え給へば、中宮「あやしく。などて
女二宮と女一宮と

か捨て聞え給はむ。うちにては、近かりしにつきて、時々も聞
女二宮が兼に降嫁して
女一宮

えかよひ給ふめりしを、所々にたり給ひし折に、とだえそめ給
女一宮から

へるにこそあらめ。今そのかし聞えむ。それよりもなどは
女一宮から

と聞え給ふ。かれよりはいかでかは。もとより數まへさせ給
女二宮からは勿論文通致します
明石中宮と兼とは兄弟

はざらむをも、斯く親しくしてさふらふべきゆかりによせて、
思召し數まへさせ給はむをこそ、嬉しくは侍るべけれ。まし

さきも聞え馴れ給ひ「うちにては近かりしにつきて時々も聞えかよひ」とあつた事をいふ。すきはみたる好色がまし。意味が合はれてある事とは明石中宮は思ひかけなさらなかつた。

ありし渡殿 八講の折に女一宮を喚見した渡殿も、せめてもの慰めに見よう。

御簾の内の人 簾内に居る女房達は蒸の入来とて緊張した氣持である。

大方には 別に用事もなしに時々参つては居りますが、こちらの方々に目にも懸る事が出来ないので。いと覺えなく知らない間にすつかり年寄りじみてしまつたやうな氣がしますが、これからは懸念にして貰ひたいと奮發してやつて來ました。こんな翁が女房達と物いふのは、そぐはぬと。今よりならはせ、これからはお馴染になるのは、翁が果てるといふか、若返られるのでございませう。若しうみやびかに 女一宮の御方は妙に優雅な典範のある所で

てさきも聞え馴れ給ひにけむを、今捨てさせ給はむは、からき事に侍り」と啓せさせ給ふを、すきはみたる氣色あるかとは、思しかけざりけり。

立ちいでて、一夜の志の人に、あはむ、ありし渡殿も慰めに見むかし、と思して、お前を歩みわたりて、西ざまにははするを、御簾の内的人是、心殊に用意す。けにいとさまよく限りなきもてなしにて、渡殿の方は、左のおほい殿の君達などゐて、物い

ふけはひすれば、妻戸の前に居給ひて、馬大方には参りながら、この御方の見参に入る事の難く侍れば、いと覺えなく翁が果てにたる心地し侍るを、今よりはと思ひあこし侍りてなむ。あり

つかず。若き人どもぞ思ふらむかし」と、甥の君だちの方を見やり給ふ。女房「今よりならはせ給ふこそ、げに若くならせ給ふならめ」など、はかなき事をいふ人々のけはひも、怪しう、みや

びかにかしき御かたの有様に、ぞある。その事となけれど、世の中の物語などしつ、しめやかに例よりは居給へり。

姫宮は、あなたにわたらせ給ひ、けり。大宮、「大將の、そなたに参りつるか」と問ひ給ふ。御供に参りたる大納言の君、「小宰相の君に物宣はむとにこそははべる。めりつれ」と聞ゆれば、中宮

「まめ人のさすがに、心とどめて物語するこそ心地あくれたらむ人は苦しけれ。心の程も見ゆらむかし。小宰相などはいとうしろやすし」と宣ひて、御はらからなれど、この君をばな

ほ恥かしく、人も用意なくて見えざらなむと、おぼいたり。人よりは心寄せ給ひて、局などに立寄り給ふべし。物語こまやかにし給ひて、夜更けて出でなとし給ふ折々も侍れど、例の目馴

れたる筋には侍らぬにや。宮をこそいと情なくおはしますと思ひて、御いらへをだに聞えずはべる。めれ。忝きこと」とい

ひて笑へば、宮も笑はせ給ひて、いと見苦しき御さまを、思ひ知るこそはをかしけれ。いかで斯かる御癖やめ奉らむ。恥か

姫宮は 女一宮は明石中宮の御方へ参られた。大將の女一宮へ申される詞。蒸はあなたにわたらせ給ひました。小宰相の君に、小宰相の君とお話なさうと思召してございしました。まめ人の 眞面目男でめて可も思ひを寄せて話しあふ相手としては氣の利かぬ人では困る。御はらからなれど、明石中宮は蒸とは御兄弟でいらつしやるけれども、人も用意なくて、女房達でも蒸には氣をつけて應對してほしいものだ。中宮は思召した。例の目馴れたる、そこらにさらにある色戀の沙汰ではないのでせう。宮をこそ、小宰相は匂宮を大層心ない方だと思つて、御返事も申上げないやうですが、畏多い事です。いと見苦しき、匂宮の見苦しき、浮氣を小宰相が見抜いてあるのが面白く、せひあんなわるいのお癖はなくしてあげたいものだ。女房達の手前も恥かしい。

異母姉妹 浮舟の實母中將
なにかしが妻 浮舟の叔母と
も又母ともいつて居りますがど
ちらでせうか。

俄に迎へ 急に浮舟を引取らう
となさいまして、番人をつけた
りなど仰々しく警戒なさつたの
で。

あやしきさまに 御馬に乗つた
儘見苦しい恰好で外に立つてお
りました。

さばかり珍らかならむことは
それ程珍らしい事件は自然世間
の噂にも上りさうな事だのに、
大將も 驚もそんな話もせず、
世間の無常な事、八宮の一族の
運命な事、それを大層悲しがつ
て話してゐられた。河内本は「ぞ
う」の右傍に「孫」と字をあて
てある。

しやこの人々も」と宣ふ。大將「いとあやしき事をこそ聞き侍りし
か。この大將殿の亡くなし給ひてし人は、宮の御二條の北の方
の御弟なりけり。異腹なるべし。常陸の前の守なにかしが妻は、
叔母とも母ともいひはべるなるは、いかなるにか。その女君に、
宮こそいと忍びておはしましけれ。大將殿や聞きつけ給ひたり
けむ。俄に迎へ給はむとて、まもりめ添へなど事々しくし給ひ
ける程に、宮もいと忍びておはしましなから、え入らせ給はず、
あやしきさまに御馬ながら立たせ給ひつゞぞ歸らせ給ひける。
女も、宮を思ひ聞えさせけるにや、俄かに消え失せにけるを、
身投げたるなめりとてこそ、乳母・やうの人どもは泣きまど
ひ侍りけれ」と聞ゆ。宮もいとあさましと思して、中將誰かざる
事はいふぞとよ。いといとほしく心憂きことかな。さばかり珍
らかならむことは、あつから聞えありぬべきを。大將も、さ
やうには言はで、世の中のはかなくいみじき事、かく宇治の宮

下衆は 下々の者といふものは
よく曖昧な事をいふものだと思
は信じて居りました。召使が、先
頃小宰相のお里にやつて来まし
て、それは事實だといふやうに
いつて居りました。

さて委しくは さういふ譯で驚
が委しい話はお耳に入れたかつ
たのでございませう。
いはせよ人を以てその下意に
口どめをさせよ。

かくてこそ 斯様に文通して早
あつたのだと藏は思召す。べきで
うちまさりて 明石中宮から頂
いたのより以上の面白い繪を澤
山集めて女一宮へ差上げられ

の族の、命みじかかりける事をこそ、いみじく悲しと思ひて宣
ひしか」と宣ふ。大將「いざや、下衆は、たしかならぬ事をもいひ
侍るものを」と思ひ侍れど、かしこに侍りける下意の、ただ
此頃宰相が里に出でまうで来て、たしかなるやうにこそ言ひ侍
りけれ。かく怪しうて失せ給へること、人に聞かせじ。あどろ
ろしいやうな事だとして
さて委しくは聞かせ奉らぬにやありけむ」と聞ゆれば、山宮「更に
斯かる事又まねぶな」といはせよ。かかる筋に御身をももてそ
こなひ、人にも心づきなきものに思はれ給ふべきなめり」と
と、いみじくおぼいたり。
そののち姫宮の御方より、二の宮に御消息ありけり。御手など
の、いみじうつくしげなるを見るにも、いと嬉しく、かくて
こそ疾く見るべかりけれ、と思す。あまたをかき繪ども多く
大宮も奉らせ給へり。大將殿、うちまさりてをかききども集め

見つけられ 無に見つけられた
御果も 浮舟の一周忌も待た
ず薄情な女だと薫から思はれ
たくない。

なにがしをぞ 私をこそ皆さん
は親しく思つて下さるのが當然
です。いくち女でも私程のお
けなない女はあるまい。「や」は味
の助詞。そんな気の張らない
人間だがそれでも女の知つてお
かねばならぬ事を教へる事も出
来さうです。

そも随まじく それも實方を親
しく思はれるやうな理由の無い
者が押れくしく致しますよ。
うでござります。必ずしも無
慮であつていいといふ理由を詮
議だして無慮な仕打をする
のではございませぬが私のや
うに鐵面皮にした人が私に
者が、がらにもなく尻かしく御返
事申上げます。

心もとなき花のよわくし
はかない女郎花の先の折つ
ておもちやにして居つたものと
思ふも。

まぎらはしつづつ 誰やら分らぬ
やうにして坐つてゐる女房達の
嬰恰好を。

女郎花亂るる こんなに大勢の
私の中にならなかつた。夢にも
存名を負はせる事など出来るも
のではない。いたづらなどしな
い真面目な私に對して何で固く
なつてゐるのでか。
花といへば花といふと名は浮
氣のやうですが、女郎花はどの
露にも散るといふものではござ
いませぬ。さうむやみにどの男
にも。
今まうのぼりける この女は今
此處へやつて来たのだが、薫に
道をふさげられて立ちどまつて
居たのだらうと思はれる。「露の
いとけさやかな」とか「露の
あだ名を我にかかぬや」などと
あまりはつきりして色氣を離れ
た年寄りのやうな口を利かせる
のが憎らしい。美しい女達に心引
かれるか否か旅籠をした上で引
ためし下さい。

立ちいで給ふ。見つけられ奉らじ、暫し御果をも過ぐさず心淺
しと見え奉らじ、と思へば、隠れぬ。東の渡殿に、あきあひた
る戸口に人々あまた居て、物語など忍びやかにする所におはし
て、馬なにかしをぞ、女房は睡まじと思すべきや。女だに斯く
心やすくはよもあらじかし。さすがにさるべからむこと教へ聞
えぬべくもあり。やうく見知り給ふべかめれば、いとなむ嬉
しき」と宣へば、いといらへにくのみ思ふなかに、辨のおも
ととて、馴れたる大人、馬そも睡まじく思ひ聞ゆべき故なき人
の、恥ぢ聞え侍らぬや。物は、さこそはなか／＼侍るめれ。必
ずその故尋ねて打解け御覽せらるるにしも侍らねど、かばかり
・おもなく作りそめてける身に負はざらむも傍痛くてなむ」と
聞ゆれば、馬恥づべき故あらじと思ひさだめ給ひてけるこそ口
惜しけれ」など宣ひつつ見れば、唐衣は脱ぎすべし、押しやり、
打解けて手習しけるなるべし、硯の蓋にすゑて、心もとなき花

の末々手折りて、もてあそびけりに見ゆ。かたへは几帳のある
はすべり隠れ、あるはうち背き、押しあけたる戸の方に、まぎ
らはしつづ居たる頭つきどもも、をかしと見わたし給ひて、硯
引き寄せて、

「女郎花亂るる野邊にまじるとも露のあだ名を我にかかぬや
心やすくは思さで」と、ただこの障子にうしろしたる人に見せ
給へば、
・みじろきなどもせず、のどかにいと疾く、

花といへば名こそあだなれ女郎花なべての露に亂れはやす
と書きなる手、只片そはなれど、よしづきて、大方めやすけれ
ば、誰ならむと見給ふ。今まうのぼりける道にふたげられて、
滞りぬたるなるべしと見ゆ。辨のおもとは、馬いとけさやかな
る翁言、憎く侍り」とて、

「旅寝してなほ試みよ女郎花さかりの色に移り移らず
さてのち定め聞えさせむ」といへば、

これぞ こんな夜あるきするや
うな不用意の世間並なのだ、
と驚は思ふ。宮の君の内密
の同情者だ、などと申上げると
却つて誰もが言ひふるしだきま
やうになりす。思つて居りま
すといふ詞以外に自分の心持を
現はす適切な詞を眞剣に探し求
めて居ります。六帖五「思ふて
ふことより外に又もがな君一人
をばわきて思はむ」
さかしだちて 大人女房が餘計
なまし出口をして。

かくのみ 驚が斯の様に始終驚
なから宮の君の事を女房達に噂
されることを。後宮 藤口。宮の君に直接に言
はないで女房達に言はれた言葉
なみ／＼の人めきて 人並扱ひ
にされてゐるやうで心ない挨拶
ぶりと驚は心外なので。も切
れぬい親族關係にあるといふ事
はともかくとして。何かの事につ
ても私に親しくして下さるもの
嬉しい。取次などを以て、どうと
お話し出来ませぬ。

松も昔の 古今雜上「誰をかも
知る人にせむ高砂の松も昔の友
ならなくに」
もとより 驚が「もとより思し
捨つまじき筋」といつた詞をさ
す。
ただなべての これが只一通り
の奉公人の應待ぶりと思ふなら
ば面白くも感ずるのであるが、
宮の姫君ともあらう方が、今は
どうして斯様に輕々しく男に直
接物をいふやうになられた事か
と、何だか不安な氣がする。

この人ぞ又例の この宮の君が
又あの匂宮の煩悶の種になるの
だらうと。

姫君「姫君よ」の意。
又かばかりぞ「又多くはかば
かりぞあるべき」の意。大抵の
女はこれ位のものだ。

かやうの 宮の君に會つた程度
の。かの一つゆかり 八宮の姫君達
大君中君浮舟の事。大君は謙
怪しうつらかりける。大君は謙
となりに、浮舟はゆくへ知れずな
つてしまつた事をいふ。

出でてありきなどしけり。見つけて、入るさまも恥かしけり。
し。これぞ世の常と思ふ。南ももての隅の間に寄りて、うち聲
づくり給へば、すこし大人びたる人出で來たり。三「人知れぬ心
寄せ」など聞えさせ侍れば、なかく、皆人聞えさせふるしつ
らむ事を、うひ／＼しきさまにて、まねぶやうになり侍り。ま
めやかになむ言よりほかを求め・侍る」と宣へば、君にもい
ひ傳へず、さかし・だちて、女房「いと思ほしかけざりし御有様に
つけても、故宮の思ひ聞えさせ給へりし事など思ひ給へ出でら
れてなむ、かくのみ折々聞えさせ給ふなる御後言をも、喜び聞
え給ふめる」といふ。なみ／＼の人めきて、心地なのさまや、
と物憂ければ、三「もとより思し捨つまじき筋よりも、今はまし
てさるべき事につけても、おもほし尋ねむなむ嬉しかるべき。
うとく／＼しう、人づてなどにてもてなさせ給はば、えこそ」と
宣ふに、女房は「げにと思ひさわぎて、君を引きゆるがす。めれば、宮君一松

人もない、孤獨の身と悲観して居りましたにつけても、いと同志たしと仰しやうて下さるは、心から
も昔の、とのみ眺めらるるにも、もとよりなど宣ふ筋は、まめ
やかに頼もしうこそは」と、人づてともなくいひなし給へる聲
いと若やかに愛敬づき、やさしき所添ひたり。ただなべての斯
かるすみかの人と思はば、いとをかしかるべきを、只今は、い
かで斯ばかりも人に聲聞かすべきものとならひ給ひけむと、な
すれしたかと。かたらしろめたし。かたらしもいとなまめかしからむかしと、見ま
ほしきけはひのしたるを、この人ぞ、又例のかの御心亂るべき
つまなめりと、をかしうも、ありがたの世やとも、思ひ居給へ
り。これこそは、限りなき人のかしづきおほし立て給へる姫君、
又かばかりぞ多くはあるべき、怪しかりける事は、さる聖の御
あたり、山の懐より出で來たる人々の、かたほなるはなかり
けるこそ、この、はかなしや、かる／＼じやなど思ひなす人も、
かやうの打見る氣色は、いみじうこそをかしかりしかと、何事
につけても、ただかの一つゆかりをぞ思ひ出で給ひける。怪し

その頃、横川の比叡山の北谷。古き願ありて昔立願した事があつたので、母尼と妹尼と。

佛經供養する。長谷寺で願ほどの爲に供養するのである。

奈良坂。京街道の奈良に入る口にある坂。

かくては、こんな気分がわくくはとも自宅まで歸り着く事は出来ない。

横川に横川の僧都方へ母尼病氣の由を通知した。

情しむべくも、死んでも惜しくない老婆なのに、僧都自身も又弟子の中でも効験のある者に命じて加持して願いであるのを。家主。知人の家の主人。御嶽精進しけるを、私は今御嶽精進を始めて居るのですが、御嶽精進は金峯山に詣づる爲千日間後夜に庭前に出て百度づつ金峯山を巡拜する行である。

手 賀

その頃、横川に、なにがし僧都とかいひて、いと尊き人住みけり。八十あまりの母、五十ばかりの妹ありけり。古き願ありて、初瀬にまうでたり。睦まじうやんことなく思ふ弟子の阿闍梨を添へて、佛經供養すること行ひけり。事ども多くして歸る道に、奈良坂といふ山越えける程より、この母の尼君、心地あしうしければ、「かくてはいかでか残りの道をもおはし着かむ」と、もて騒ぎて、宇治のわたりに知りたりける人の家ありけるにどどめて、今日ばかり休め奉るに、なほいたう煩へば、横川に消息したり。山こもりの本意深く、今年は出でじと思ひけれど、限りのさまなる親の、道の空にて亡くやならむ、と驚きて、急ぎ物し給へり。情しむべくもあらぬ人のさまを、みづからも弟子のなかにも、験あるして加持しさわぐを、家主人聞きて、「御嶽精進しけるを、いたう老い給へる人のおもく惱み給ふは、いかか」と、うしろめたげに思ひていひければ、さもいふべき

その頃、横川に、なにがし僧都とかいひて、いと尊き人住みけり。八十あまりの母、五十ばかりの妹ありけり。古き願ありて、初瀬にまうでたり。睦まじうやんことなく思ふ弟子の阿闍梨を添へて、佛經供養すること行ひけり。事ども多くして歸る道に、奈良坂といふ山越えける程より、この母の尼君、心地あしうしければ、「かくてはいかでか残りの道をもおはし着かむ」と、もて騒ぎて、宇治のわたりに知りたりける人の家ありけるにどどめて、今日ばかり休め奉るに、なほいたう煩へば、横川に消息したり。山こもりの本意深く、今年は出でじと思ひけれど、限りのさまなる親の、道の空にて亡くやならむ、と驚きて、急ぎ物し給へり。情しむべくもあらぬ人のさまを、みづからも弟子のなかにも、験あるして加持しさわぐを、家主人聞きて、「御嶽精進しけるを、いたう老い給へる人のおもく惱み給ふは、いかか」と、うしろめたげに思ひていひければ、さもいふべき

おりておはす 寢殿のうしろの方へ。下衆ども 下部の内はきくし
た役に立つ者どもは「皆はかば
かしきは」の句は「居しづまり
などしたるに」に續く。御厨子
御厨子所など 勝手元など、せ
ねばならぬ仕事を、かうした所
では急いで用意するのが常であ
るから。居しづまりなど 下部の者ども
が勝手元についてしまつて食事
の用意にかゝつてゐるので。こ
こなる物 木の下の白い物。時
の移るまで 時刻の變る迄。さ
ざるべき眞言を それに適した
明文を。しるくや 變化にあらぬ事をは
つきり見定めたものと見えて。

いとふびんにも これは誠に不
都合な事でございましてね。病
人をおつれ申すのには續のある
所のやうです。山彦のこたふる 宿守を呼ぶ聲
が反響して聞えるのも怖ろしく
感じられる。

額おしあげて 湖月抄(細)かみ
などあげたる也(二)ひたいおし
あぐるはしわのよりたる也。こ
れは髪を洗つて額に下つてゐる
よき見ようとする爲であらう。

見驚かず侍りき ほつておきま
した。

事にもあらぬやつ 何でもない
ものです。

かの夜深き 夜更けて僧都や尼
君達に差上ぐべき召上り物の用
意に氣を取られてゐるのであら
う。相手にならうとしないのは。

天の下の 天下第一の。

引き入れて 袖の中に。
木精の鬼 木の下に居るから斯
くいふ。鬼とは變化のもの、總
稱。

ものなり」とて、わざとおりておはす。かのわたり給はむとす
る事によりて、下衆ども、皆はかしくしきは、御厨子所など、
あるべかしき事どもを、斯かるわたりには急ぐものなりければ、
居しづまりなどしたるに、只四五人してこなる物を見るに、
變ることなし。怪しうて、時の移るまで見る。疾く夜も明け
果てなむ、人か何ぞと見あらはさむと、心にさるべき眞言を讀
み、印をつくりて試みるに、しるくや思ふらむ、僧都これは人な
り。更に非常のけしからぬ物にあらず。寄りて問へ。亡くなり
たる人にはあらぬにこそあめれ。もし死にたりける人を捨てた
りけるが、よみがへりたるか」といふ。無何のさる人をかこの
院の内に捨て侍らむ。たとひ誠に人なりとも、狐、木精やうの
ものの、欺きて取りもて來たらむにこそ侍らめ。いとふびんに
も侍りけるかな。けがらひあるべき所にこそはべるめれ」とい
ひて、ありつる宿守の男を呼ぶ。山彦のこたふるもいと怖ろし。

あやしのさまに、額おしあげて出で來たり。僧ここには、若き
女などや住み給ふ。かかる事なむある」とて見すれば、宿「狐の
つかうまつるなり。この木のもとになむ、時々あやしきわざな
むし侍る。一昨年の秋も、ここに侍る人の子の、二つばかりに
侍りしを取りてまうで來たりしかども、見驚かず侍りき」。僧
てそのちごは死にやしにし」といへば、宿「生きて侍りき。狐は、
さこそは人をあびやかせど、事にもあらぬやつ」といふさま、
いと馴れたり。かの夜深きまわり物の所に、心を寄せたるなる
べし。僧都、「さらば、さやうの物のしたるわざか。なほよく見
よ」とて、この物おぢせぬ法師を寄せたれば、僧「鬼か神か狐か
木精か。かばかりの天の下の驗者のおはしますには、え隠れ奉
らじ。名のり給へ、名のり給へ」と、衣を取りて引けば、顔を
引き入れていよく泣く。僧いで、あなさがなの木精の鬼や。
まさに隠れなむや」といひつつ、顔を見むとするに、昔ありけ

目も鼻もなかりける 河海花鳥
等によれば、比叡山の文珠樓に
目無鬼の住んで居つた話が朱の
盤といふ繪物箱にあつたとい
ふ。

見果てむと 正體を見届けよう
と思つてゐると。垣のそば迄つれ
てゆかう。

人の命 人の壽命といふものは
短いのだが、餘命は一日でも
二日でも惜しまなければならぬ
ものだ。

人にはかりごたれても 人にた
ぶらかされたか何れにしても、
かうしておけばこの人は横死し
なければなるまい。

壁に死ぬべくは どうしても助
からないといふのなら。

目も鼻もなかりける目鬼にやあらむと、（ん）めむくつけきを、頼も
しうい（く）かきさまを人に見せむと思ひて、衣（きぬ）を引きぬがせむとす
れば、（浮舟のさま）うつぶして聲立つばかり泣く。何にまれ、かく怪しき
事、なべて世にあらじ」とて、見果てむと思ふに、雨（あめ）いたく
降りぬべし。斯くておいたらば、死に果て侍りぬべし。垣のも
とにこそ出ださめ」といふ。僧都、「誠の、人のかたちなり。そ
の命絶えぬを見るく、捨てむことはいみじき事なり。池にお
よぐ魚（いさな）、山に鳴く鹿をだに、人にとら（とら）れて死なむとするを
見つつ、助けざらむは、いと悲しかるべし。人の命久しかるま
じきものなれど、残りの命一二日をも惜しまずばあるべからず。
鬼にも神にも領（しん）ぜられ、人に追はれ人にはかりごたれても、こ
れ横さまの死にをすべきものにこそ（は）あめれ。佛の必ず救ひ給
ふべき（都頼の人）きはなり。なほ試みに、暫し湯を飲ませなどして、助け
試みむ。遂に死ぬべくは、（仕方がない）いふ限りにあらず」と宣ひて、この

けがらひ必ず まつと死穢に觸
れるやうな事にならう。
もどく 非難する。

御車寄せて 母尼が院に到着し
たのである。

物にけどられ 魔物に正念を取
られた人です。
しかくの事を 下の「珍らか
なるものを」と同格。

大徳して抱き入れさせ給ふを、弟子ども、「たいくしきわざか
な。いたう煩（わづら）ひ給ふ人の御あたり（母尼）に、よからぬものを取入れて、
けがらひ必ず出で來なむとす」と、もどくもあり。又、「物（もの）へ
んげにもあれ、目に見すく、生ける人を斯かる雨（あめ）にうち失は
せむは、いみじき事なれば」など、心々にいふ。下衆などは、
いと騒がしく、物（もの）をうたていひなすものなれば、人さわがしか
らぬ隠れの方になむ臥せたりける。
御車寄せて（車から母尼が）あり給ふ程、いたう苦しがり給ふとて、（人々は）ののしる。
すこししづまりて、僧都、「ありつる人は、いかなりぬる」と
問ひ給ふ。僧（からたもくたくで）「なよく」として物もいはず、息もし侍らず。何か。
物にけどられにける人にこそ」といふを、妹の尼君聞き（給ひ）て、
「何事ぞ」と問ふ。僧（僧）「しかくの事をなむ、六十（ひそぎ）にあまる年、珍
らかなるものを見たまへつる」と宣ふ。うち聞（妹尼が）くま（ま）まに、まづそのさま
のが、寺（長生寺で）にて見し夢ありき。いかやうなる人ぞ。まづそのさま

香衣にたきしめた香。
わが戀ひ懸しむ。妹尼の娘は中將の妻であつたが近頃死んだのである。

母尼 | 僧都
| 中將
妹尼 | 女
右衛門督

御達 年輩の女房達。
いかなりつらむとも。どんな様子をして居つたか見付け出されたい時も思はず。女房達は怖ろしい人か。貴女はどうした方です。此處にからしていらつしたるのですか。
ただ弱りに。浮舟はずん／＼弱つて死にさうであつたので。弱なかつた。助けてやらうと思つてつれて来た。却つて大變な事さされた。こゝろはぬ事ではない。餘計な世話をなされるものだ。神などの御爲に。細流抄一心經を神分として加持の前に讀むをいへり。

よく聞いて つきものを調伏して。弱きを。つきものを調伏して。弱きを。

すすろなる この女の爲につまらぬ縁に附れて此處を出る事もならず難儀しなければならぬ。

煩はしき。喉に上つて面倒になつては困る。

見る限り 何にゐる人は皆大騒ぎで世話した。

さすがに 前に「物覚えぬさまなり」とあつたのを受けていふ。佛の響き給へる。佛が私に授けて下さつた方だと思つて居ります。なかくなる。私は却つて一層悲しがる事です。前世の縁があればこそかうしてお目に懸つたのでせう。

「見む」と泣きて宜ふ。佛達「ただこの東の遣戸になむ待る。はや御覽ぜよ」といへば、急ぎ行きて見るに、人も寄りつかでぞ捨てあきたりける。いと若うつくしげなる女の、白き綾の衣一かさね、紅の袴を着たる。香はいみじうかうばしくて、あてなるけはひ限りなし。妹尼「ただわが戀ひ悲しむすめの、歸りおはしたるなめり」とて、泣く／＼御達を出だして、抱き入れさす。いかなりつらむとも、有様見ぬ人は、怖ろしがらで抱き入れつ。生けるやうにもあらで、さすがに目をほのかに見あけたるに、妹尼「物宜へや。いかなる人か斯くは物し給へる」といへば、物覚えぬさまなり。湯取りて手づからすくひ入れなす。ただ弱りに絶え入るやうなりければ、妹尼「なかくいみじきわざかな」とて、出づる人亡くなりぬべし。加持し給へ」と、験者の阿闍梨にいふ。佛「さればこそ。怪しき御物あつかひなり」といへど、神などの御爲に、經讀みつつ祈る。僧都もさしのぞ

きて、いかにぞ。何のしわざぞと、よく調じて問へ」と宣へど、いと弱げに消えもてゆくやうなれば、佛「え生き侍らじ。すすろなるけがらひに籠りて煩ふべきこと。さすがに、いとやれごとなき人にこそ侍るめれ。死に果つとも、ただにやは捨てさせ給はむ。見苦しきわざかな」といひあへり。佛「あなかす。人に聞かすな。煩はしき事もぞある」など口がためつつ、尼君は、親の煩らひ給ふよりも、この人を生け果てて見まほしう惜しみて、うちつけに添ひ居たり。知らぬ人なれど、みめのこよなうをかしければ、いたづらになさじと、見る限りあつかひ騒ぎけり。さすがに時々目見あけなどしつ。涙の盡きせず流るるを、佛「あな心憂や。いみじう悲しと思ふ。人の代りに、佛の導き給へると思ひ聞ゆるを、かひなくなり給はば、なかくなる事をや思はむ。さるべき契りにてこそ斯く見奉るらめ。なほ聊か物宜へ」といひ續くれど、からうじて、佛「生き出でたり

さて限りと、あんなに今にも死
にさうに見えながら、まづま
づからして生きてだけは居つて
くれたのです。

い、どれどんな様子か。
な、前生で善根を積まれた御器量だ
で今生ではこんな美しく育た
れたのでせう。どうした間違ひ
でこんな病氣にかゝられたので
せう。もしかこんなわけではな
いかと思ひ當る事もありませぬ
か。容面は河内本よそめい
更に聞ゆる。別に何の事もあり
ませぬ。言ふ迄もありませぬ。
何かは、言ふ迄もありませぬ。
それ縁に隨ひて、佛は縁に隨つ
てお導き下さるものと思ふ。私
がかうするの縁あればこそ

無情の法師 戒を破りながら懸
づる事なま法師の意味で、僧都
の卑下の詞。多くの戒律の中で
破る戒は多からうが。

さるべきにこそは、これも前世
の縁で仕方のない事だらう。
物さびんなく、わるいやうに取
沙汰するやうの事があつては、

人にかり移して、つき物をより
ましに追ひ移して、どんな物怪が斯
河やうのもの、どんな物怪が斯
縁に浮舟をたぶらかしたのか、
と、その事柄だけを物怪に白状さ
せてくたう。

調せられて、新り伏せられて、
おのれは、ようましに乗り移つ
て物怪の詞。

よき女の 八宮方の事。

手習

人は、むつかしき事事のづからあるべきを、いささか衰へず、
いと清けにねぢけたる所なくのみ物し給ふ。さて、限りと見え
ながらも、かくて生きたるわざなりけり」など、あぶなく、泣
くく、宣へば、見つけしより、珍らかなる、人の御有様かな。
いで、とて、さしのぞきて見給ひて、自馬げにいと警策なりける、
人の御容面かな。功德の報いにこそ斯かるかたちにも生ひ出で
給ひけめ。いかなるたがひ目にて、かく、そこなはれ給ひけむ。
もしさにやと聞きあはせらるる事もなしや」と問ひ給ふ。自馬、更
に聞ゆ。る事もなし。何かは、初瀬の観音の賜へる人なり」と
宣へば、何れ、何か。それ縁に隨ひてこそ導き給ふらめ。種なきこ
とはいかでか」など宣ひ怪しがり給ひて、修法始めたり。おほ
の道座
やけの召しにだに隨はず、深くこもりたる山を出で給ひて、す
ずろに、人斯かる人の爲になむ行ひさわぎ給ふと、物の聞えあら
む、いと聞きにくかるべし、と思し、弟子どももいひて、人に

聞かせじと隠す。僧都、「いであなたさま。大徳たち、われ無慚の
法師にて、忌むことのなかに、やぶる戒は多からめど、女の筋
につけて、まだ誘り取らず、あやまつ事なし。齡六十にあま
り、今更に人のもどき負はひは、さるべきにこそは、あらめ」と
宣へば、自馬よからぬ人の、物をびんなくいひなし侍る時には、
佛法の瑕となり侍る事なり」と、快からず思ひて、いふ。自馬、こ
の修法の程に、しるし見えずば」と、いみじき事どもを誓ひ給
ひて、夜一夜加持し給へる曉に、人にかり移して、何やうのもの
の、斯く人を惑はしたるぞと、有様ばかりいはずまほしうて、
弟子の阿闍梨、とりくに加持し給ふ。月頃は、聊かもあらはれ
ざりつる物怪、調せられて、自馬、おのれはここまでまうで来て、
かやうに調伏にあはなければならぬ筈の、昔は行ひせし法師の、聊
かなる世に恨みをとどめて、ただよひありきし程に、よき女の
あまた住み給ひし所に住みつきて、かたへは失ひてしに、この

われいかで、せむとも自分は死にたい。
たよりを得て、取りつきの都合のよい便宜を得て。

今はまかり、もう浮舟の身から立去りませう。

物はかなきしつかりしてゐない。せいはいか、はきくとも答へない。
正身、浮舟自身。多少意識づいて、胸か物纏えて、多少意識づいてあたりを見まはした所。

怪みけむ所、自分の住んで居た所も、自分は何といふ名で居たかすらも、たしかにはつきりと思ひ出せない。

想といみじと、以下浮舟の回想。

前夜の分別も、

人は、心と世を恨み給ひて、「われいかで死なむ」といふ事を夜晝宣ひしに、たよりを得て、いと暗き夜、一人ものし給ひしを、取りてしなり。されど観音、とさまかうさまにはくくみ給ひければ、この僧都に負け奉りぬ。今はまかりなむ」とののしる。

「斯くいふは何ぞ」と問へば、つきたる人、物はか・なきけにや、はかくしくも言はず。正身の心地はさわやかに、聊か物・覺えて見まはしたれば、一人見し人の顔はなくて、皆老法師、ゆがみ衰へたる者・のみ多ければ、知らぬ國に來にける心地して、いと悲し。ありし世の事・思ひいづれど、住みけむ所、たれといひし人とだに、たしかにはかくしうも覺えず。

只、我は限りとして身を投げし人ぞかし、いづくに來にけるにか、とせめて思ひいづれば、いとみじと物を思ひ歎きて、皆人の寝たりしに、妻戸を放ちて出でたりしに、風烈しう、河波も荒ら聞えしを、一人物恐ろしかりしかば、きし方行先も覺えて、

歸り入るも、遠慮すの中途、手繰り、氣強く自殺を覺悟したものであるが、

そこがましようて、死にそこなつても何でも、自分を見よ、鬼にくれよとつぶやきつつ、つくづくと物を考へこんで居つた所。抱く心地の、自分を抱くやうな氣持がした、それは何宮とかいふ方がさうなるのだと氣づいた途端に氣が變になつてしまつたものらしい。

遂に斯く、遂に目的通り自殺も遂げずに終つたのだ。

絶えて、全然何の記憶もない。
人のいふを、はたの人々の言ふ所に上ると、あれから大分日数も立つてゐるのだ、その間にどんなにいやな事を知らぬ他人に介抱され、見られた事だらう。なかく、「湯をだに夢らさず」を修飾する。無意識状態であつた間は、正氣もない有様ながら、多少物を召上げる事もあつたが、だが、少しばかりの湯をすらは却つて少しばかりの湯をすらすら上らない。

實子の端に足をさしゝろしながら、いくへき方も感はれて、歸り入らむも中空にて、心強くこの世に失せなむと思ひ立ちしを、そこがましようて人に見つけられむよりは、鬼も何もくひて、失ひてよ、と言ひつつ、つくづくと居たりしを、いと清けなる男の寄り來て、いざ給へ、おのがもとへ、と言ひて、抱く心地のせしを、宮と聞えし人のし給ふと覺えし程より、心地惑ひにけるなめり、知らぬ所にすゑあきて、この男は消え失せぬと見しを、遂に斯く本意のごともせずなりぬる、と思ひつつ、いみじう泣くと思ひし程に、そののちの事は、絶えていかにもく覺えず、人のいふを聞けば、多くの日頃も經にけり、いかに憂きさまを、知らぬ人にあつかはれ見えつらむ、と恥かしう、遂に斯くて生き返りぬるかと思ふも、口惜しければ、いみじう覺えて、なかく、しづみ給へ、る日頃は、うつし心もなきさまにて、物聊かすゐる事もありつるを、露ばかりの湯をだ

ある人々も 此處に居る女房達も、浮舟の勿體ないやうな容姿を見ると、眞心こめて介抱して惜しがつてゐた。

さばかりにて あれ程でありながら、

物まわりなど 物を召上つたりなどなさるので、却つて次第に面瘦せてゆく。河内本の如くあるべきである。妹尼は、浮舟が早く全快するやうにと願ひがつてゐるのに、
いとはほしげなる 尼にするのはお氣の毒な程の御器量ですもの。どうして尼になどされませう。五戒の殺生、偷盜、邪淫、妄語、飲酒の五つの戒、形ばかりの戒心もとなけれど、形ばかりの戒心は氣がすまぬ。いひなりの浮舟はもとく、人のいひなりになる女なので、強ひて出家を望むやうなでしやばつた事はえう仰しやうまい。

夢のやうなる 初瀬で夢に見たやうな人。

うちやりつれど ほつておいたが、
一年足らぬ 伊勢物語「百年に一年足らぬつくも愛我を戀ふらし面影に見ゆ」
目もあやに 浮舟の姿はまぶしい程美しく、
危き心地すれど 天人ならばいつ昇天してしまふか分らないから、竹取物語によつたもの。
などか 「見え給ふ」を修飾する。私達はこんな一所懸命に大事にして居ますのに、何で分けて隔てをして居られるのですか、心外な事です。
いづくに 貴女はどこ何といふお方で、どうしてあんな所にいらつしやいましたか。

前近く 庭前近くに大木のあつたその木の蔭から誰かが出て来て自分を つれてゆくやうな氣がした。

に參らず。妹尼いかなれば、斯く頼もしげなくのみはあはするぞ。
引續いて居つた熱もさめてさつぱりしてお見えになるので
うちへへぬるみなどし給へる事はさめ給ひて、さわやかに見え

給へば、嬉しう思ひ聞ゆるを」と、泣くく、たゆむ折なく
添ひ居てあつかひ聞え給ふ。ある人々も、あたらしき御さまか

たちを見れば、心を盡してぞ惜しみまもりける。心には、なほ
いかで死なむ、とぞ思ひわたり給へど、さばかりにて生きとま

りたる人の命なれば、いと執念くて、やうく頭もたげ給へば、
物まわりなどし給ふにぞなか／＼面瘦せもてゆき。いつしかと

嬉しう思ひ聞ゆるに、浮舟尼になし給ひてよ。さてのみなむ生く
やうもあるべき」と宣へば、妹尼いとほしげなる御さまを、いか

でかさはなし奉らむ」とて、只いただきばかりをそぎ、五戒ばかりを受けさせ奉る。心もとなければ、もとよりあれ／＼しき、

人の心にて、えさかしく強ひても宜はず。僧都は、「今は斯ばかりにて、いたはりやめ奉り給へ」といひあきて、のぼり給ひぬ。

夢のやうなる人を見奉るかなと、尼君は喜びて、せめて起しすゑつつ、御ぐし手づからけづり給ふ。さばかりあさましう引きゆひて、うちやりつれど、いたうも亂れず。解き果てたれば、つやくとけうらなり。一年足らぬつくも髪多かる所にて、目もあやに、いみじき天人の天降れるを見たらむやうに思ふも、危き心地すれど、妹尼などか、いと心憂く、かばかりいみじく思ひ聞ゆるに、御心をへだてては見え給ふ。いづくに、誰と聞えし人の、さる所にはいかであはせしぞ」とせめて問ふを、いと恥かしと思ひて、怪しかりし程に、皆忘れたるにやあらむ、ありけむさまなども、更に覺え侍らず。只ほのかに思ひ出づる事とては、只いかにこの世にあらじと思ひつつ、夕暮ごとに端近く眺めし程に、前近く大きな木もありし下より、人の出で来て、ゐていく心地なむせし。それより外のこととは、我ながら誰ともえ思ひ出でられ侍らず」と、いとらうたげにいひなし

いとみじうこそ それこそ大
嫌です。

竹取の翁 竹取物語中の人物で
竹を切り出すを業としてゐたが
一日竹の中から赫耶姫を見つけた。
赫耶姫は罪を得て天から下
界に降された天女であつた。
上達部の北の方 二三八頁の系
圖参照。

よき君たち 二五四頁に「尼君
の昔の婿の君、今は中将にて物
し給ひける」とある。

世と共に 夜となく晝となく感
ひ續けてゐる亡き娘の形見とも
見られるやうな人なりとも見付
け出したものだと、所在なき
の心細さに歎いて居つた所。

おびにたれど この妹尼は年ふ
ぼてゐるけれども。

昔の山里よりは 小野の住家の
さま。

所につけたる 場所がら相當な
人まねをして。

引板 鳴子。巻五夕霧巻二五八
頁。

夕霧の御息所 落葉宮の母君の
事。巻五夕霧巻二一頁に「御
息所物怪に煩ひ給ひて、小野と
いふむたりに山里持給へるに渡
り給へり」とあつた。

少將の尼君 此處に奉公してゐ
る尼。かかるわざは、貴女はこんな
かかるといふは、退屈で
す。昔も怪しかりける。自分昔も
妙な事情におかれた身であつた
ので、父八宮からは子とも思は
れず、繼父の任國管陸などで生
長した事をいふ。

て、世の中になほありけり、いかで人に知られじ。聞きつ
くる人もあらば、いとみじうこそ」とて泣い給ふ。あまり問
ふを、苦しと思したれば、先問はず。かぐや姫を見つけたりけ
む竹取の翁よりも珍らしき心地するに、いかなる、物のひまに
消え失せむとすらむと、静心なくぞ思しける。この主人もあて
なる人なりけり。ひすめの尼君は、上達部の北の方にてありけ
るが、その人亡くなり給ひてのち、ひすめ只一人をいみじくか
しづきて、よき君たちを婿にして思ひあつかひけるを、そのひ
すめの君の亡くなりければ、心憂し、いみじと思ひ入りて、
かたちをもかへ、かかる山里には住み始めたるなりけり。世と
共に戀ひわたる人の形見にも、思ひよそへつべからむ人をだに
見出でてしがなと、つれづれと心細きままに、思ひ歎きけるを、
かく覺えぬ人の、かたちけはひも、まさりざまなるを得たれば、
うつつの事とも覺えず、怪しき心地しながら、嬉しと思ふ。ぬ

びにたれど、いと清げによしありて、有様もあてはかなり。昔
の山里よりは、水の音もなごやかなり。造りさま、故ある所の
木立面白く、前栽などもをかしく、故を盡したり。秋になりゆ
けば、空のけしきもあはれなるを、門田の稻刈るとて、所につ
けたる物まねびしつづ、若き女どもは、歌うたひ興じあへり。
引板引き鳴らすともをかしく、見し東路などのことなども思
ひ出でられて。
かの夕霧の御息所のおはせし山里よりは、今すこし入りて、山
に片懸けたる家なれば、松蔭しげく、風のおともいと心細きた、
つれづれと行ひをのみしつづ、いつとなくしめやかなり。尼
君ぞ、月など明き夜は、琴など弾き給ふ。少將の尼君などいふ
人は、琵琶弾きなどしつづ遊ぶ。かかるといふは、退屈で
す。昔も怪しかりける。自分昔も
妙な事情におかれた身であつた
ので、父八宮からは子とも思は
れず、繼父の任國管陸などで生
長した事をいふ。

山ごもりしたるを、禪師の君が横川に山籠りしてゐるので、弟達が横川へひに始終山にのぼつて行つた。小野は京から横川に行く途中にあつたので。

これもいと小野も宇治と同様に心細い徒然な住居ではあるが。

いろくの狩衣姿、中將の供人達も同じ。中將も供人と同じく狩衣姿で。この下に途語を略し南面。寝殿の南座敷。晴の席で心地なからぬ、理解ありげな様子をして居つた。月日のたつにつれて、昔の事が一日々々と遠くなる一方でございませぬ。この山里の光として今も貴方をお待ち申す事の絶えない事を、當然と思ふ一方不思議にも存じます。

心のうちあはれに、心ひそかに昔の事を思ひ出して感傷に耽らない折とはありませぬのに。「あはれに」は「思ひ給へられぬ折なきを」を修飾する。あながちに、飽く迄も憂世を捨てようとした生活をしてゐられぬので御無沙汰して居ります。山ごもりも、弟禪師の山籠りが羨ましいので始終尋ねて行きますが。

山ごもりの御羨みは、山籠りを羨ましく思召すとは、却つて前世風な軽薄な人の口眞似です。昔を思し忘れぬ、昔の事を忘れずにおねね下さるお心持も、世間の軽薄な風に乗まぬ證據だとうございませぬ。水飯、飯を水漬にして夏季に食するもの。馴れにし、昔馴染の亡きわが愛の里故、食事するものも遠慮のないやうな気がして。

いふかひなく、死んだ娘よりもこの君のお立などは申分がなかつたので、今では他人にしまつたのが誠に悲しい事だ。

くはしき事、ある人々にも知らせず。

尼君の昔の婿の君、今は中將にて物し給ひける。弟の禪師君、僧都の御もとに物し給ひける。山ごもりしたるを、とぶらひに、はらからの君だち常にのぼりけり。横川に通ふ道のたよりに寄せて、中將ここにははしたり。さき打追ひて、あてやかなる男の入りくるを見いだして、忍びやかにてふはせし人の御有様けはひぞ、さやかに思ひ出でらるる。これもいと心細きすまひのつれなれど、住み馴れた尼君は、物清げにをかしうしなして、垣ほに植ゑたる撫子も面白く、女郎花、桔梗など咲きはじめたるに、いろくの狩衣姿のこのどもの若き、あまたして、君も同じ装束にて。南面に呼びすゑたれば、うちながめて居たり。年廿七八の程にて、ねびととのひ、心地なからぬさまもてつけたり。尼君、障子口に几帳立てて對面し給ふ。まづうち泣きて、長年頃の積りには、過ぎにし方いとどけ遺く

のみなむ侍るを、山里の光になほ待ち聞えさする事の、打忘れずやみ侍らぬを、かつは怪しく思ひ給ふる」と宣へば、中將「心のうち、あはれに、過ぎにし方の事ども、思ひ給へられぬ折なきを、あながちに住み離れがほなる御有様に、怠りつつなむ。山ごもりも羨ましう、常に出で立ち侍るを、「同じくは」など、慕ひまとはさるる人々に、妨げらるるやうに侍りてなむ。今日は同行者を断つて参りました。なか／＼今様だちたる御物まねびになむ。昔を思し忘れぬ御心ばへも、世に靡かせ給はざりけると、あろかならず思ひ給へらるる折多く」などいふ。人々に水飯などやうの物くはせ、君にも遣實などやうのもの出だしたれば、馴れにしあたりにて、さやうの事もつつみなき心地して、村雨の降り出づるにとどめられて、物語しめやかにし給ふ。いふかひなくなりにし人よりも、この君の御心ばへなどの、いと思ふやうなりしを、よその

九三

など忘れがたみ なせせめて忘れ形見の子供をなりと残さず死んだのかと。

問はず語りも 中將が尋ねもしなすべしにうつかり浮舟の口をすべしにしまひさうだ。我は我と 妹尼は娘の昔も、浮舟はわが身の昔を思ひ出す事が多くて、あざやきたる 或は浅やぐか、深みがない意味か。楳皮色 黒ずんだ蘇芳色。

見しには 昔着た衣裳とは變つて、へんなものだと思つて。こはくしう しやちこばつてゐるのも、故姫君の再来かと思つて居りましたところ、中將殿までお見えになつたので、本當に感慨無量です。心地のみし侍る」とある河内本に從ふべきか。

いかにもく どの道徳に付くといふ事はいやな事だ。人に見えむこそ、その下に「心要けれ」などの省略がある。

客入 中將。雨がいつまでも晴れぬのをこまめに、少將「二五」頁に「少將の尼君」とあつた人。普賢上人。妻(妹尼の娘)の存命中に仕へて居つた女房達。心満きにや 皆さんも私の薄情故と思召す事せう。

かの廊の 先刻私があの廊の端を入つて来た時、風が強く吹いて、簾垂が亂れた隙から、吹々とは思はれない女の垂れ髪の見えたのは。

ましてこまかに 一寸見てさへ目につくのだもの、まして。昔の人は 故姫君(妹尼の娘)は浮舟よりもずつと劣つてゐたのに、それをすらすら忘れかへてゐられるの、妹尼が故姫君の事を忘れかねて居てゐたのを、思ひがけない方を手に入られて、毎日の眺めぐさと思つてゐられるやうですが。

ものに思ひなしたるなむ、いとかなしき、など、忘れがたみをだにとどめ給はずなりにけむ、と戀ひしのぶ。心なりければ、たまさかに斯く物し給へるにつけても、珍らしくあはれに覺ゆべかめるまゝに、問はず語りもしいでつべし。姫君は、我は我と思ひいづるかた多くて、眺めいだし給へるさす、いとうつくし。自き單衣の、いとなさけなくあざやきたるに、袴も、楳皮色にならひたるにや、光も見えず黒きを著せ奉りたれば、斯かる事どもも、見しには變りて怪しうもあるかなと思ひつつ、こはくしういららきたる物ども著給へるしも、いとをかしき姿なり。お前なる人々、「故姫君のおはしまいたる心地のみし給ふに、中將殿をさへ見奉れば、いとあはれにこそ。同じくは昔の夫給にしておきたいもの。」とさまにておはしまさせばや。いとよき御あはひならむかし」といひあへるを、あなみみじや、世にありて、いかにもく人に見えむこそ。それにつけてぞ昔の事思ひ出でらるべき、さやう

の筋は、思ひ絶えて忘れなむ、と思ふ。

客入 中將。雨の氣色を見煩ひて、少將といひし人の聲を聞き知りて、呼び寄せ給へり。中將「昔見し人々は、皆ここに物せらるらむやと思ひながらも、かう参りくる事も難くなりたるを、心淺きにや誰もく見なし給ふらむ」など宜ふ。仕うまつり馴れにし人にて、あはれなりし昔の事ども、思ひ出でたるついでに、中將「かの廊のつま入りつる程、風・騒がしかりつる紛れに、簾垂のひまより、なべてのさまにはあるまじかりつる、人の打垂れ髪の見えつるは、世を背き給へるあたりに、たれぞとなむ見驚かれつる」と宜ふ。姫君の立ちいで給へりつるうしろでを見給へりけるなめりと思ひて、ましてこまかに見せたらば、心とまり給ひなむかし、昔の人はいとこよなく劣り給へりしをだにまだ忘れがたくし給ふめるを、と心一つに思ひて、少將「過ぎにし御事を忘れがたく、慰めかね給ふめりし程に、

斯かることこそは、こんな面白
い事があったのだ、始めて知つ
た。けにいとさかし、妹尼が明暮の
見物にしてゐるだけあつて成程
美人であつた。

何句ふらむ 拾遺雜秋「ここに
ひさがにくき世に」所もあらう
に想出深いこころにこそあつた
はしめる女が居ようとは。長居
人の物いひさ 人の噂をさすか
はしたるが所が遠だ。立居
られたからさうかといふ。
昔のやうにても 中將と浮舟と
を夫婦にして昔のやうに通はせ
た。中將の今の愛の里。
親の殿がちに 自分の世の家
心憂く物さのみ 心外にも私を
疎外していらつしやるのがな
げない。もうこれも運命と諦め
て陽気にしていらつしやる。

斯く見奉りて 貴女を手に入れ
てからは。
思ひ聞え給ふ 貴女をかはやく
思はれる方々がこの世においで
になつても、もう死んだ人とな
る。諦めるやうになつた事と
せう。
よろづの事 何事も、その當座
のやうにはあり得ない。課のもの
です。月日はたてば忘れられて
ゆくものですの意。
怪しくて、不思議にも蘇生しま
した時に、今迄の事がすつかり
夢のやうにはつきり分らないな
つて、別世界に生れ返つた人な
る。感じて、もう返つた人の氣
持がしましたので。河内本に従ふ
きである。

とまりて 中將が横川に。

手 習

覺えぬ人を得奉り給ひて、明暮の見物に思ひ聞え給ふめるを、
打解け給へる御有様を、いかで御覽じつらむ」といふ。斯かる
ことこそはありけれどを、中將の心にかしく、何人ならむ、げにいとをか
しかりつと、ちらりと見ただけに却つてほのかなりつるをなかく思ひ出づ。中將が小將にこまかに問
へど、おりのまことに答へずそのままだにもいはず。いづれお分りになるでせうあつたづから開召してむ」とのみ
いへど、うちつけに問ひ尋ねむもさあしき心地して、供人雨も
やみぬ。日も暮れぬべし」といふに、せかされてそのかされて出で給ふ。
前近の前近き女郎花を折りて、貴人何句ふらむ」と口ずさみて、獨りご
ち立てり。女主人の物いひを、さすがに思し咎むるこそ」など、
古代の人どもは、物めでをしあへり。妹尼いと清げに、あらまほ
しくもねびまさり給ひにけるかな。同じくは、昔のやうにても
見奉らばや」ととて、藤中納言の御あたりには、中將が絶えず通
ひ給ふやうなれど、中將の心に心もとどめ給はず、親の殿がちになむ物し
給ふとこそいふなれ」と尼君も宜ひて、親の心に心憂く物をのみ思し

隔てたるなむいとつらき。今はなほさるべきなめりと思しなし
て、晴れんしくもてなし給へ。この五とせ六とせ、時のまも
忘れず、戀し・悲しと思ひつる人の上も、斯く見奉りてのちよ
りは、こよなく思ひ忘れにて侍る。思ひ聞え給ふべき人を世に
おはすとも、今は世になきものにこそは、やうく思しなりぬ
らめ。よろづの事、さし當りたるやうには、えしもあらぬわざ
になむ。といふにつけても、いとど涙ぐみて、やむへたてする心持は隔て聞ゆる
心は侍らねど、怪しくて生きかへりける程に、よろづの事夢の
やうにたどられて、あらぬ世に生れたらむ人は斯かる心地。す
らむと覺え侍れば、今は知るべき。世にあらむとも思ひ出でず、
ひたみちにこそ睦まじく思ひ聞ゆれ」と宣ふさまも、げに何心
なくうつしく、妹尼が浮舟をうちゑみてぞまもり居給へる。
中將は山におはし著きて、僧都も珍らしがりて、世の中の物語
し給ふ。その夜はとまりて、聲尊き人々に經など讀ませて、夜

禪師の君 中將の弟。
世を捨てたれど、隠遁生活はし
てゐるが、やはりあれ程物に分
つた人は滅多にないものです。

あらはなりとや、外からまる見
えだとは心配したのか、立つて奥
にはひつた後姿は、並々の女と
は見えなかつた。
あなただに、河内本は本の儘。
さやうの所に、美しい女は、おくべ
き、深きものにはありませぬ。始
め、自然に開かれて、女らしい情
合を失つてしまふ事では、うら
まつたことだ。

見ぬ事なれば、禪師の君は顔は
見てゐないから。

又の日 翌日、路京の途次。
過ぎがたく、素通りが出来なく
て、又やつて来ました。

さるべき心づかひ、多分中將が
立寄られる事と待構へて居つた
ので、故姫君の存命中が思ひ出
されるやうな御もてなしで、
袖口、尼姿故鈍色の袖口も普通
とは同じでないけれども、趣があ
る。

忘れわび侍りて、涙の事を忘れ
かねて一段と宿着の罪を深める
やうに思ひましたので、その心
を慰める爲にこの數月來、世話し
てゐる人でございます。
世にありと、自分が生きて居る
と人に知られる事を迷惑げに思
つていらつしやるので、こんな
山奥に居れば、誰も知る人はない
まいと安心して居りましたので、
どうして聞き出された事でござ
います。

うちつけ心ありて、ほんの一時
の思ひつきから尋ねて来たので
も、折角山深い道を難儀して来
たのだからといふ愚癡は、こぼし
てもよきさうです。

一夜遊び給ふ。禪師の君、こまかなる物語などするついでに、

中將「小野に立寄りて、物（成程無事でありました）あはれにもありしかな。世（世を捨てて）を捨てたれど、
なほさばかりの心ばせある人、難（は）うこそ」など宜ふついでに、

中將「風の吹きあげたりつる（言葉の）ひまより、髪いと長くをかしげなる人
こそ見えつれ。あらはなりとや思ひつらむ、立ちてあなたに、
入りつるうしろで、なべての人とは見えざりつ。さやうの所に、

よき女はあきたるまじきものにこそあめれ。明暮見るものは法
師なり。あのづから目馴れて覺ゆらむ。ふびんなる事をかし」
と宜ふ。禪師の君、「この春初瀬にまうでて、あやしく見出でた

る人となむ聞き侍りし」とて、見ぬ事なれば、こまかには言は
ず。中將「あはれなりける事かな。いかなる人にかあらむ。世の中

を憂しとてぞさる所には隠れむけむかし。昔物語の心地もする
かな」と宜ふ。
又の日（小野から京へ）歸り給ふにも、中將「過ぎがたくなむ」とておはしたり。

るべき心づかひしたりければ、昔思ひ出でたる御まかなひの、
少將の尼なども、袖口（尼姿故）さま異なれどもをかし。いとどいやめに
尼君は物し給ふ。物語のついでに、中將「忍（この場合は人目をよめるやうな風で）びたるさまに物し給ふ
らむは、誰にか」と問ひ給ふ。煩（妹尼の心に）はしけれど、ほのかにも見つ
け給ひてけるを、隠しがほならむも怪しとて、妹尼「忘れわび侍り
て、いとど罪深うのみ覺え侍りつる慰めに、この月頃見給ふる
人になむ。いかなるにか、いと物思ひ繁きさまにて、世にあり
と人に知られむことを苦しげに思ひて物せらるれば、かかる谷
の底には誰かは尋ね聞えむと思ひつつ侍るを、いかでかは聞き
あらはさせ給ひつらむ」といらふ。中將「うちつけ心ありて参りて
むにだに、山深き道のかごととは聞えつべし。まして思しよそふ
らむ方につけては、ことごとくに隔て給ふまじき事にこそは。い
かなる筋に世を恨み給ふ人にか。慰め聞えばや」など、ゆかし
げに宜ふ。出で給ふとて、墨紙（たぐひ）に、

九九

まぢなる里も 引歌未詳。

所のさまに山里といへばくつ
ろいだ感じもするものであるの
から、浮舟はかたくろしい態度だ
である。中將の吹く。月白味を
解き夜が深夜の月の面白味を
にも泊らずにこの山の端近き宿に
の端近き一はふ意味が山の端近
くにあるといふ意味と八月十日
餘日の月が既に山の端近き宿に
いてゐる意味をかねてゐるので
ある。山の中將の吹く。月白味を
ひまで眺めては山の端に月が沈
かひがいつてゐませう。待つた
か。開の板間とは月影が板間
を漏れて入る事。浮舟が板間
をこかしこ物いふ途中時々。
な。か。昔の事。昔の事をい
ひ出しさうなものだが、一番年
を取つてゐないが、却つてそれ
をこの主が中將だとも分らない
だらう。

いづら どれく。促す詞。
いかなる所に、ここがどうした
所だといふので、こんな老人が
住んでゐるのだらう。母尼は若
くて死に、母尼は老いてなほ健
在に、盤渉を宮としを律旋音
階。

昔聞き侍りし 昔拜聴致しまし
たよりも大變面白く思はれまし
のは、山の松風ばかりを聞き馴
れてゐる耳のせいであらうか。
これは、今時の琴は、あなたに
歩したがるの、調子は、昔の
なつて居ませう。今時の趣味は、
今一般に今時の趣味は、きん
琴を一般に今時の趣味は、きん
つて来てゐるもの故、却つて珍
らしく面白く聞える。孟津抄に
「琴のことは今の世にひく人も
まれなる物なれば申すめづらし
と中將のきく也」とある。月も
月も通ひて、笛のねの澄んでゐ
るのに似て、月の光も澄んでゐ
るやうな気がするので、宵感ひ
をいふ。夜になると、腕をがする事
をおうな。老女。母尼が自分
をさしていふ。

つる」とて、おざり出で給へり。中將「何か。まぢなる里も試み侍
りぬれば」など言ひすさみて、いたうすきがまじからむも、さ
すがにびんない、いと候のかに見えしさまの目とまじりばかり
に、つれづれなる心慰めに思ひ出でつるに、あまりもて離れ奥
深げなるけはひも、所のさまにあはずすさまじ、と思へば、歸
りなむとするを、笛のねさへ飽かずいとど覺えて、
深き夜の月をあはれと見ぬ人や山の端近き宿にとまらぬ
と、なまかたはなる事を、「斯くなむ聞え給ふ」といふに、心と
きめきして、
山の中將の吹く。月白味を
ひまで眺めては山の端に月が沈
かひがいつてゐませう。待つた
か。開の板間とは月影が板間
を漏れて入る事。浮舟が板間
をこかしこ物いふ途中時々。
な。か。昔の事。昔の事をい
ひ出しさうなものだが、一番年
を取つてゐないが、却つてそれ
をこの主が中將だとも分らない
だらう。

横笛は月にはいとをかしきものぞかし。いづら、くそたち、こ
と取りて参れ」といふに、それなめりと推し量りに聞けど、い
かなる所に、かかる人いかで籠りわたらむ、定めなき世ぞこれ
につけてあはれなる。盤渉調をいとをかしく吹きて、中將「いづら、
さらば」と宣ふ。むすめの尼君、これもよき程のすきものにて、
昔聞き侍りしよりも、こよなく覺え侍るは、山風をのみ聞き
馴れ侍りにける耳がらにや」とて、中將「いでや、これは僻事にな
りて侍らむ」といひながら弾く。今様は、をさく／＼なべての人
の、今は好まずなりゆくものなれば、なか／＼珍らしくあはれ
に聞ゆ。松風もいとよくもてはやす。吹き合せたる笛のねに、
月も通ひて澄める心地すれば、いよ／＼めでられて、宵感ひも
せず起き居たり。母尼「あなは、昔はあづまごとをこそは、事も
なく弾きはべりしかど、今の世には變りにたるにやあらむ、こ
の僧都の、「聞きにくし。念佛よりほかのあたわさなせそ」と、

何かは「何かは弾かむ」の意。

いとあやしき事を、妙な事を止められた僧都です。

行ひまされ、琴を弾いたところで、勤行を懈怠して罪を作るといふやうな事はありませぬ。

主殿のくそ、女房の名。

僧都をさへ、前の「この僧都の調子にくし云々」の事。

取寄せて、母尼が和琴を。只今の笛のね、今中将が吹いてゐる笛の調子をも頼着なく。

これぞのみ、自分の琴をのみ人々が感心してゐるものと思つたけふち、笛の譜、それを琴に合せて叫歌するのである。

たしなめられたので、何かはとて弾き侍らぬなり。さるは、いとよく鳴ることも侍り」と言ひ續けて、いと弾かまほしと思ひたれば、いと忍びやかに打笑ひて、中將いとあやしき事を、制し聞え給ひける僧都かな。極樂といふなる所には、菩薩なども皆斯かる事をして、天人なども舞ひ遊ぶこそ尊かンなれ。行ひまされ、罪得べきことかは。今宵聞き侍らばや」とすかせば、いとよしと思ひて、母尼いで、主殿のくそ。あづま取りて」といふにも、しはぶきは絶えず。人々は見苦しと思へど、僧都をさへ恨めしげに憂へて言ひ聞かすれば、いとほしくて、すかせたり。取寄せて、只今の笛のねをも尋ねず、ただおのが心をやりて、あづまの調べを、爪爽かに調ぶ。皆異物は聲やめつるを、これをのみめでたりと思ひて、母尼たけふち、ちり／＼たりたな」など搔返し、はやりかに弾きたる言葉ども、わりなく古めきたり。中將いとをかしう、今の世に聞えぬ言葉こそは弾き給ひ

今様の若き人は、今時の若い人は音楽などは好きでないものです。

かた／＼あれやこれや。亡き妻(故姫君)の事や浮舟の事などで。

忘れぬ、忘れ得ぬ亡き妻の事につけても、又浮舟の無情な點にはあらねせんで泣かず。忍ばれぬへくは、辛抱が出来る位ならば、何で私がこんなに好色なまじい程に申上げませう。いとどわびたるは、中將の文を見ても亡き姫の事を思ひ出して、不つちい思ひの妹尼は、一箇のねに、貴方の笛のねに亡き姫の事も思ひ出されて、お歸りなつた際も泣いて居りました。

けれ」とほむれば、耳ほのくしく、かたはらなる人に問ひ聞きて、母尼今様の若き人は、か・やうの・事をぞ好まれざりける。ここに月頃物し給ふめる姫君、かたちは、けうらに物し給ふめれど、もはら斯かるあだわさなどし給はず、うもれてなむ物し給ふめる」と、われがしこに打ちあざわらひて語るを、尼君などは、傍痛しと思す。これに事皆さめて、歸り給ふ程も、山あろし吹きて聞える笛のね、いとをかしう聞えて、起き明かしたり。つとめて、中將「昨夜は、かた／＼心亂れ侍りしかば、急ぎまかで侍りし。

忘れぬ昔のことも、笛竹のつらき節にもねぞ泣かれける。なほすこし思し知るばかり教へなさせ給へ。忍ばれぬべくば、すき／＼しきまでも、何かは」とあるを、いとどわびたるは、涙とどめがたけなる気色にて書き給ふ。

「笛のねに昔のことも思はれて歸りし程も袖ぞ濡れにし

ふる川の貴女の種姓は知りませんが私は貴女を亡き姫の再来と思つて喜んで居ります。「本立」は幹の意。

ここには浮舟が小人敷で留守してゐられる事を妹尼が気が毒がつて「ここには」は「とどめたりける」に續く。

あさましき事を浮舟はなさない我身を嘆きながら「かうなつた以上は仕方がない」と諦めて、力になる一人の人がいらつしやらないのは心細い事だといとつれ、大變退屈がうてる所へ中將から文が来た。いとど妹尼が留守故平素より一段と。

打たむと、浮舟も打つて見たかつたので。

に、胸つぶれて、おもて赤め給へるも、いと愛敬づきうつくしげなり。

ふる川の杉の本立知らねども過ぎたし人によそへてぞ見る殊なる事なきいらへを口疾くいふ。忍びてといへど、皆人慕ひ

つつ、ここには入すくなにておはせむを、心苦しがりて、心ばせある少將の尼、左衛門とである大人しき人、童ばかりぞとどめたりける。

皆出で立ちけるを眺め出でて、あさましき事を思ひながらも、今はいかか、せむと、頼もし人に思ふ人一人物し給はぬは、心細くもあるかなと、いとつれづれなるに、中將の御文あり。

「御覽せよ」といへど、聞きも入れ給はず。いとど人も見えず、のれづとときし方行先を思ひくし給ふ。苦しきまでも眺めさせ給ふかな。御基、打たせ給へ」といふ。いと怪しうこそはありしか」とは宣へど、打たむと思したれば、盤取りにやりて、

我はと思ひて、先せさせ奉りたるに、いとこよなければ、又手な

はして打つ。尼うへ疾う歸らせ給はなむ。この御基見せ奉ら

む。かの御基ぞいと強かりし。僧都の君早うよりいみじう好ま

せ給ひて、げしうはあらずと思したりしを、いとさせいだいと

こになりて、さし出でてこそ打たざらめ、御基には負けじかし

と聞え給ひしに、遂に僧都なむ二つ負けさせ給ひし。基聖が基

にはまさらせ給ふべきなめり。あなみじと興ずれば、さだ

過ぎたる尼類の見つかぬに、物好みするに、むつかしき事もし

そめてけるかな、と思ひて、心地あしとて臥し給ひぬ。時々

晴れ、しうもてなしておはしませ。あたら御身を、いみじう

沈みてもなさせ給ふこそ口惜しく、玉に瑕あらむ心地し侍れ

物好みする。老尼のくせに遊蕩で即ち基に興味を持つたりするの

心には、自分には秋の夕べの悲しさを氣附かないけれども、眺めてみると、涙がやたらに袖口をぬらせる。

寝られず。宵感ひはえもいはず、あどろくしき野しつ、前にも、うちすがひたる尼ども二人臥して、劣らじといびきあはせたり。

「一本橋あやふがりて、細流抄を投げんとせし人の、行く道に一橋の危きを見て、道より降りたるといふ事也。本説たしかならざれど心叶へり可也。」
「こもき浮舟の召使ふ童女、艶だち居たるやさ男然として今やくるこもきがもう歸つて来るかと浮舟は頻りに待つてゐられたが一向歸つて来さうもない。」

この君の浮舟がそばに寝てゐられるのを不思議がつて、聴とか、艶とか何かいふ物がそんな事をするのが、丁度そのまかげの事は東屋巻五四頁参照。

執念げなる しつこさうな。

鬼の取りもて 宇治院の時のこと。
いかさまにせむ 一體自分ほどうれしたらよいのだらうと思ふ程不愉快であるにつけても、いみじきさまにて、ひどい有様で、生かして一人前になり、むつかしとも、中將からいやな感を迫られる事、母尼に對する感じ。

親と聞えけむ人 八宮の事。以下浮舟がわが身の一生を回想するのである。年月を往復してその間に長い年月を過して。
思はずにて 思ひがけない事の爲に素通りして、句宮の事から又と訪ねなくなつた事。河内本の方がよく聞える。自分を妾にする方に思ひ定め、自分を妾にして大策に身の憂さを忘れてしまひさうになつた間際に、餘りにもやり損つた我身を振返つて見ると。

「一本橋あやふがりて、細流抄を投げんとせし人の、行く道に一橋の危きを見て、道より降りたるといふ事也。本説たしかならざれど心叶へり可也。」
「こもき浮舟の召使ふ童女、艶だち居たるやさ男然として今やくるこもきがもう歸つて来るかと浮舟は頻りに待つてゐられたが一向歸つて来さうもない。」

寝られず。宵感ひはえもいはず、あどろくしき野しつ、前にも、うちすがひたる尼ども二人臥して、劣らじといびきあはせたり。いと怖ろしう、今宵この人々にや喰はれなむ、と思ふも、惜しからぬ身なれど、例の心弱さは、一つ橋あやふがりて歸り來たりけむ物のやうに、わびしく覺ゆ。こもき供にゐては行かれたのだが、色めきて、この珍らしき男の艶だち居たる方に歸りにけり。今やくるくると待ち居給へれど。いとほがなき頼もし人なりや。中將、いひ煩ひて歸りにければ、少將「いとなさけなくうもれてもおはしますかな。あたら御かたちを」など訪りて、皆一とところに寝ぬ。

執念げなる聲にて見おこせたる、更に只今喰ひてむとするぞと

覺ゆる。鬼の取りもて來けむ程は、物覚えざりければ、なかなか心やすし、いかさまにせむ、と覺ゆるむつかしさにも、いみじきさまにて生き返り、人になりて、又ありしいろくの憂き事を思ひ亂れ、むつかしとも怖ろしとも物を思ふよ、死なましかば、これよりも怖ろしげなるものなかにこそはあらまし、と思ひやらる。昔よりの事を、まどろまれぬまに、常よりも思ひ續くるに、いと心憂く、親と聞えけむ人の御かたちも見奉らず、遙なるあづまを、かへるく、年月をゆきて、たまさかに尋ね寄りて嬉し頼もしと思ひ聞えしはらからの御あたちも、思はずにてただ過ぎ、さる方に思ひ定め給ひ、し人につけて、やうく身の憂さを懋めつべききはめに、あさましうもてそをなひたる身を、思ひもてゆけば、宮をすこしもあはれと思ひ聞えけむ心ぞいとけむからぬ、只この人の御ゆかりにさすらへ

小鳥の色を 句宮の歌一二〇頁
七行にあつた。

こよなく 句宮の事がひどく
やになつたやうな気がする。
初めより 最初から變らずに情
熱は無いながらも氣長に愛して
下さつた事は、その時には
さうであつた。あの時にはあ
であつたなどと思ひ出して見
ると、とても句宮とは比べら
ない程懐しい感じがする。
さすがに 恥かしくあるがさ
すがに、「打思ふ」を修飾する
がに。

なほわろの やはりわるい料簡
だ、こんな思ひ出でもしてはな
らぬ。
母の御聲を 玉葉釋教行基「山
鳥のぼろく」と鳴く聲聞けば父
かとぞ思ふ母かとぞ思ふ」

軒の人 母尼と共に寝て居た老
尼。

まかなひも 給仕も甚だ氣にく
はず、まだこんな目にあつた事
のないやうないやな氣がして、
ことなしに 何げなく歸るの
に。

ぬるぞ、と思へば、小鳥の色をためしに契り給ひしを、などで
をかしと思ひ聞えけむと、こよなく飽きたる心地す。初めよ
り薄きながらもどやかに物し給ひし人は、この折かの折など、
思ひ出づるぞこよなかりける。斯くてこそありけれど、聞きつ
けられ奉らむ恥かじさは、人よりまさりぬべし、さすがに、こ
の世には、ありし御さまを、よそながらだにいつかは見むとす
る、と打思ふ。なほわろの心や、かくだに思はじ、など心一つ
をかへさふ。からうじて鳥の鳴くを聞き、いと嬉し、母の御
聲を聞きたらむは、ましていかならむ、と思ひあかして、心地
もいとあし。供にてわたるべき人もとみにこねば、なほ臥し給
へるに、軒の人はいと疾く起きて、粥などむつかしき事どもを
もてはやして、貴女も早く召し上れ「馬お前に疾く聞召せ」など、寄り来ていへど、
まかなひもいと心づきなく、うたて見知らぬ心地して、母の「惱ま
しく、」など、ことなしに給ふを、強ひていふもいとこぢな
し。

一品の宮 女一宮。

山の座主 比叡山の天台座主。

后の宮の御文 明石中宮から僧
都に御祈禱依頼の御文。

恥かしくとも 僧都にあふのは
恥かしくともとにかくあつて、
尼にしてくれるやうに頼んで見
よう。
さかしら人 出家を邪魔する
人。今妹尼は初瀬詣の留守中
である。

思むこと 戒。

さやうに 戒を授けて下さるや
うに僧都に頼んで下さい。
例の方に 浮舟が自分の居間に
手づからはたと言つて自分
身では梳る事が出来ないで。

下衆らしき法師ばらなどあまた来て、僧都今日ありさせ給
ふべし。少僧等「など俄には」と問ふなれば、下衆一品の宮の御物怪
になやませ給ひける、山の座主、御修法つかまつらせ給へど、
なほ僧都参らせ給はではしるしなして、昨日二度なむ召し侍
りし。(右)夕暮の風四位少将昨夜夜更けてなむのほりあはし
まして、右のせとのい后の宮の御文など侍りければ、あやさせ給ふなり」な
ど、いと花やかにいひなす。尼の心恥かしくとも、あひめて、尼に
なし給ひてよ、と言はむ、さかしら人すくなくて、よき折にこ
そ、と思へば、起きて、母の心心地のいとあしうのみ侍るを、僧都
のありさせ給へらむに、思むこと受け侍らむとなむ思ひ侍るを、
さやうに聞え給へ」と語らひ給へば、母尼はうはのそらでほけしう打ちうなづ
く。例の方にははして、母尼の髪は妹尼にはが梳られるので髪は尼君のみけづり給ふを、他人に手他人に手
觸れさせむもうたて覺ゆるに、手づからはたえせぬ事なれば、

親に今一たび母君に今一度今迄の儘の姿を見せずじまひに
なへ、悲しい事だ。

「かがれとてしも 後撰維三退昭
「たらちねはかかれとてしもう
はたまのわが黒髪を撫てずやあ
りけむ」

まろなる 圓頂の法師達が。

母の御方に 僧都の母尼の部屋
に。 東の御方 妹尼の事。

「ここにまりて 餘處には行か
ず。此處に居残つてゐられま
す。」

つつましけれど、浮舟は恥かし
いけれども信都の方におざり寄
つて返事される。偶然お目に懸つたの
も前世の因縁かと存じました。
延命息災の御祈禱なども熱心に
致しました。

いと怪しきさまに 不思議な有
様で即ち出家の人の中で、どう
していらつしやいますや。

世の中に侍らじと 生きては居
まいと決心しました。私に、不
議に今迄長らへて居ります事
心外に思つて居りますもの。
よろづに物せさせ いらし
て下さつた御親切の程を、不
なる心にもありがたき身に、不
でも猶人様とは違つて結局は生
きて居られぬやうな気がしま
すので、尼にして下さい。

却りて罪ある 末の遂げない出
家は却つて罪作りです。心さ
思ひ立ちて 決心して發心され
た當座は志操を堅固に持つてゐ
られるけれども。

只すこし解きくだして、
親に今一たび斯うながらのさまを見えずなりなむこそ、人やり
ならずいと悲しけれ、いたゞ煩ひしけにや、髪もすこし落ちほ
そりにたる心地すれど、何ばかりも衰へず、いと多くて、六尺
ばかりなる末などぞ、いとうつくしかりける。筋なども、いと
こま・かにうつくしげなり。浮舟「かかれとてしも」と、獨りごち
居給へり。

暮れがたに僧都物し給へり。南おもて拂ひしつらひて、まろなる
る頭つきども、行きちがひ騒ぎたるも、例にかはりていと怖ろ
しき心地す。母の御方に参り給ひて、僧都「いかにぞ月頃は」など
いふ。信都「東の御方は物詣でし給ひにきとか。このおはせし人は、
なほ物し給ふや」など問ひ給ふ。母尼しか、ここにとまりてなむ。
心地あしとこそ物し給ひて、思む事受け奉らむと宣ひつる」と
語る。立ちてこなたにいまして、僧都「ここにやあはします」とて、

几帳のもとに信都が坐られるとつつましけれど、おざり寄りて、
いらへし給ふ。信都「不意にて見奉りそめてしも、さるべき昔の契
りありけるにこそと思ひ給へて、御祈など、懇に仕うまつりし
を、法師は、その事となくて、御文聞え承らむもびんなければ、
自然になむ不親切なやうなことにあろかなるやうになり侍りぬる。いと怪しきさまに、
世を背き給へる人の御あたりには、いかでおはしますらむ」と宣
ふ。浮舟「世の中に侍らじと思ひ立ち侍りし身の、いと怪しくて今
まで侍るを、心憂しと思ひ侍るものから、よろづに物せさせ給
ひける御心ばへをなむ、いふかひなき心地にも、思ひ給へ知ら
るるを、なほ世づかすのみ遂にえとまるまじく思ひ給へらるる
を、尼になさせ給ひてま。世の中に侍るとも、例の人にてはな
らふべくも侍らぬ身に。」など聞え給ふ。信都「まだいと行先遠
げなる御程に、いかでかは、ひたみちには、しかは思し立たむ。
却りて罪ある事なり。思ひ立ちて心を起し給ふ程は、強く思せ

一八九

尼になしてや、東屋巻に「うち捨て侍りなむ後は、尼になして深き山にやしす」とあつた。二九頁参照。普通の人と違つた生活をして。

なほいかで、せひ出家させて下さい。

物怪もさこそ、二四六頁に「これいかで死なむといふ事を夜晝に宣ひしにまよひを得て」とあつた。さるやうこそ、出家を望むのにはそれだけの仔細があるのだから、今まで生きてゐる。あの時疾うに死んでゐる筈の人だ。三寶のいとかしこく、出家は佛が絶讃される事です。それを法師の身でおとめ申すべきではあるまいか。三寶とは佛法僧の三意に用ひてあるが、こゝは佛の意なること。一品宮の御祈禱の

七日果てて、七日間の御修法が済んで退出した時に戒を授けてあげませう。

亂り心地の、気分がわるい。最中に出家を決行したやうな風を装つて、かひなく、折角受戒しても愛戒のかひがないかも知らぬ。

昔は事とも、若い時には河の若翁も驚えませんでした。一覺え給はざりしを、一本の儘、内本によれば、湖月抄本「をふる」は「一本」である。上か思ひ、貴女がそなたにおおきき事故、今日戒を授けてあげませう。鏡取つて、浮舟が鏡を持つて來て、切つた髪を丸むる爲に、箱の蓋を僧都の前においたので、いづらさあ、人を促す聲。御ぐしおろし、尼そぎにするので肩のあたりで髪を切るのであつた。大勢だつた人の事だから、餘人の儲で生きてゐる物もよく合せての事である。

ど、年月経れば、女の御身といふもの、いとたいいしきものに、^(なん)「など宜へば、^(私に幼少の折から)」など宜へば、^(事情におかれて)「有様に、親なども、」尼になしてや見まし」などなむ思ひ宣ひし。まして少し物思ひ知り、^(侍り)「て後は、例の人さまならで、後の世をだにと思ふ心深く侍りしを、^(死期が近づいたのか)亡くなるべき程のやうやう、近くなり侍るにや、心地のいと弱くのみなり侍るを、なほいかで」とて、打泣きつつ宣ふ。怪しく、かかるとかたち有様を、などとて身を厭はしく思ひ始め給ひけむ、物怪もさこそ言ふなりしか、と思ひ合するに、さるやうこそはあらめ、今まで、^(も)「生きるべき人かは、^(物怪が存身を見込んだのだの)あしき物の見つけそめなるに、いと怖ろしく危きことなり、と思して、^(僧都)とまれかくなれ、^(發心して)思し立ちて宣ふを、三寶のいとかしこくほめ、^(宣ひ)給ふことなり。法師にて、聞え返すべき事にあらず。御忌む事は、いと易く授け奉るべきを、^(宣ひ)急なることにて、^(下山したので)まかでたれば、今宵はかの宮に參るべく侍り。

明日よりや御修法始まるべく侍らむ。七日果ててまかんで、^(出家を)「つかうまつらむ」と宣へば、かの尼君ははしなば、必ずいひ妨げてむと、^(浮舟は後念で)いと口惜しくて、亂り心地のあしかりし程にしたるやうにて、^(心遣)いと苦しく侍れば、重くならば、忌む事かひなくや侍らむ。なほ今日は嬉しき折とこそ思ひ侍、^(う)「れ」とて、^(僧都)いみじく泣き給へば、^(僧都)「いとほしく思ひて、^(僧都)夜や更け侍りぬらむ。山よりあり侍る事、昔は事とも覺え給は、^(思)さりしを、年の老ふるままには、堪へがたく侍りければ、打体みてうちには參らむと思ひ侍るを、^(浮舟)しか思ひいそぐ事なれば、今日仕うまつりてむ」と宣ふに、^(浮舟)いと嬉しくなりぬ。鏡取つて、^(僧都)「櫛の箱の蓋さし出でたれば、^(僧都)いづら、大徳たち此處に」と呼ぶ。初め見うけ奉りし、二人ながら供にありければ、呼び入れ、^(僧都)「御ぐしおろし奉れ」といふ。げにいみじかりし、^(浮舟)人の御有様なれば、うつし人にては世におはせむもうたてこそあらめ

この阿闍梨、尼君達に供して浮舟を助けたあの阿闍梨。御かみを、浮舟と僧都との間に、は几帳を隔ててあるの、下から舟の髪を切るの、

下 下屋。わが部屋。

かかる所につけては、淋しい場所柄では、自分の知人が珍らしく訪ねて来たのを対して、一寸も御馳走などをこしらへるその指圖などしてゐる間に。

わが御うへの僧都が御自分の衣や袈裟などをほんの形式だけに浮舟にお著せ申して。

いづ方とも、母君はどちらにあられるか分らないので。

かばかりに、これ程に着手した事も面白からぬ事だ。邪魔するの面白からぬ事だ。河内本に従ふ。いさめ給へば、少將の尼をさとされたので。

と、この阿闍梨もことわりに思ふに、几帳の帷子の綻びより、御かみをかき出だし給へるが、いとあたらしくをかしげなるに、なむ、暫しは、銚をもてやすらひける。

かかる程、少將の尼は、兄の阿闍梨の來たるに逢ひて、下に居たり。左衛門は、この私の知りたる人にあへしらふとて、かかる所につけては、皆とりに、心寄せの人々珍らしく出て來たるに、はかなき事しける、見入れなどしける程に、こもき一人して、「かかる事なむ」と少將の尼に告げたりければ、惑ひて來て見るに、わが御うへのころも袈裟などを、殊更ばかりとて著せ奉りて、親の御方を拜み奉り給へ」といふに、いづ方とも知らぬ程なむ、え忍びあへ給はで泣き給ひにける。うへ歸りあ

あさましや、など斯くあぶなきことはせさせ給ふ。うへ歸りあはし、てば、いかなる事を宣はせむ」といへど、かばかりにしそめつるを、いひ亂るとも物し、と思ひて、僧都いさめ給へ

ば、寄りてもえ妨げず。流轉三界中、などいふにも、断ち果ててしものと思ひ出づるも、さすがなりけり。御くしもそぎ煩ひて、阿闍梨のどやかに、尼君たちしてなほさせ給へ」といふ。

額は僧都ぞそぎ給ふ。かかる御かたち、やつし給ひて、悔い給ふなど、尊き事ども説き聞かせ給ふ。とみにせさすべくもあらず、皆いひ知らせ給へる事を、嬉しくもしつるかなと、

これのみぞ生ける佛は、しるしありて覺え給ひける。皆人々出でしづまりぬ。夜の風のおとに、この人々、「心細き御すまひも暫しの事ぞ。今いとめでたくなり給ひなむと頼み聞えつる御身を、斯くしなさせ給ひて、残り多かる御世の未を、

いかにせさせ給はむとするぞ。老い衰へたる人だに、今は限りと思ひ果てられて、いと悲しきわざに侍り」と言ひ知らずれど、なほ只今は心やすく嬉し。世に經べきものとは思ひかけずなりぬるこそは、いとめでたき事なれ、と胸のあきたる心地ぞし給

只今は心やすく、望み通り出家が出來たので。世に經べきものとは、人並に結婚しなくてはならぬといふやうな事は考へず、済むやうになつたのが大層結構な事だ。

流轉三界中、「流轉三界中」は實報恩者、この佛は受戒の時又は僧前にて僧が唱へる。出典不明。斷ち果ててし、佛文には思愛不能、斷とあるけれども、自分は既に思愛を断つてしまつたものと浮舟が思ひ出すにつれても、さすがに悲しかつた。

これのみぞ生ける佛は、河内本に從ふ。今迄佛を頼つて居つたけれども一向効驗はなかつた。だが、この點だけは生きがひがあつたやうに思はれて、これも佛の力と思つてゐられるのであつた。僧都の一行が皆京に出で行つて、跡は靜になつた。この人々、少將の尼左衛門等。

今は限り、尼になれば、これが一生涯の終りのやうに思はれて。只今は心やすく、望み通り出家が出來たので。世に經べきものとは、人並に結婚しなくてはならぬといふやうな事は考へず、済むやうになつたのが大層結構な事だ。

物詣ての人 初瀬詣に出かけた
妹尼が。かかる身にては、私のやうな出
家の身では、貴女にも出家をお
勧め申さうと思つたのではござ
いますか、こんな若い御年で
すもの、この先どうお過しにな
るお積りですか。
いかでうしろやすく、ぜひ貴女
を安心の出来る境遇にしておい
てあげたいものだと思つておし
て。

まことの親 他人の妹尼でさへ
かうなのだから、まして貴母が
死んだ儘死骸もない事よと途方
にくれてゐられた有様を想像し
て見ると、何よりもまづそれが
誠に悲しいのであつた。

いと物はかなく、何をいうても
浮舟が返事せぬから斯くいふ。
つらき御心なれども、これは尼の
阿から地の文に書きづけた例
の筆法である。尼君の望みもい
れないで出家したやうな無情な
度にはあつたけれども、その支
度にとりかゝつたの意、その支
いと覺えず、浮舟が思ひがけず
も此處に來られた事を。

げにかの弟子の 二七九頁に下
僧が「なほ僧都參らせ給はでは
し侍りし」とあつた。二度なむ召
いちじるき 僧都の祈禱が効驗
あつて御平癒遊ばされたので。

とみにも 僧都は直には横川に
も歸る事が出來ずに禁中におい
でになると。
夜居 加持祈禱の爲に僧が終夜
次の間に待する事。

昔より頼ませ 昔から貴僧を信
頼してゐたのですが、わけて今
度の事で、來世もいよくこの
通り救つて下さるものと一層頼
もしくなりました。「頼ませ給
ふ」は自敬の語である。

今年來年 今年限りの壽命の
やうでございましてので。

御物怪の 女一宮について居つ
た物怪のしつこかつた事。つ
いと怪しく 以下宇治院であつ
た事を啓するのである。

物詣ての人 歸り給ひて、思ひさわぎ給ふ事限りなし。妹尼「かかる
身にては、勸め聞えむこそはと思ひなし侍れど、残り多かる御
身を、いかで經給はむとすらむ。あのは、世に侍らむこと今
日明日とも知りたきに、いかでうしろやすく見おき奉らむと
よろづに思ひ給へてこそ佛にも祈り聞えつれ」と、臥しまるび
つつ、いと悲しがつてゐられるにつけてもいみじげに思ひ給へるにも、まことの親の、やがて
骸もなきものと思ひ感ひ給ひけむ程推し量る。ぞ、まづいと
悲しかりける。例のいらへもせて背き居給へるさま、いと若く
うつくしげなれば、妹尼「いと物はかなくぞおはしける。つらき御
心なれど、泣くつゝ御事の事などいそぎ給ふ。鈍色は手馴れに
し事なれば、小鞋袈裟などしたり。ある人々も、斯かる色を縫
ひ著せ奉るにつけても、人々と覺えず、嬉しき山里の光と明暮
見奉りつるものを、口惜しきわざかな」と、あたらしがりのつ、
僧都を恨み誇りけり。

女一宮の宮の御惱み、げにかの弟子のいひしもしるく、いちじる
き事どもありて、怠らせ給ひにければ、いよくいと尊きもの
に言ひののしる。名残も怖ろしとて、御修法延べさせ給へば、
とみにもえ歸り入らでさぶらひ給ふに、雨など降りてしめやか
なる夜、召して、夜居にさぶらはせ給ふ。日頃いたくさぶらひ
ごうじたる人は、皆休みなどして、お前に入ずくなにて、近く
起きたる人すくなき折に、
昔より頼ませ給ふなかに、この度なむいよく後の世も斯く
こそはと、頼もしき事まさりぬる」など宣はす。世の中に久
しく侍るまじきさまに、佛なども教へ給へる事ども侍るうちに、
今年來年過ぐしがたきやうになむ侍りければ、佛を紛れなく念
じ勤め侍らむとて深くこもり侍るを、かかる仰言にて、まかり
出で侍りにし」など啓し給ふ。御物怪の執念きこと、さまよく
に名のが怖ろしきことなど宣ふついでに、いと怪しく希有

この恨みわびし 浮舟の膝かぬ
のを恨みわびし 浮舟の膝かぬ
つたので。

入りくるよりぞ 中將が此處に
やつて来るなり無量の感に堪へ
なかつた。中將は紅葉の美し
のを見て案外な思ひをしたので
ある。
ここにいと心地よげ かうした
山奥に陽気にはしやいでゐる女
を見つけたならば異様な感を抱
く事だらう。やつばし浮舟のや
うに尼になつて隠遁生活をして
ゐるのがよいのだ。
思ひ給ひてなむ 湖月抄本「思
給ひてなむ」妻なき今日と
は知りつゝも、それでも昔に立
ち返つて泊つても見たい紅葉の
見だし。中將は既に家の内に
居るのである。浮舟も出家してしまつ
た事です。お泊りになる所
待つ人も今では私を待つて居
つてくれる山もあるまいと思ふ
つつも、それでも猶葉通りは出
來かねる。
それをだに私に見せて、前に浮舟
を私に見せる事を約束したる
しにしないさい。

入りて見るに 少將尼が浮舟の
部屋に入つて見ると。
薄鈍色の綾 上著である。

なかには 上著と下著との間に
は。萱草色で柑子色に同じ。
黄色の黒ばんだもの。
五重の扇(河海抄)楡扇の両端
の板を薄紙にて五重に包みて色
々の縁にて綴ぢなどして美しく
したるもの。枕草子なまめかし
き物の條「三重がさねの扇。五
重はあまり厚くなりて、もとな
ど憎げ也」

うち見るごとに 少將尼が浮舟
を。
まいて心かけ給はむ 中將の心
中を推察するのである。
まざるべき 隙見の邪魔になる
几帳等は側に取りのけてある。
いと斯くは ほんたにこれ程迄
の美人とは思はなかつた。思は
ずこそありしは 湖月本の儘だ
が、河内本に從ふべきである。
わがしたらむ 浮舟の出家は自
分の過失による事のやうに惜し
く残念に悲しいので、我慢も出
來ず、氣も狂ひさうにしてゐる
自分の様子模越しに浮舟の聞
えさうなので、そこを立ちのい

りありく法師の跡のみまれくは見ゆるを、例の姿見つけたる

は、出家の身には何にもならぬ事にの意 あいなく珍らしきに、この恨みわびし中將なりけり。浮舟が尼

ななき事もいはむとて物したりけるを、紅葉のいと面白く、小野のほか

の紅に染めましたるいろくなれば、入りくるよりぞ物あはれ

なりける。ここにいと心地よげなる人を見つけたら、ば怪しく

ぞ覺ゆべき、など思ひて、中將暇ありてつれくなる心地し侍る

に、紅葉もいかにと思ひ給ひてなむ。なほ立ちかへり旅寝も

しつべき木のもとにこそ」とて、木枯見だし給へり。尼君例の涙

もろにて、

木枯の吹きにし山の麓には立ちかくるべき蔭だにぞなき

と宜へば、

待つ人もあらじと思ふ山里の梢を見つたなほぞ過ぎ憂き

いふかひなき人の御事を、なほ盡きせず宜ひて、中將さま變り給

へらむさまを、聊か見せ給へよ」と、少將の尼に宜ふ。中將それ

をだに、契りししるしにせよ」と責め給へば、入りて見るに、

殊更・人にも見せまほしきさましてぞあはする。薄鈍色の綾、

なかには萱草など、すみたる色を着て、いとささやかに容體を

かしく、今めきたるかたちに、髪は五重の扇を廣げたるやうに、

こちたき末つきなり。こまかにうつくしき面様の、化粧をいみ

じくしたらむやうに、あかく匂ひたり。行ひなどをし給ふも、

なほ珠数は近き几帳に打懸けて、經に心を入れて讀み給へるさ

ま、繪にもかかまほし。うち見るごとに涙のとどめがたき心地

するを、まいて心かけ給はむ男は、いかに見奉り給はむ、と思

ひて、さるべき折にやありけむ、障子の懸念のもとに、あきた

る穴を教へて、まざるべき几帳など引きやりたり。いと斯くは

思はずこそありし、いみじく思ふさまなりける人をと、わが

したらむ過ちのやうに、惜しくくやくしく悲しければ、つつみも

あへず、物ぐるはしき、けはひも聞えぬべければ、のきぬ。

かばかりのさま これ程の美人
を行方知らずにして探さぬ人が
あつたらうか。又誰それの姫
まつたとか、或は嫉妬の爲に世
を捨てしまつたとか自然世間
に噂がありさうなのになどと。

世の常の世間並の男女の語ら
ひをする事は浮舟が遠慮なさる
事もあつたでせうが。
心安く 浮舟と氣樂に話が出来
ます。

きし方 亡き妻のことを忘れか
ねてかうして訪ねて来るのです
が、今は又その上にもう一つ浮
舟に對する愛情といふものを附
け加へて一層親しく訪ねて來ま
せう。
いと行末心細く 私も老いてい
つ死ぬか分らないし氣がかりな
事情にあるのですのに。

この尼君も この妹尼も浮舟と
は縁のある人なのだらう、浮舟
は一體どういふ人なのだらう。

行末の御後見は 浮舟の將來の
お世話は、明日の命も知れず頼
りない私ですが、かう申上げた
りませぬ。
私に心持は決して變
りませぬ。
さやうの事の さうした點がは
つきりしないので、何れもそ
れに遠慮する必要もありませ
んが、やはりしつくりしないや
うな氣がします。
人に知らるべき 浮舟が人に分
るやうな姫君姿で居るのでござ
いましたら、さやうに探しに來
る人があるかも知れませぬが、
今では憂世に見切りをつけて出
家して居るのです。

大方の 別の意味はなく只憂世
がいやになつて出家された貴女
は、私を嫌つてのやうに思
はれて、中將の志の懇切なる由を
人が、中將の志の懇切なる由を
浮舟に取次いだ。以下は中將の詞を
使が浮舟に取次いだ後までもい
ひつづけてある言葉である。
心深からむ御物語 「はかなき
世の厭ふにつけたる」厭ふに
よせて「の歌に對する返歌はな
さらぬ」の歌に對する返歌はな
思ひ寄らず 意外な呆れた事も
あつた身だから、こんなことを
云はれると氣味がわるい。

中將の心
かばかりのさましたる人を失ひて、尋ねぬ人ありけむや。又そ
の人かの人ひすめなむ、ゆくへも知らず隠れにたる、もしは
物怨じして世を背きにけるなど、あのづから隠れなかるべきを、
など、怪しく返す、思ふ。尼なりとも、かかるさましたらむ
人は、うたても覚えじなど、なか、見どころまさりて心苦し
かるべきを、忍びたるさまに、なほ語らひ取りてむ、と思へば、
まめやかに語らふ。中將の世の常のさまには思し憚る事もありけむ
を、斯かるさまになり給ひにたるなむ、心安く聞えつべくなむ
侍る。さやうに教へ聞え給へ。きし方、忘れがたくてかやうに
参りくるに、又今一つ志を添へてこそ、など宜ふ。妹尼いと行末
心細く、うしろめたき有様に侍るめるに、まめやかなるさまに
貴方が浮舟を
思し忘れず訪はせ給はむ、いと嬉しくこそ思ひ給へかめ。侍
らざらむのちなむ、あはれに思ひ給へらるべき」とて泣き給ふ
に、この心君も、離れぬ人なるべし、誰ならむ、と心得がたし。

「行末の御後見は、命も知りがたく頼もしげなき身なれど、さ
聞えそめ侍りなば、更に變り侍らじ。尋ね聞え給ふべき人は、
誠に物し給はぬか。さやうの事のさほつかなきになむ、憚るべ
き事には侍らねど、なほ隔てある心地し侍るべき」と宜へば、
妹尼「人に知らるべきさまにて世に經給はば、さもや尋ね出づる人
も侍らむ。今は斯かる方に思ひ限りつる有様になむ。心のおも
ひけも、さのみ見え侍るを」など語らひ給ふ。こなたにも消息
し給へり。

大方の世を背きける君なれど厭ふによせて身こそつらけれ
懇に深く聞え給ふ事など、いひ傳ふ。中將はらからと思しなせ。
はかなき世の物語なども聞えて慰めむ」などいひつづく。中將「心
深からむ御物語など、聞き分くべくもあらぬこそ口惜しけれ」
といらへて、この厭ふにつけたるいらへはし給はず。
思ひ寄らずあさましき事もありし身なれば、いとうとまじ、す

月頃たゆみなく 今迄は通えず
鬱々として物思ひに沈んでばかり居たのだが、望み通り出家されてからは。

他法文 法華經以外の經文。

年もかへりぬ 蕪二十八、浮舟二十三。

君にぞ感ふ 去年の春「君にぞ感ふ道は感はず」と詠まれた句宮の事は「いやだと諦めてはしまつたもの」。

かきくらす こんなに大降りに降る雪を眺めても昔の事が今日も思ひ出されて悲しい。われ世になくて 自分が姿を消してから一年にもなるのだが、思ひ出してくれる人もある事だらう。

べて朽木などのやうにて、人に見捨てられてやみなむ、ともてなし給ふ。されば月頃たゆみなく結ばほれ、物をのみ思したりしも、この本意の事し給ひてのちより、すこし晴れくしくなりて、尼君と、はかなくたはぶれも、しかはし、碁打ちなどしてぞ明かし暮し給ふ。行ひもいとよくして、法華經は更なり、他法文などもいと多く讀み給ふ。雪深く降り積み、人目絶えたる頃ぞ、げに思ひやる方なかりける。

年もかへりぬ。春のしるしも見えぬ、凍りわたれる水の、音せぬさへ心細くて、「君にぞ感ふ」と宣ひし人は、心憂しと、思ひ果てにたれど、なほその折などの事は忘れず。
かきくらす野山の雪を眺めてもふりにし事を今日も悲しきなど、例の慰めの手習を、行ひのひまにはし給ふ。われ世になくて年隔たりぬるを、思ひいづる人もあらむかし、など思ひ出づる時も多かり。若菜をあるそかなる籠に入れて人のもて來たりけるを、尼君見て、

りけるを、尼君見て、

山里の雪間の若菜摘みはやし猶生ひ先の頼まるるかな

とて、こなたに奉り給へりければ、
雪深き野への若菜も今よりは君が爲にぞとしもつむべき

とあるを、さぞ思すらむとあはれなるにも、
き御さまと思はましかば」と、まめやかに打泣い給ふ。聞のつ

ま近き紅梅の、色も香も、
花よりもこれに心寄せのあるは、飽かさりし匂ひのしみにける

にや。後夜に關伽奉らせ給ふ。下藤の、尼のすこし若きがある、
召出でて花・折らすれば、かことがましく散るに、いとど匂ひ

くれれば、
袖觸れし人こそ見えぬ花の香のそれかと匂ふ春の曙

大尼君のうまごの紀伊守なりけるが、此頃のぼりて來たり。三
十ばかりにて、かたち清げに誇りかなるさましたり。何事か、

山里の 山里の雪間に生えた若菜を摘み取つて賞翫して、貴女の末長き幸福をあてにして居ります。若菜は若やく意味で長壽を祝ふのである。
雪深き 雪深い野邊に生えた若菜も、親兄弟もない私は、今一つは、たゞ貴尼の爲にと摘み取つて御長壽を祝ひませう。「としもは助詞であるが、年をひびかしたもので、惜しくない命をあなたのために生きていきます」とあるにあらうして「生ひ先云々」とあるにあらう。もし浮舟が尼姿でなかつたらば、昔の春や昔の伊勢物語・古今戀五平・月やあらぬ春や昔の春ならぬ我身一つはもとの身にしておかざりし 拾遺雜春具平親王「飽かさりし君が匂ひの戀しさに梅の花をぞ今朝は折りつる」に匂ひ(細)蕪にも匂ひにても也とあるが、匂ひどもとないから勿論一人の事であり、前に匂宮の歌の想出が書かれてあるから、ここは匂宮の事と見るが當然であらう。
袖觸れし 昔馴染の人は見えぬいけれど、花の香だけはその人の袖の香とあやまたれる程に匂うてゐる。
何事か 昨年一昨年はお廻りありませんでしたか。

母尼は遺縁の爲
母尼は遺縁の爲
母尼は遺縁の爲
母尼は遺縁の爲
母尼は遺縁の爲
母尼は遺縁の爲
母尼は遺縁の爲
母尼は遺縁の爲
母尼は遺縁の爲
母尼は遺縁の爲

常陸介の妻が又來
常陸介の妻が又來
常陸介の妻が又來
常陸介の妻が又來
常陸介の妻が又來
常陸介の妻が又來
常陸介の妻が又來
常陸介の妻が又來
常陸介の妻が又來
常陸介の妻が又來

その御はての
その御はての
その御はての
その御はての
その御はての
その御はての
その御はての
その御はての
その御はての
その御はての

聖の親王 八宮

御のちのは 後の妻は妾腹でせ
御のちのは 後の妻は妾腹でせ
御のちのは 後の妻は妾腹でせ
御のちのは 後の妻は妾腹でせ
御のちのは 後の妻は妾腹でせ
御のちのは 後の妻は妾腹でせ
御のちのは 後の妻は妾腹でせ
御のちのは 後の妻は妾腹でせ
御のちのは 後の妻は妾腹でせ
御のちのは 後の妻は妾腹でせ

かのわたりの
かのわたりの
かのわたりの
かのわたりの
かのわたりの
かのわたりの
かのわたりの
かのわたりの
かのわたりの
かのわたりの

去年「昨年」など問ふに、
去年「昨年」など問ふに、
去年「昨年」など問ふに、
去年「昨年」など問ふに、
去年「昨年」など問ふに、
去年「昨年」など問ふに、
去年「昨年」など問ふに、
去年「昨年」など問ふに、
去年「昨年」など問ふに、
去年「昨年」など問ふに、

御あとうと、又忍びてす
御あとうと、又忍びてす
御あとうと、又忍びてす
御あとうと、又忍びてす
御あとうと、又忍びてす
御あとうと、又忍びてす
御あとうと、又忍びてす
御あとうと、又忍びてす
御あとうと、又忍びてす
御あとうと、又忍びてす

うへに 薫が邸上に昇られて。
見し人は 昔見た浮舟の姿も残
つて居らぬ水の上に流れ添ふ涙
は一入振きとめる事が出来ない

女はいみじく 薫は美しい人だ
から。
めてたくまつり 河内本の如く
あるべきである。

一の所 第一の所即ち攝關家。

御有様は 薫のすぐれてゐる點
を見知つて居つたのだ。

この御族 源氏の一門。

左の大い殿 左大臣殿と薫とは
どうですか。 宿徳 老成高徳の人。

女にて 慧ひの相手として。
教へたらむやうに 浮舟にいひ
聞かせよと誰かが教へたかのや
うに紀伊守が語り續ける。

身の上も わが事を語るのを聞
いてゐるとわが身の上が現世
の事とも思はれない。

忘れ給はぬ 紀伊守の話を開い
ての浮舟の心の中。薫はまだ自
分の事を忘れないでゐて下さる
のだと浮舟が嬉しく思ふにつけ
ても。
なかく、いとおつまつましくを
かの人はいひつけし 紀伊守が
「なにがしめかの女のさうぞく
一くだり調じ待てるべきを、せま
せ給ひてむや(三〇一頁)と依
頼した事をさす。
かけても、これは自分の事だな
どとは夢にもいひ出されぬ。
ひねらせ給へば(花)きぬひと
へのみゝをひねる事也。

奉るを 小桂の單衣を縫ふやう
にと浮舟に渡されたので。
うたて置ゆれば 自分の法要の
布施の衣裳であるから。

紅に櫻の 頼まれた布施の料の
色である。

あま衣 この尼姿に昔の形見の
花色衣を引きかけて昔を偲んで
見ようか。

ひき。うへにのぼり給ひて、柱に書きつけ給ひし。

見し人は影もとまらぬ水の上に落添ふ涙いとどせきあへず
となむ侍りし。言にあらはして宜ふことはすくなけれど、ただ
氣色にはいとあはれなる御さまになむ見え給ひし。女はいみじ
くめでたくまつりぬべくなむ。若く侍りし時より、優におはし
ますと見奉りしみにしかば、世の中の一の所も、何とも思ひ侍
らず、ただこの殿を頼み聞え。てなむ過ぐし侍りぬる」と語
るに、殊に深き心もなげなるかやうの人だに、御有様は見知り
にけり、と思ふ。尼君、「光る君と聞えけむ故院の御有様にはえ
な。らび給はじと覺ゆるを、只今の世に、この御族ぞめでられ
給ふなる。左の大い殿」と宣へば、それは、かたちもいと
うるはしう清らに、宿徳にて、際殊なるさまぞし給へる。兵部
卿の宮ぞいといみじくおはするや。女にて馴れ仕うまつらばや
となむ覺え侍る」など、教へたらむやうにいひ續く。あはれに

もをかしくも聞くに、身の上もこの世の事とも覺えず。滞るこ
となく語りあきて出でぬ。
忘れ給はぬ。こそはと、あはれに思ふにも、いとど母君の御心
のうち推し量らるれど、なかく、いふかひなきさまを見え聞
え奉らむは、なほいとつつかしくぞありける。かの人のいひつ
なむ、染め急ぐを見るにつけても、怪しくめづらかな
けし事などを、かけても言ひ出でられず。裁ち縫ひなどするを、
る心地すれど、かけても言ひ出でられず。裁ち縫ひなどするを、
「これ御覽じ入れよ。物をいとうつくしくひねらせ給へば」と
て、小桂の單衣奉るを、うたて覺ゆれば、心地あしとて、手も
觸れず臥し給へり。尼君、いそぐ事を打捨てて、いがか思さ
るる」など思ひ亂れ給ふ。紅に櫻の織物の桂かさねて、女
前には斯かるをこそ奉らさべけれ。あさましき・墨染なりや」と
といふ人あり。

あま衣 變れる身にやありし世の形見の袖をかけて偲ばむ
見ようか。

いとほしく「いとほしくも」の意。妹尼に對して氣の毒にも聞き合せなど、妹尼等がわが身の上を人から聞いたりして。過ぎにし方の過去の事はすっかり忘れてしまひましたが、こんな美しい衣裳などを準備なさるにつけても、少しはしんみりした氣持になります。

靈きせずどこまでも隠してゐられるのが心外です。

ここには、私がかうした俗人の著る衣裳の事などは長い間忘れてしまつて居りますので、上手には出来なかつても、娘が生きて居つてくれたらなどと思ひ出しますか。私が娘を大事に育てたと同様、私が娘を大事にかく亡くなして、斯様に娘を死なしても、まだ何處かに生きてゐるだらう、何處と居所を探したいものだと、思つて居るので、見侍るだに「河内本は」見侍りしだに」と讀む。

なかく、思ひ出すと却つていいのです。何の隠しだてなど致しませう。

はかなくとも、浮舟との縁もはかなく切れてしまつたものだ。かうぶりしたりし、元服したの、は藏のとりなしで藏人に任官させ。わが御つかさの、藏は右近衛大將であるから右近衛監である。重なるが、浮舟の弟小君の事。

お前のどやかなる、女房達もお前には居らず。人の誇り、宇治に通ふ事について人から誇りを受けました、これも前世的の因縁なのだらう、誰も好みにひかされるとさうしたものだ、と解釋して、なほ時々通つて居りました。所のさがにやと、大君も浮舟も死んだのは、宇治といふ場所柄がわるいのかと、つらく思ふやうになりましてからは。

はかなき世の、無常な世相を二つまで見て悲しうござりましたにつけ。

と書き、いとほしく、亡くもなりけむのちに、物の隠れなき世なりければ、聞き合せなどして、うとましまで隠しけるとや思はむなど、さまざま、思ひつつ、過ぎにし方のことは、絶えて忘れ侍りにしを、かやうなる事を思し急ぐにつけてこそ、ほのかにあはれなれ」と、おほどかに宜ふ。妹尼「さりとも、思しいづる事は多からむを、盡きせず隔て給ふこそ心憂けれ。ここには、かかる世の常の色あひなど、久しく忘れにければ、なほしく侍るにつけても、昔の人あましかばなど思ひ出で侍り。しかあつかひ聞え給ひけむ人、世にははすらむや。かく亡くなして見侍るだに、なほいづこにかあらむ、そこだに尋ね聞かまほしく覺え侍るを、行くへ知らで思ひ聞え給ふ人侍らむかし」と宜へば、見し程までは、一人は物し給ひき。この月頃亡せやし給ひぬらむ」とて、涙の落つるを紛らはして、なかく、思ひ出づるにつけて、うたて侍ればこそ、聞え出

でね。隔ては何事にか残り侍らむ」と、言づくなに宜ひなしつ。大將は、このはてのわざなどせさせ給ひて、はかなくともやみぬるかな、とあはれに思す。かの常陸の子どもは、かうぶりしたりしは藏人になし、わが御つかさの將監になしなど、いたはり給ひけり。童なるがなかに清けなるをば、近く使ひ馴らさむと、思したりける。雨など降りてしめやかなる夜、後の宮に参り給へり。お前のどやかなる日にて、御物語など聞え給ふついでに、あやしき山里に、年頃まかり通ひ見給へしを、人の誇り侍りしも、さるべきにこそはあらめ、誰も心の寄る方のことは、さなむあると思ひ給へなしつつ、なほ時を見給へしを、所のさがにやと、心憂く思ひ給へなりにしのは、道も遠げき心地し侍りて、久しく物し侍らぬを、さいつ頃物のたよりにまかりて、はかなき世の有様、取りかさねて思ひ給へしに、殊更道心、起すべく作りおきたりける聖のすみかとなむ覺え侍りし

かかる筋につけて、句宮は女の事にかけては大層軽々しいので心外です。

いとおもき御心 中宮は重々しい御性質の方だから、人が秘密に申上げた事は、これは不用意に話すべき話題ではないと前置して、河内本に從ふ事はあるまい。以下蕪の心。

月ごとの八日 毎月八日は六齋日(八日・十四日・十五日・廿三日・廿九日・卅日)で又薬師如來の縁日。薬師佛に 薬師如來に寄通する物があると稱して出かけられたついでを以て比叡の根本中堂に時々参られた。その兄の童 浮舟の弟小君。その人々には 浮舟の母などには急には知らせまい、都合次第の事しよう、と蕪は思召すけれども、あやしきさまに、みすばらしい姿をした尼達の中で、浮舟の所へ通つてくる男があるといふやうな事な事を聞きつけたならば大變な事だらう。

方なかりける御心の程かなと聞けば、まして聞きつけ給はむこれるのは心苦しい思ひをすることになるたらう

そいと苦しかるべけれ。かかる筋につけて、いとかるく憂きもの

のにのみ世に知られ給ひぬめれば、心憂くなむ。と宜はす。

いとおもき御心なれば、必ずしも、打解け、世がたりにても

人の忍びて啓しけむ事を、漏らさせ給はじ、など思す。

住むらむ山里はいづこにかあらむ、いかにして、さまたしから

ず尋ね寄らむ、僧都にあひてこそは、たしかなる有様も聞き合

せなどして、ともかくも訪ふべかめれ、など、ただこの事を起

き臥し思す。月ごとの八日には、必ず尊きわざさせ給へば、

薬師佛に寄せ奉るにてもてなじ給へるたよりに、中堂に、時々参

り給ひけり。それよりやがて横川にはせむと思して、かの兄

の童、わておはず。その人々には、とみに知らせじ、有様に

ぞ随はむ、と思せど、うち見む夢の心地にも、あはれをも加へ

むとにやあすけむ。さすがにその人とは見つけながら、あやし

きさまにかたち異なる人のなかにて、憂き事・聞きつけたらむ

こそいみじかるべけれ、と、よろづに道すがら思し亂れけると

や。

Faint vertical text in the upper right section of the page.

Main body of faint vertical text on the right page, including a small bracketed section near the bottom.

身の内之場

Main body of faint vertical text on the left page, with the section header '身の内之場' written vertically.

山に 燕が比叡の根本中堂に参詣されて、いつもなされるやうに御佛などを供養なさる。前巻の續きで燕二十八歳。

御祈りなどに 御祈禱などの事で、燕と僧都との間に交渉はあつたが格別さう親密な事もなかつたのに。

すぐれ給へる 燕が僧都のすぐれた職者であられた事を認められてからは非常に尊敬なさつて以前よりも一段の深交を加へられたので。

あま／＼しう 容易に動かさうとしない燕殿が、斯様にわざ／＼おいで下さつたのは長れ多い事だ。

すこし人々 燕の従者等があたり居なくなつた折に。

しか待り 湖月抄本「しか待り」と異様なる。大層風がはりな

所でございます。京には母屋の住むべきしつかりした家もございませぬが、殊に私がうしろで此處に山籠りしてゐる間は、夜中でも暗でも見舞つてやらうと思ひましてあそこに住ませてあるのでございます。おきて侍り」は湖月抄本に「おきて侍」とある。

山にははしまして、例せさせ給ふやうに、香のつはたけ經佛など供養せさせ給ふ。水動を感得される又の日は横川にははしたれば、僧都驚きかしてまゝり聞え

給ふ。年頃も、御祈りなどにつけ語らひ給ひけれど、殊にいと

親しき事はなかりけるを、この度、女一宮の御病氣の折に一品の宮の御心地の程にさ

ぶらひ給へるに、すぐれ給へるが加待に行かれた時驗物し給ひけりと見給ひてより、

こよなう尊び給ひて、今すこし深き契り加へ給ひてければ、「あ

も／＼しうあはする殿の、かくわざとあはし(ま)し・・たる事」と、

もてさわざ聞え給ふ。僧都が氣をつつてもなされる御物語などこまやかにしてあはすれば、

御湯漬など参り給ふ。燕に差上げられるすこし人々しづまりぬるに、小野のわ

たりに、知り給へる宿りや侍る」と問ひ給へば、世尊しか侍り。

いと異様なる所になむ。抽符の母屋の老い朽ちた尼がございませぬがなにがしが母なる朽尼の侍るを、京に

はかくしき住みかも侍らぬうちに、斯くて籠り侍る間は、夜

中曉にも、あひとぶらはむと思ひ給へおきて侍り」など申し給

ふ。小野附近には長近まで燕そのわたりには、ただ近き頃ほひまで、人多う住み侍り

近う居寄りて、驚が僧都の方に
味を進めて。其だつかぬ話の
やうにも思はれずし、それ
又お尋ねしては、一體どう
講かと思はるだらうと思
ふので、それやこれや氣が引
ますけれども、
たしかにてこそは、頼かめてか
ら、どうした事情でと打ちあけ
てお話ししようと思つてゐる間
に、

ここに失ひたる、私とその女を
亡くしたもののやうに云ひが
大變迷惑します。

ただ人と、人品からして普通人
とは思へなかつた。驚がかうま
と熱心に仰する所から見たら
相當重く見てゐられた女なの
だらう。
法師といひながら、人に戒を授
ける等は法師の當然な役だが、
たしかに聞き、驚は浮舟の居る
事を確かに聞かれたのだらう。
かうして御承知の上で探索なさ
るのでなく、しるすをせざるま
に、打消し隠した所で却つて無
駄だらう。

とばかり、暫く思案の末に思ひ
ついて。

勞氣 疲勞から来る病氣。

まづ怪しき事、何はさておき不
思議な事が、

親の死にかへるまは、妹尼は母
尼の死に願してゐるのを捨てお
いて浮舟を介抱して苦勞して居
りました。

魂殿におきたり、魂殿は靈屋又
廣宮。花鳥餘情「魂殿におきた
りけむ人のたとひといふは、た
とへば、人の死せるを託に入棺
して火屋などにおきたりけるが
希有にして蘇りたる事のあるべ
きなり云々」

惜しむべき、母尼は死んでも惜
しくない程の高齡ですが。

けるを、今はいとかすかにこそなりゆくめれ」など宣ひて、今
すこし近う居寄りて、忍びやかに、驚いと浮きたる心地もし侍
り、又尋ね聞えむにつけては、いかなりける事にかと、心得ず
思されぬべきに、かたぐ、憚られ侍れど、かの山里に、知るべ
き人の隠るへて侍るやうに聞き、しを、たしかにてこそは、い
かなるさまにてなども、漏らし聞えぬなど思ひ給ふる程に、御
弟子になりて、あなただけ 忍む事など授け給ひてけりと聞き侍るは誠か。
また年も若く、親などもありし人なれば、ここに失ひたるやう
に、かごとかくる人なむ侍るを」など宣ふ。僧都、さればよ、
ただ人と見えざりし、人のさまぞかし、斯くまで宣ふは、かろ
がるしくは思されざりける人にてこそあめれ、と思ふに、法師と
いひながら、前後の考へもなく 心もなく忽にかたちをやつし、ける事、と胸つぶ
れて、いらへ聞えむやう思ひまはさる。たしかに聞き給へるに
こそあめれ、かばかり心得給ひて、うかがひ尋ね給はむに、隠

れあるべき事にもあらず、なか／＼あらがひ隠さむにあいなか
るべし、など、とばかり思ひ得て、世間 いかなりける事にか侍り
けむと、この月頃うち／＼に怪しみ思ひ給ふる人の御事にや」
とて、世間 かしこに侍る尼どもの、初瀬に願侍りて、まうでて歸
りける道に、宇治の院といふ所にとどまりて侍りけるに、「母の
尼の、勞氣俄にあたりて、いたくなむ煩ふ」と、告げに人のま
うで來たりしがば、宇治に まかり向ひたりしに、まづ怪しき事なむ」
とささめきて、世間 親の死にかへるをばさしおきて、もてあつか
ひ歎きてなむ侍りし。この人も、亡くなり給へるさまながら、
さすがに息は通ひておほしければ、昔物語に、魂殿にあきたり
けむ人のたとひを思ひ出でて、さやうなる事にやと、珍らしが
り侍りて、弟子ばらのなかに驗ある者どもを呼び寄せつつ、か
はり／＼に加持せさせなどなむし侍りける。なにがしは、惜し
むべき齡ならねど、母の旅の空にて病おもきを助けて、念佛・

事の心推し入り 事情を推察致
しまするに。

三月 四五六の三箇月。

一人持ちて侍りし女子 中將の
妻の事。

同じ年の程と 妹尼の娘と同年頃と思はれる人で斯様に容姿も大層端正な綺麗な人を見つけた。初瀬の觀音が興へ下まつたものと妹尼は喜びまして。いみじき事どもをせむ加持してはしむと大變な事を頼んで來た。坂本に 西坂本の小野に。人となり 前に「三月ばかりは亡き人にてなむ」とあつた。なほこの體に私に隠れて居つた物怪がまだ身から離れないやうな氣がする。この惡靈の邪魔から遁ひたて(出家して)極樂往生を願ひた。

法師にては 法師の自分として
は、出家はこちらから勤めても
あげたい事だと考へまして。

更に知召す あなたがお世話な
さるべき關係のお方とはどうし
て私が、何のあてもなしに氣づ
きませう。

聞えありてこれが噂に上つて
は面倒な事になるかも知れぬ、
それでは困ると老尼達がやか
ましく申しますので、今迄隠し
て居つたのです。
さてこそあれ、兼は浮舟が斯
様々々の有様でまだ生きて居る
と申す、聞いたのでかうまで
尋ねて見られたのであるが、
尋ねて見ると、全然死んだ人
と諦めてしまつた浮舟だの人
それでは噂通り本當に生きて居
るのだと思召すと、餘りの事
に夢のやうな氣がしたので、
なほ僧都の氣がしたので、
のおける人なので、かうまで氣
の弱り所を見られて、平氣らしく
して居られるけれども、
この世には無き人、尼は夫婦の
語らひも出来ないから、現世に
生きて居つても、死人も同様だと
いふのである。

後の世を思はむ」など、悲しげに宜ふ事どもの侍りしかば、法
師にては勸めも申しつべき事にこそはとて、誠に出家せしめ奉
りてしに侍る。更に、知召すべき事とは、いかでか空にさとり
侍らむ。珍らしき、事のさまにもあるを、世がたりにもし侍り
ぬべかりしかど、「聞えありて煩はしかるべき事にもこそ」と、
この老人どものかく申して、この月頃音なくて侍りつるにな
む」と申し給へば、さてこそあれとほの聞きて、かくまでも
問ひ出で給へる事なれど、むげに亡き人と思ひ果てにし人を、
さば誠にあるにこそはと、ぼす程、夢の心地してあさましけ
れば、つつみもあへず涙ぐまれ給ひぬるを、なほ僧都の恥かし
げなるに、かくまで見ゆべき事かは、と思ひかへして、つれな
くもてなし給へど、かく思しける事を、この世には無き人と同
じやうになしたる事と、あやまちしたる心地して、罪深ければ、
僧都「あしき物に領せられ給ひけむも、さるべき前の世の契りなり。

も心亂れずせさせむと、佛を念じ奉り思ひ給へし程に、この人
の、有様、くはしくも見給へずなむ侍りし。事の心推し量り思
ひ給ふるに、天狗木精などやうのもの、欺きゐて奉りけるに
やとなむ承りし。助けて京にゐて奉りてのちも、三月ばかりは
亡き人にてなむ物し給ひけるを、なにがしが妹、故衛門の督の
北の方に侍りしが、尼になりて侍るなむ、一人持ちて侍りし
女子を失ひてのち、月日は多く隔て侍りしかど、悲しびに堪へ
ず歎き思ひ給へ侍るに、同じ年の程となむ見ゆる人の、かくか
たわいとうるはしく清らなるを見出で奉りて、觀音の賜へるを
喜び思ひて、「この人いたづらになし奉らじ」と感ひいられて、
泣くく、いみじき事どもを申されしかば、後、なむ、かの坂本
に氣身おりて参りまして、護身などつかうまつりしに、やう
にみづから参り侍りて、護身などつかうまつりしに、やう
生きて、正氣の人と、なほこの領じたりけるもの
の、身に離れぬ心地なむする。このあしき物の妨げをのがれて

なま玉家等流 浮舟は八宮の妾腹であるから斯くいふ。
ここに思つた事もなく、一寸に妻にと思つた事でもなく、一寸に妻と本當にかう迄落す身分の人とは思ひませんでしたのに。

さま／＼にそれ／＼關係者間にいろ／＼と疑念があつて、罪をゆるめて、尼になつて身の罪障を軽くしてゐる事です。大層よい事だと私は安心しました。母なる人、浮舟の母中將の君、斯くなる由を聞きこんだつて、小野にゐる由を聞きこんだつて、今迄隠しておかした御意向に、吾が子にと思つたこと、母のやうで面倒な事になりませう。親子の中の、母子の間の思愛の情は切れないのです。大變都合な案内役だと御迷惑には思はれるでせうか。かばかり聞きて、かうまで聞きておけりながら、よい加減に捨てる事の出來ようとは思つてゐなかつた事情の女ですもの。

いとあはれと、薫が浮舟を大層懐かしがつてゐられる様子故。
かたちをかへ、髪や鬚を剃つた男子です。出家姿に身を居るけれども、愛執の心は失せない。人の女の御身は、どうだらう、薫の爲に折角の道心がぐらつて、氣の毒にも罪障を作る事にもなりさうな事だ。つまた、依頼を受けるものだと、僧都は當惑を感じた。

いと心もとなければ、薫は氣が氣でなく思ふけれど、是非々々々々元から鳥が立つたやうにやきもきするの、不體裁故。
御供にゐて、實は薫は小君をお供につれて來られたのであつたのだ。三〇頁に「うち見む夢の心地にもあはれをも加へむとにやありけむ」とあつた。他兄弟どもよりは、浮舟の兄弟中、どれよりも器量のよい子であるが、その子をお供に呼んで、これをかつかつ、お供に呼んで、この子を使いやりませう。

思ふに、高き家の子にこそ物し給ひけめ。いかなるあやまちにて、斯くまではふれ給ひけむにか」と問ひ申し給へば、
王家等流などいふべき筋にやありけむ。ここにも、もとよりわざと思ひし事にも侍りず、物はかなくて見つけそめては侍りしかど、又いと斯くまで落ちあぶるべき際とは思ひ給へざりしを、珍らかに跡もなく消え失せにしかば、身を投げたるにやなど、さま／＼に疑ひ多くて、たしかなる事はえ聞き侍らざりつるになむ。罪かろめて物すなれば、いとよしと心安くなむみづからは思ひ給へなりぬるを、母なる人なむいみじく戀ひ悲しぶなるを、斯くなむ聞き出でたると告げ知らせまほしく侍れど、月頃隠させ給ひける本意たがふやうに、物さわがしくや侍らむ。親子の中の思ひ絶えず、悲しびに堪へて、とふらひ物しなどし侍りなむかし」など宣ひて、さて、馬いとびんなきしるべとは思すとも、かの坂本にあり給へ。かばかり聞きて、なのめに思ひ

過ぐすべくは、侍らざりし人なるを、夢のやうなる事どもを、今だに語り合せむとなむ思ひ給ふる」と宣ふ氣色、いとあはれと思ひ給へれば、かたちをかへ世を背きにきとあ、ぼえたれど、髪鬚を剃りたる法師だに、あやしき心は失せぬもあなり、まして女の御身といふものは、いかがあるらむ、いとほしう罪得ぬべきわざにもあるべきかな、とあぢきなく心亂れぬ。
む事、今日明日、さはり侍り。月立ちての程に、御消息を申させ侍らむ」と申し給ふ。いと心もとなければ、なほ、とうちつけにいられむもさあしければ、「さらば」とて歸り給ふ。かのせうとの童、御供にゐてあはしたりけり。他兄弟どもよりは、かたちも清げなるを、呼び出で給ひて、この子があの子の身内の子で、人の近きゆかりなるを、これをつつ、物せむ。御文一くだり賜へ。その人とはなくて、ただ尋ね聞ゆる人なむあるとばかりの心を知らせ給へ」と宣へば、なにかしこのしるへにて、必

のどかならぬ山坂を下るので
松明の火が高低前後左右に動搖
するのである。

ひきぼし 干した海藻。

いとよき折 丁度よい折に貰つて
仕合せしました。
いとこの世遠く 實に憂世離れ
がして居つて田舎くさい口のき
いふだ。もしかしあの人達
のいふやうな山路を分けて宇治に
時々こんな山路が来られてた
開分ける事の出来たその隨身の
聲もさう思つて聞けばまじつ
てあるやうな氣もする。月日が
たてば忘れるのが常だが、これ
は反の記憶が蘇るにつれて一
阿彌陀佛に 佛前の念佛に氣を
紛らして。いつも無口なのだ
が今一段と。横川に通ふ人以外
は横川に見られない。だからさう
した人を見ると親しみを感ずる
かの殿は 薫はお供の小君を此
處からすぐ小野にやらうと思

遙に見やられる谷の軒端より、用心深く先達をしながらさき心殊に追ひて、いと多うと
もしたる火の、松明の火のどかならぬ光を見ると、尼君たちも端に出
で居たり。妹見⁽³⁾たがおはします。にかあらむ。御前⁽⁴⁾などいと多く
こそ見ゆれ。晝あな⁽⁵⁾たにひきぼし奉れたりつる返事に、「大將殿
おはしまして、御あるじの事俄にするを、いとよき折⁽⁶⁾。」と
こそありつれ。人々大將殿とは、この女二の宮の御夫にやおはし
つらむ」などいふも、いとこの世遠く、田舎びにたるや、誠に
さにやあらむ、時々斯かる山路わけおはせし時、いと⁽⁷⁾しるかり
し隨身の聲も、うちつけにまじりて聞ゆ、月日の過ぎゆくま
に、昔の事、斯く思ひ忘れぬも、今は何にすべき事ぞ、と心憂
ければ、阿彌陀佛に思ひまぎらはして、いとど物も言はで居た
り。横川に通ふ人のみなむ、小野附近では近かしい難しみであつたこのわたりに
は近きたよりなりける。
かの殿は、この子をやがてやらむと思しけれど、お件の人達が山山あるから人目多くてび

睡まじく思す 薫が心安く使つ
てゐられる人でさう身分の重く
ない人二三程を送りとして終
添はせ、その上に以前にも始終
浮舟の處へ遣はした隨身をも添
へてやられた。兄弟の場合も妹といふ。
ここは浮舟の事。
母には 浮舟の母には實否をた
どかめないうちは言ふな。喜ぶ
どころか却つて驚き騒いで、ま
でも知る事になるだらう。
うせ給ひにけり 浮舟が行方知
れずになつたと聞いて悲しがつ
て居つたところ、薫がかう仰し
やるので、泣くのを粉らす爲で
荒らかに、泣くのを粉らす爲で
昨夜大將殿の 昨夜薫のお使
をして小君があな⁽⁸⁾の所へ夢られ
はしませんでしたか一段々事情
を聞いて見ますと、授戒は早ま
つたと、今更何にもならぬ事
です。気がくれして居ります。

んなければ、早の口で殿に歸り給ひて、又の日殊更にぞ出だし立て給ふ。
睡まじく思す人の事々しからぬ二三人ばかり送りにて、昔も常
に遣はしし隨身添へ給へり。誰も居ない所に薫が小君を人聞かぬまに呼び寄せ給ひて、お前
こがうせにし妹の顔は覺ゆや。今は世になき人と思ひ果てにし
を、いとたしかにこそ物し給ふなれ。うとき人には聞かせじと
思ふを、小野に往つていきて尋ねよ。母にはまだしきに言ふな。なか、驚
き騒がむ程に、知るまじき人も知りなむ。その親の御思ひのい
とほしさにこそ斯くも尋ねれ」と、早速にまだきにいと口がため給ふ
を、小君はをさなき心地にも、はらからは多かれど、浮舟の言葉をこの君のかたち
をば、似るものなしと思ひしみたりに、うせ給ひにけりと聞
きて、いと悲しと思ひわたるに、浮舟生存の由をかく宜へば、いと嬉しきにも
涙の落つるを、小君は恥かしと思ひて、てれかくしに紛らはしに、小君ををと、荒
らかに聞え居たり。
かしこには、早速にまだつとめて、僧都の御もとより、昨夜大將殿

と姫君にお傳へ下さい。直接申上げねばならぬ事もありませう。今日明日も「まかりませむ事今日明日は侍」とあつた。「あちきたくは「隠し侍り」を修飾する。

これは何事ぞ、妹尼が薫の關係と知つて驚いたのである。物の聞え、自分の事が評判になつたのかと浮舟は當惑して、物隠ししけると今迄身分を隠して居たのだと妹尼等に恨まれる事と思ひ續けて見ると、返事のしやうもなくておられるのは、心驚く、隠しておられるのはな

怪しけれど、信都の消息は今来たばかりなのに、また信都からこれこそは、また信都からこゝに薫の御文なのだらう。こなたに、こゝらにお通り下さぬなら、美しく着飾つた子供が妹尼の方へ歩んで来た。かやうにては、御簾の外におかひるやうな他人行儀のおあしらは仰しやいまして、やうに信都

の御使にて、小君やまうで給へりし。「事の心承りしに、あぢきなく、却りて隠し侍りてなむ」と姫君に聞え給へ。みづから聞えさすべき事も多かれど、今日明日過ぐしてさぶらふべし」と書き給へり。これは何事ぞ、と尼君驚きて、「こなたへもてわたりて見せ奉り給へば、おもてうち赤みて、物の聞え、あるにや、と苦しう、物隠ししけると恨みられむと思ひ續くるに、いらへむ方なくて居給へるに、妹尼は事情が分らないので、心憂く思し隔つる事」と、いみじく恨みて、事の心を知らねば、あわたたしきまで思ひ居たる程に、小馬山より、信都の御消息にて参りたる人なむある」と言ひ入れたる。怪しけれど、妹尼「これこそはさばたしかなる御消息ならぬ」とて、「こなたに」と言はせられたれば、いと清げにしなやかなる童の、えならずさうぞきたるぞ、歩み來たる。圓座さし出でたれば、簾垂のもとにのつゐて、小馬かやうにてはさぶらふまじくこそは信都は宜ひしか」といへば、尼君ぞいら

入道の經書、浮舟の事。あらじ、入道ひだらうなどと否定もしやうもない。あなたも平素も、それな仕打をなさると、ほんといやな情ないやうな思ひがします。今朝、信都の文は昨日認めたと、御深かりける。御愛情の深かつたお仲なの、背を向けて、出なされたといふ事は、功徳になど、これか却つて佛の阿耨多羅三藐三菩提に、加へて受けてねばならぬ事情にある事を聞いて驚いて居ります。

へなどし給ふ。文取り入れて見れば、「入道の姫君の御方に、山より」とて、名書き給へり。あらじ、などあらがふべきやうもなし。いとほしたなく覺えて、いよ／＼奥の方に引き入られて、人に顔も見合せ給はず。妹尼「常もほこりかならず物し給ふ人がならぬ、いとうたて心憂し」などいひて、信都の御文見れば、「今朝ここに大將殿の物し給ひて、御有様尋ね問ひ給ふに、初めより、ありしやうくはしく聞え侍りぬ。御志深かりける御中を背き給ひて、あやしき山賤のなかに出家し給へる事、却りては佛の責め添ふべき事なるをなむ承り驚き侍る。いかかはせむ。もとの御契りあやまち給はで、愛執の罪を晴るかし聞え給ひて、一日の出家の功徳は量り無きものなれば、なほ頼ませ給へとなむ。こと／＼にはみづからさぶらひて申し侍らむ。かく／＼この小君聞え給ひてむ」と書いたり。まがふべくもあらず書きあきらめ給へれど、他人は心も得ず。妹尼「この君は誰にか

法の師と佛道に導いて黄ふ積
りて僧都を尋ねて来た山路をた
よつて、思ひもよらぬ懸の山に
まごつてゐる事よ。
この人、小君。斯くつぶさか
かくつぶさかと、斯くつぶさか
お書きになつたのであるので、浮舟
は、人遣ひだなどごまかしや
うも、人遣ひだなどごまかしや
その人にもあらぬ。變り果てた
わが尼姿を、心ならずも小君に
見られた時のきまりわるさなど
を、思ひ入れて、いつも憂鬱な心
は、一入いひやうもないもので
ある。

いと世づかぬ、ほんとに人とは
違つた御方だ、と妹尼達は見か
ねて居つた。
いかが聞えむ、何と御返事申上
げませう。
今聞えむ、今すぐ御返事申上げ
ませう。
更なる事、一つも記憶に浮
ぶ事もなく、一體どうした夢で
あつたかと、全く合點がゆさま
せぬ。すこし落着いたら、この
お文なども何の意味やら、分る
事もありませう。今日はやは
此儘お持ち帰りなさい。
所たがへにも、お門違ひの手紙
であるかとも知れないのに、それ
止千萬元事で受取つては誠に笑

あまりけしからぬは、あまりけ
しからぬお仕打なると、附
添つてゐる私共なると、越度
免れる事は出来ませぬ。

あるじ、庵主。妹尼をさす。
物怪にて、浮舟には憑物がつ
てゐるのでせう。

尋ね聞え、貴女を探しに來られ
る人があつたら大變面倒な事だ
と嘆いて居りましたところ、案
の定、斯様にほんとお氣の毒
な御方達、葉や小君を指す、今
そらつしや、いましたのを、今
そらつしや、いましたのを、今
日頃も、浮舟は平素も始終病氣
してゐるやうですが、こん
な事の爲に、一人心を痛められ
爲か、御座つても、より正體も
所につけて、田舎にふさはしい
風流な御馳走などをしたけれど
わざと、奪れさせ、わざと、使
立てられたし、何か御返
事申上げようと思つても、申上
仰しや、つて下さい。ほんの、口
かくなむと、「小君が、斯様々々
申されませう」と、浮舟に取次ぐ
れども。

「法の師と尋ねる道をしるべにて思はぬ山に踏惑ふかな、
この人は、見や忘れ給ひぬらむ。ここには、ゆくへなき御形見
に見るものにてなむ」など、いとこまやかなり。かくつぶ
と書き給へるさまの、紛らはさむ方なきに、さりとて、その人
にもあらぬさまを、思ひの外に見つけられ聞えたらむ程のはし
たなさなどを思ひ亂れて、いとど晴れくしからぬ心は、いひ
やるべき方もなし。さすがに打泣きてひれ臥し給へれば、いと
世づかぬ御有様かな、と見煩ひぬ。妹尼、いかが聞えむ」など責め
られて、浮舟「心地のかき亂るやうにし侍る程ためらひて、今聞え
む。昔の事思ひいづれど、更に覺ゆる事なく、怪しう、いか
なりける夢にかとのみ心も得ずなむ。すこししづまりてや、こ
の御文なども見知らるる事もあらむ。今日はなほ持て参り給ひ
ぬ。所たがへにもあらむに、いと傍痛かるべし」とて、廣げな

がら尼君にさしやり給へれば、人々「いと見苦しき御事かな。あま
りけしからぬは、見奉る人も、罪さりところなかるべし」など
言ひさわぐも、いとうたて聞きにくく覺ゆれば、顔も引き入れ
て臥し給へり。あるじぞ、この君に物語すこし聞えて、妹尼物怪
にておはすらむ。例のさまに見え給ふ折なく、惱みわたり給ひて、
御かたちも異になり給へるを、尋ね聞え給ふ人あらば、いと煩
はしかるべき御事と、見奉り嘆き侍りしも、かくいとあ
はれに心苦しき御事どもの侍りけるを、今なむいと忝く思ひ侍
る。日頃も心地うちにはへ惱ませ給ふめるを、いとど斯かる事ど
もに思し亂るるにや、常よりも物覚えさせ給はぬさまにてなむ」
と聞ゆ。所につけてをかきあるじなどしたれど、をさなき心
地は、そこはかとなくあわてたる心地して、小君「わざと奪れさせ
給へるしるしに、何事をか聞えさせむとすらむ。ただ一言を
宣はせよかし」などいへば、妹尼「げに」などいひて、かくなむと

「法の師と尋ねる道をしるべにて思はぬ山に踏惑ふかな、
この人は、見や忘れ給ひぬらむ。ここには、ゆくへなき御形見
に見るものにてなむ」など、いとこまやかなり。かくつぶ
と書き給へるさまの、紛らはさむ方なきに、さりとて、その人
にもあらぬさまを、思ひの外に見つけられ聞えたらむ程のはし
たなさなどを思ひ亂れて、いとど晴れくしからぬ心は、いひ
やるべき方もなし。さすがに打泣きてひれ臥し給へれば、いと
世づかぬ御有様かな、と見煩ひぬ。妹尼、いかが聞えむ」など責め
られて、浮舟「心地のかき亂るやうにし侍る程ためらひて、今聞え
む。昔の事思ひいづれど、更に覺ゆる事なく、怪しう、いか
なりける夢にかとのみ心も得ずなむ。すこししづまりてや、こ
の御文なども見知らるる事もあらむ。今日はなほ持て参り給ひ
ぬ。所たがへにもあらむに、いと傍痛かるべし」とて、廣げな

終

